く、些の障礙なくして直に吾人が胸奥の理想に浸透し得るなり。吾人は其の何くより來り、何くに向て行き、又何が故に然るかを知らず、只其の美なるを現に認むる時に當つて、吾人の心は言ふべからざるの快感を覺ゆるなり、是れ他なし、吾人が單純なる本性に適合するが故のみ。

然り、美なる者は尤も容易に吾人に理會せらるゝを要す。凡て容易に理會せらるゝ者には素より幾多の要素ありと雖も、吾人の經驗せる事實に適合することも其一要素なるは疑ふべからざる也。何となれば若し吾人が少しも見聞せざる事は、之を理會するに當つて自ら多少の盡力を要すべければなり。是事は後に至て吾論旨の一部を助くるものなれば、讀者の預め記憶し置かれむことを望む。

以上は予が悲哀の快感の主因なりとする審美的觀念の性質に就て略言したるのみ。此審美的觀念が何故に悲哀の快感を起し得べきやは、烱眼の讀者の既に推知したる所なるべしと雖も、左に其要領を陳べむ。

（一）既に戲曲の審美的なるを認めながら、而して又審美的事物の吾人に快樂を與ふることを認めながら、戲曲より生ずる快樂を擧げて（大西氏の如く）全然他の全く異なりたる社會的性情に歸するは、一見して其の不當なるを見るべきなり。顧ふに大西氏が所謂『窮屈なる利己の壓束を脫して、我心は人類の大なるが如くに大に、社會の廣きが如くに廣きを覺ゆる』は、其原因の社會的性情に在らずして、寧ろ審美的觀念の滿足によりて吾人が利己心を失ひ外物と合體する狀態に非る乎。よし一歩を讓りて之を考ふるも、予は有限有礙なる人世を目的とせる社會的性情は、果して吾人をして無意識中に絕對の理想を仰がしむるが如き宏大なる靈力ありやを疑ふものなり。

（二）何故に悲哀の快感は、同感の情の薄弱なる詩歌戲曲に於て却て強大に、同感の情の強大なる現在の事實に於て薄弱なりや。是れ社會的性情及び道德的觀念の共に閉口したる問題なりき。然れども審美的觀念を以てする時は明に其理由を知るを得べし。何となれば美は素と人世の利害得失に關せざる卽ち現實ならざる理想中に於てのみ存在する者なればなり。

（三）若し單に社會的道德的の性情によりてのみ悲哀の快感を生ずる者とせば、演劇の快樂は、一に俳優の技藝に賴り、其の容貌如何の如きは少しも影響する所なかるべき理なり。吾

人今『朝顔日記』の『宿屋』を見たりとせよ。若し次郎左衛門にして容姿彼が如く秀麗なるの代りに醜悪なること岩代の如く、深雪にして其顔貌渠が如く婉妍可憐なるの代りに坊間を「吹き流す」女按摩の如くならしめば如何。吾人が感ずる快樂は極めて小少なるべき也。吾人は他の容貌の美なるが故に之を憐み、醜きが爲に之を悪むの理由あるか。是れ豈悲哀の快感は主として審美的觀念に存するの一證に非ずや。

社會的性情に十分の感觸を受けながら、之によりて生ずる快樂の極めて薄弱なるの例は、吾人の平生演戯に於て實驗する所なり。試に見よ、彼の『志渡寺』のお辻の如き、『天下茶屋』の伊織の如き、一は其の養ひ君の爲に一身を犧牲に供し、一は父の仇を狙ひて却て仇の爲に殘殺せらる。社會上より見るも、道德上より見るも、其事情の愁傷感嘆すべき是より甚しきはなし。吾人は之を見る毎に殆ど悲慘酸鼻の情に堪へざる也。然れども之が爲に感ずる快樂の極めて薄弱なるは如何なる故ぞ。是れ豈お辻と云ひ伊織と云ひ、一は暴露に過ぎ、一は殺伐に失し、共に只吾人が社會的性情を感動するに止りて、吾人が快樂の本源なる審美的觀念を滿足する能はざるが爲に非ずや。斯の如き例は少からず、讀者若し『伊賀越』の平作

の死と『太閤記』の十次郎の死を比較せば、他の一例を得べき也。

（四）演劇中の悪人が何故に吾人をして不快の念を起さしめざるやは、道德的觀念の說明する能はざる疑問なりき。是れ道德的觀念は只好悪の情を左右し得るも、快不快の情には少しも關涉する能はざれば也。吾人は信ず、戯曲中の人物は其性質の善悪正邪を論ぜず、其動作にして審美的ならば、吾人は其美なるの點に於て必ず多少の快樂を覺ゆる也、是を以て吾人は師直を見て悪みながらも快樂を感ずる也。

（五）吾人は信ず、悲哀の情と之に伴ふ快感とは、全く其起原を異にする者なり。斯く結論すれば、難者或は問はむ、戯曲詩歌にありて悲哀の情大なると同時に快感の之に伴て大なるは何故ぞ、其起原を異にし、個々獨立せる悲哀と快感の二物が兩々相關するが如き狀あるは何ぞやと。此疑問を解くに非ざれば、予が議論は完全なりと云ふ能はざらむ。吾人は信ず、是れ他なし、吾人が先に讀者に注意し置きしが如く、美なるものは最も理會し易き者なるが故に能く吾人が經驗せる事實に適合せざるべからざればなり、（勿論美を傷けざるの範圍内に於て）。同感の情は吾人が嘗て自ら經驗したる事情に於て最大なるもの也。彼の悲しき戯曲

ほど快きは、是れ美なる（即ち樂しき）戲曲の中には、自ら吾人が社會的性情を興奮すべき寫實的分子の含有しあればなり。故に吾人は悲しきが爲に樂しきに非ずして、寧ろ樂しきが爲に悲しき也。

（結論）之を要するに、戲曲に於ける悲哀と快感とは各〻其の起因する所を異にす。前者は主として社會的性情に本き、後者は主として審美的觀念に存す。決して悲哀其物が快きに非ずして、悲哀なる戲曲中に存する美其物の快きのみ。吾人は美なるものを見ては只之を樂み、悲哀なる美（即ち悲劇）を見ては其悲哀を悲むと同時に其美を樂む也。

（明治二十五年十二月）

美術と道德

黑田清輝氏の裸體畫、一たび博覽會の美術館に顯はれてより、可否褒貶の評判一時は喧しき迄に盛なりしが、そを難ずる人の論點は主に風紀に關せるのみにして、學理上より道德と美術の關係問題を論じたる人とては絶えて見當らざりき。獨り大阪朝日新聞は去んぬる頃『美術辨妄』と題し、其問題に對する意見を述べて曰く、

眞善美の三相は素と一體、其の觀る所の面によりて名を異にするのみ。故に善なるものは必ず美、眞なるものは必ず美、善なるものは必ず眞且美なり。更に美術上より言はば、美術の美なる所、やがて其の眞且善なる所なり。僞且惡の性を具するものには美術と稱すべきもの無し。若し强ひて美は眞善に關係無しとし、僞惡なるものに許すに美術の名を以てせんには、延いて世道人心を害すること尠からざらん。されば技工の美如何に巧妙を極むとも、內容の理想に缺點あらば眞正の美術品とすべからず。理想とは眞善の抱合を謂ふなり、近時論者往々美術の根據を卑俗なる寫實に取るものあり、よりて其妄を辨ず。云々。（『早稻田文學』第九十號抄錄に據る）

是れ學理として何等の根據無き極めて幼稚なる俗論なりと雖も、世人の信ずる所、通例是の說に外ならざるが如し。想ふに道德と美術との關係は、やがて是れ哲學上の大問題の一にして、美術の眞相を理會する上に於て一應は明らめ置かねばならぬことなり。玆に之を詳說せんことは素より能はざれども、吾等の信ずる所を簡說せんに、眞善美の三者は理想に於ては相一致せんと欲すと雖も、而も現實に於ては多少相分離するを免れず。人は進化の生物なり、而して萬有進化の過去現在の歷史に據りて將來發達の經行を案ずるに、吾人は其の當に到達せんと欲する究竟の目的を有し、良し是の目的は永遠に到達する能はずとするも、少くとも是の目的に向つて進化しつゝあることは疑ふべからざるの事實なるが如し。是の究竟の目的は、主觀的にはやがて理想にして、是の理想的狀態に於ては眞と善と美とは相一致せんとするの傾向を有すと言ふを得む。而も無限不退轉の精神を重ぬるも理想は遂に現實となる能はずとせば、現實世界に於て是の三者の全く相一致せんことは到底望み得べからざる事なるが如し。故に是點より觀る時は、人は三個の獨立せる原理を一心中に包容するものにして、吾れ人が有限なる人物にてあらむ限は、是の三者の間に時に多少の衝突を免るゝ能はざるべ

し。故に美にして必ずしも善ならざる者あり、善にして必ずしも眞ならざる者あり。眞善美は同一體の三異相と言へるが如き所詮俗論に過ぎざるのみ。

眞善美の三諦の各〻獨立せることは是世に於けるありのまゝの事實なり。然れどもあらねばならぬ事實としては、是の三者の獨立は果して好ましきことなりや否や、是れ自ら別種の問題に屬す。人は同時に異なりたる三つの原理を遵奉すること能はず。美術家は美、哲學者は眞、道德家は善を以て人生の第一原理と爲し、他の二を此の一に隷屬せしめむと要む、吾人は其の何れを擇ぶべきか。例へば道德を害ひても、はた害ふの虞れありても、美術の自由と獨立とは固く維持せらるべきものなるか。是れやがて實踐道德と美術との關係にして、學者たると不學者たると、將た美術家たると非美術家たるとを問はず、何人も決定せざるべからざる問題也。

美感には本質ありて目的なし。目的無きもの、以て人生の原理と爲すに足らず。智力には目的あるも命令なし。命令無きもの、以て人生の實踐的原理と爲すに足らず。道德は本質と目的と命令とを兼ね有す、是れ蓋し人生の第一原理と爲すべきか。想ふに智力は感情を

預想し、意志は智力を預想す。人が宇宙間に於て最高等の生物なるは、やがて其の意志的卽ち道德的生物なるが故なり。若し人は偶然徒爾に此世に生れ來りたるものに非ずして、當に到達すべき或理想を有すとせば、吾人は之に應ずる目的及び吾人をして是の目的に達せしむるの命令を有する者を以て生活の原理と爲さざるべからず。故に美術は道德に衝突せざる範圍內に於て、其の自由と獨立とを有すべきなり。人の人たる所は道德的生物たるにあり。道德的生物として吾人は美術を制限し、又迫害するの權利否寧ろ義務を有するものなり。

獨逸にヨルダンなる人あり。千八百九十一年一書を著はし、題して Die moderne Bühne und die Sittlichkeit（近世の演劇及び道德）と云ふ。近世歐洲の文學漸く非道德的となれるを慨し、ハウプトマン、ズーデルマン、イブセン等の諸戲曲を非難して到らざるなし。其所論稍矯激に失するの嫌無きに非ずと雖も、小說戲曲の非道德的傾向に對する反動としては注意すべき著作なるが如し。我邦美術文學の社會に於て道德の薄弱なる今日、道德と美術との關係を明にするは蓋し目下の急務ならむ。

（明治二十八年八月）

文學と美術と

吾等は本號〔太陽〕に於て、現今の繪畫に就て少しく述ぶる所あらむと欲す。

文學、美術及び美學の三つのものは、同じ根より萠え出でたる三つの幹とも見るべからむ。其のきざせる源は、何れか美的意識に非るや。所謂美的意識は、其の體を言へば渾一にして素と二つなし、されど其の相を言へば、主もなるもの別れて三つとなる。精しく言へば、可感的方便に緣りて表はるれば美術となり、文字言語の媒介に緣りて人の感情に訴ふる時は詩歌と爲り、理性の思辨に任ずる時は美學となる。されば文學と美術とは末の流れの各〻途を殊にすれども、素を糾せば同じ源の水に非るは無し。されば吾等が文學欄に於て繪畫を論らはむに、誰か是を理り無しと言ふや。

現今の繪畫と現今の小說

事偶然に過ぎざるか、または當に然かあるべき故よしの存せるに因るか、そは吾等の玆に問ふ所に非ざれども、現今の繪畫界と小說界のありさまの、怪しきまでに似通へるこそ返す返すも驚かるれ。世に所謂南派と稱せらるゝ新しき流派が、從來の繪畫界に及ぼしたる影響は、所謂觀念派と名くる新しき小說家が、文學社會に於ける勢力といかばかり似たるべきかを思へ。恒久の好み無き社會が、その內容の如何には深くも注目せず、ひたすらに其の外形の新しきを喜び稱へたるの點に於て、二つの者のいかばかり似たるべきかを思へ。其の自然に外るゝことの漸く著しきまでに表はれゆくに連れて、非難の聲も漸く高まらむとするの點に於ても、二つの者の如何ばかり似たるべきかを思へ。更に特操なく識見定まらざる斯道の青年が、時尙の日に非なるを望み見て、爭つて舊派を辭して新派の麾下に集まりたることに於ても、亦是の二つの者の如何ばかり似たるべきかを思へ。更に又、新派が永く健全なる國民の嗜好に協はむが爲には、嘗て依て以て舊派を壓倒したる特質の幾分を、今は却て自己より取り去らざるべからざるを悟りたるの事實に於ても、是の二つ者の如何ばかり似たるべきかを思へ。小說界と繪畫界とは、沙翁が喜劇中の同胞の如し、殆ど他の映像に依りて自己の

衣髮を鑑し得べからむとす。

一種異樣の改革派として所謂南派

繪畫界に於ける所謂南派と、小說界に於ける所謂觀念派とを以て改革派とするは、何人も異論無きところなるべし。而も吾れ人は、是の二派が一種異樣の改革派なることを記憶せざるべからず。

自然に歸れ、其の事の何たるを論ぜず、總じて改革派と呼ばるゝものの旗章と爲るものは常に是の一句也。一流の祖は自然に本く、彼れ自ら改革者たりしなり。然れども年經ち、代變るにつれて、流を樹て派を刻することいよ〳〵銳くいよ〳〵深し。是を以て曾て自然に本きたる流派は、遂に不自然の中に陷りて、更に自然に本ける他の改革者の破壞を要するに至る。古より今に至るまで、美術、殊に繪畫の歷史は、洋の東と西とに論無く、常に是の次第を反覆したりしなり。獨り美術のみならず、哲學に於ても亦然り。自然に歸れ、是れプロタゴラスの聲なりしなり、デカルトの聲なりしなり、カントの聲なりしなり、ルソー殊に明に

之を說きたりき。所謂アウフクレールングスペリオーデと稱する時代の呼聲は、畢竟是の『自然に歸れ』に外ならざりき。彼等は是を言はずとするも、瑰奇荒唐なる形而上的妄想を破壞して、認識論の根據の上に一切を改造せむとするものは、やがて是れ『自然に歸れ』と敎ふるものに外ならざりき。

然れども我が南派と觀ご派は、共に是の常軌を踏まざりき。彼等は共に『自然に遠かれ』と敎へたり。是れ彼等が一種異樣の改革派たる所以なり。

世人或は洋畫南派即ち印象派を以て自然派と爲すものあり、是れ吾等と全く見る所を異にするもの也。自然世界の何處に印象派の描くが如き色彩ありや。彼が筆に上る自然は、少くとも其の色彩の上に於て最も理想化されたる自然界なり、若くは最も自然化されたる理想界なり。是れ實に印象派が特長として見るべきもの、探題索位に多く力を勞せず、滿幅に平野を寫し、全紙に一樹を描くが如き、或は以て自然と稱すべきも、繪畫の主性たるべき色彩に於て已に斯の如く理想的なるを如何にすべき。吾等は多く印象派のことを知らずと雖も、自然派として呼ばるゝは、恐らく是の派の畫家の喜ばざる所ならむ歟。

南派の危機

所謂觀念小說派と所謂南派とは、共に不自然なる流派にして又共に一種異樣の改革派なれども、二者の間に著しきけじめあることも亦忘るべきに非ず。前者は形式の上に於て不自然なれ共、後者は發表の方法の上に於て不自然なり。前者は自然を破壞し、解剖し、自家の理想的模型に隨つて新たに事物を構成すと雖も、後者は飽く迄自然の成立を尊重し、容易に其の形式に立入りて之を添刪することを爲さず、飜つて一切當眼の自然界に向つて理想的潤色を施さむことを務む。故に是の派の目的は、所詮客觀の自然を離れて、自己以內に自家特有の自然を再成せむとするにあり。

任他れ、かゝる差別は吾等の今玆に論はむとする所にあらず、吾等は洋畫南派の危機に就て、斯道先達の省察を乞はむと欲す。

吾邦に於ける洋畫南派は、多くの改革派に於て普通に見る如く、其の價値は是の派の製作物其物にあるよりは、寧ろ其の美術界に及ぼしたる影響の上に存すと云はむ方、其の當を得

たるに庶幾かるべし。是の派が未だ見はれざりし以前の我が洋畫界は、たしかに一改革を要するまでに墮落しつゝありしなり。意匠に拘泥し、流派に纏綿し、形容布置の瑣尾に苦心し、小慧曲工を弄びて得々たるの弊は、たしかに因襲の遺疾として畫家の間に浸潤しつゝありしも也。是の時に際して所謂南派の出現は平板單調、沈鬱腐爛せる我が繪畫界に對して如何に大膽なる一打擊なりしぞ。題目に於ても、色彩に於ても、目覺ましきまでに快闊自由なる是の派の繪畫は、如何ばかり彼等の觀察を胖うし、如何ばかり彼等の手腕を解放せしや。斯くて我が洋畫界が將に一生面を拓かむとするの氣運に向ひぬるは、是の新派の刺戟與りて力ある也。吾等は、所謂南派が吾が美術界に於ける價値は、實に是の刺戟に存せりと思ふ。

そを如何にと云ふに、吾等の見る所にして大に謬まることなくば、南派の畫は所詮我が國民の嗜好に協ふべきものに非ざればなり。凡て一の國民の美術は、其の稟性と歴史とにより涵養せられたる國民の審美的嗜好に據りて立たざるべからざることは、毫も文學、政治と異なる所無し。千古を貫き萬邦に通じて渇仰讃美せらるべき天才の作物あらむには知らず、人種風土の異なるにつれて社會のあらゆる事物に於て其の特質を有せむ限りは、永く一國民

の嗜好を充たすべき美術は、飽く迄國民的ならざるべからず。今の所謂南派は、今のまゝにして果して國民的美術とするに足るべきもの乎。有識の士は一考せむことを要す。

黒田、久米二氏の繪畫は、果して我が邦人の審美的嗜好に投じたるが爲に賞美せられたるなる乎。歡びを以て迎へられしが如く見えたるは、むしろ彼等が其の清新なる色彩もて吾れ人の好奇心に一驚を喫せしめしに依るものには非るか。一切事物の最良の判官なる『時』は、現に爾か宣言しつゝあるに非ずや。

かつて明治美術會の會場に、本邦の美人肱を枕にして横臥するの一畫幅を見しことあり、南派の畫伯黒田氏の筆にかゝる。黄紅青紫の色線を以て密に顔面手足を彩飾し、一見人をして其の肉體なるを辨知するに苦ましめたり。南派の流を汲める人の眼には如何に美はしく見えしかを知らざれども、さしも繪畫好きの會員も、何れも呆然として顔を見合はすのみにて、期せずして ルード井ヒ・フルダーが Talisman の滑稽劇を演じたりき。人あり評して曰く、聞說らく西洋畫家は人體組織に精しと、是の畫恐くは骨を構へ肉を附せしのみにて、未だ表皮を被らせざるものならむと。或は又評して曰く、西洋の家室には五彩の窓紗を懸く、顔面

手足の彩色は、蓋し日光の窓紗を通して射入したるに依るならむと。吾等は遺憾ながら黒田氏が是等の批評に對する答辯を聞くことを得ざりきと雖も、竊にかゝる色彩を美はしと見む人の眼球の如何に造られ居るかを怪みたることありき。

黒田、久米諸氏が歸朝の際、明治美術會の展覽會に列ねたる畫中には、かゝる怪しげなる繪畫の幾個をも吾等は見たりき。恐くは是れ守舊の輩を警醒せむが爲なりしならむ。然れども兩三年後の今日、尙かゝる怪畫を弄ぶを見れば、斯の如きは果して氏が眞面目の作物として見るべきものなる乎、果して然らば、吾等は黒田氏に向つて其の精細なる說明を求めざるべからず。人は動もすれば呼で、理想々々と曰ふ。今や理想はあらゆるものの辨解の府たらむとす、世に形なきものゝ律すべき規準無ければなり。然れども必然の根據無きものは、是れむしろ空想のみ。

あはれ舊來の弊風を刷新するには生呑も可なり、活劇も可なり、南歐直傳の印象派も其の目的を達すべし。さりながら斯の國土の上に永遠なる根據と昌榮とを保たむと欲せば、咀嚼せざるべからず、同化せざるべからず、印象派自ら國民の特性につれて一改革を施さざるべ

からず。是れ豈所謂南派なるものの一大危機に非ずや。

南派の歸依者

一時洋畫界を席卷せむず見えし南派の羽振に、黒田、久米二氏の麾下に馳せ集りし青年畫家の數は、頗る夥しきものにてありき。元來南派の畫風は、北派に比すれば甚だきようなる所あり。是のきようなる所こそ我が邦人の得意とする所なるを以て、北派より南派に投じたるものの多數は、功名を成す道の割合に近きを喜びしならむ。吾等は是等の青年畫家が、南派のきようなる所を摹倣し得たるの外、果して印象派が精神氣魄を會得したるや否やを知らずと雖も、時好に投じ、氣運に媚びたるの跡の明なるは少しく惜むべしとなす。吾等は北派の不平家の如く、北派の反忠なる和田某の作畫が、博覽會より受けたる妙技二等の名譽ある批判に無禮なる疑惑を有するものに非ずと雖も、南派の青年が餘りに功名心に急にして、美術本來の目的に就て割合に冷淡なるを悲まずむばあらず。

美術家は少くとも其の精神の一半を功名以外に託する所無かるべからず。功名なるもの、

多く現在の好尚に依つて立つ。偏に時尚に阿附するの美術家は、其の所作に如何にして恒久の價値を附するを得べき。斯の如きものは一朝にして生まれ得べきも、而も尚ほ一夕にして死すべからむ。

さもあらばあれ、吾等は所謂北派の先達に向つて恨み無き能はず。彼等は新派の跳梁を目擊し、爲に其の田園を蕪され、爲に其の與類を奪はるゝも、恬として知らざるものの如きはいかにぞや。五姓田の二芳、原田、河村、山本の諸氏は、其の才識手腕に於て各〻一面の鎖たるもの、諸氏にして大に奮はば、其の効豈獨り舊派の面目を昂むるのみならむや。

歷史畫の缺乏

景物を描くを知りて歷史を描くを知らず、斯の如きは明治繪畫の名譽にあらざるなり。歷史畫は之を今日の南派に求むべからず。其の色彩、清淡浮麗にして沈痛深刻の趣を缺けばなり。然らば則ち舊派の中之を何人に求むべきか。原田直次郎氏は肖像畫家としては當今殆ど其の匹儔を缺く。而も意匠を經營し、資料を布置するの想像力は、その最も短所とするとこ

ろ、氏を知るもの皆氏の爲に之を惜む。山本芳翠氏が歷史畫家としての技倆は吾等の未だ知らざる所、『浦島子』の一幅の如き、吾等は氏の爲に寧ろ其の素才に下る數等なるものならむを望む。河村清雄氏は好で自ら隱るゝを以て、世人多く之を知らずと雖も、筆力の圓滿、才思の煥發、優に儕輩の聞に一頭地を抽づ。而も吾等は花鳥畫家としての氏を知るも、未だ歷史畫家としての氏を知らず。松岡壽氏は高く自ら標置すと雖も、所作甚だ少きを以て何人も氏が眞の手腕を知るに由無し。數へ來れば當今の歷史畫家たるべき者は、夫れたゞ五姓田の二芳と小山正太郎氏乎、吾輩は三氏に向つて敢て是の希望を屬す。

歷史畫に次ぎて、我が現今の美術に缺乏せるものは、

宗教畫と水彩畫と

なり。物質の外に精靈を信ぜず、金錢の外に道義を認めず、コンパスとバランスを以て一切を處理せんとする今日の時勢にありて、世の人多くは信仰の何者なるかを知らず。僧侶牧師は如何に多くとも、教會寺院は如何に立派なりとも、宗教的意識の薄弱なる今日の如きは蓋

し稀れ也。是を以て文學にまれ美術にまれ、宗教的熱誠の發揮せられたるもの殆ど絶無なるを見るも、吾等之を怪まず。却て狩野芳崖氏が觀音の一幅を以て甚だ多とするなり。是れ將た一朝一夕にして如何ともすべからず。鎌倉の宗演氏賞を懸けて宗教畫を募るが如き、吾等は其の全然徒勞に歸せんことを預言すべし。神豈金錢によりて拜まれ得べきものならんや。

水彩畫に至りては、近年漸く畫家の注目する所となりたるが如しと雖も、其の技倆幼稚にして見るに足るもの甚だ少し。元來、從來の畫家は水彩畫を見ること甚だ輕く、甚しきに至ては油繪の下繪なりと信ぜしものすらあり。本邦人が眞に此種の畫の價値を認めしは兩三年前、夫の英國の水彩畫家アルフレッド・バルソン氏が本邦に渡來して、其の神品の技倆を示せし頃にあり。爾來日猶淺く、發達の幼稚なる洵に已むを得ざるものあらん。吾等は水彩畫を以て、最も我が邦人に適應せる美術なりとする幾多の理由を有す。されば我邦の畫家が十分の精力を是の種の畫に傾倒して、單に今日の如く小景物を寫すに止らず、夫の水彩畫の最も秀でたる英國に於けるが如く、續々歴史人物畫に筆を染むるに至らむことを希望して已まざる也。

（明治二十九年三月）

宗教と美術

吾等は宗教小説と共に宗教美術を推奬す。人或は其の個人的傾向を不可とすと雖も、吾等は却て宗教的至高の精神を體現し得たる美術に於て、少くも一種最高の美的發表を認識し得べきを信ず。古に於ても然り、今も來らむ世も亦然るべし。

歐洲美術の歴史に於て、最も高尚なる製作物は多く宗教的美術にありしことは、甚だ明瞭なる事實なり。東洋にありても佛菩薩相、玉帝君王道相等の宗教的事物を以て、所謂畫道十三科の首位となしたるが如き、如何に美術の品位を昂めたる所以に於て力ありしかは、何人も知る所なるべし。夫の有名なる藥師寺の三尊銅佛、吳道子の釋迦、牧溪の觀音、若くは運・湛二慶の佛像、巨勢、宅摩等の佛畫、曼陀羅の如きものを取つて、パルテノンの古像、ゲントの三尊の如きものに對照し、徐に清曠無垢の雅懐を披いて精鑑し去らば、宗教美術の價値

自ら明ならむか。九憂の穢土にさすらひて三界の苦惱を濟ひ、圓滿無邊の大慈悲を以て普く一切衆生を度せむとするの妙相高容を仰げば、言絶ち語斷じ、恍惚の間、一脈の靈氣相通ずるありて、茫然悲想の中に萬法一歸の妙悟に徹底す。是の如きは宗教美術の吾等に與ふる感情に非ずや。奈良の古美術は美術家の景仰措かざる所、今や俱舍衰へ、三論廢たれ、法相斃れ、華嚴僅に存して、佛教往年の隆盛又見るを得べからずと雖も、今日最高の本邦美術は實に是等諸宗の遺賜に非ずや。今や世は不信の世となりぬ。一代の衆生、利と慾に走りて超世の大理想を知らず、宗教美術茲に全く泥土に委し去られたるの觀あるは、豈當代文物の一大缺陷に非ずや。

（明治二十九年六月）

善と美の關係

近頃、世上論者の善美關係論を言ふもの少からず。或はハルトマンに本きて、善と美の相合ふは偶然なる結果のみと言ひ、或は眞善美の三者は同一不二なる理想の三異相なりと說く。是れ古來學者の間に異論多かりし問題の一にして、今日と雖も一派の純理哲學者を外にしては、多くは是に向て或る綜合的設想を言ふことを難むずるもの多きが如し。

然れども是の問題の歸着する所は、獨り理論の範圍に止るにあらず。延いて社會實際の上に影響する所無しとせず。所謂實際社會に於ける美術道德關係論は、實に是の疑問に屬する答案如何によりて決せらるべきものなりとす。

實際的現象としての善と美との差別

は甚だ明なることにして、ハルトマンなどの夙に說きし所なり。そを如何と謂ふに、美は獨り所謂美象の中に表はるゝも、善は却て事實の中に表はる。現實界に關して或利害を有せざるものは道德上、何等の意義を有すること能はず。是の點に於て是の二者は全く其趣を殊にするものなり。次に美は感覺に緣りて表現せらるゝを必とせず、時間若くは空間は美術の依て以て成立する所の第一義なり。善は必しも然らず、義務の衝突、良心の煩悶等、其他の道德的考察は、全然吾人が心性中に終始して毫も外界に表はれざるものなり。次に道德の目的

は個々の行爲をして或遍通の目的、若くは旨義の下に適應せしむるにあり。而して其の次第は主義、原理と云ふが如き抽象的事物の媒介に依傍するを要す。美術の目的は單に具象の中に抽象、個體の中に遍通を表現するにあり。其の目的を達する所以の次第は、徹頭徹尾、具象的事物に貪緣するを必とす。其他、美と善と相背戻するの點少からず。尤も卑き道德、例せば所謂本能的道德と稱する所のものの如きは、成立の緣を感覺に假ること多きを以て、隨て美的なるに近し。是に反して最も高尙なる道德は、考察冥想の中に入ることいよ〳〵多きを以て、美を隔つこといよ〳〵遙なり。夫の道德的生活は考察的生活なりと云ふが如きは、明に美と善との相同じからざることを指示せるものと謂ふべし。

是を以て見れば、實際的現象としての善と美とは全く相異なれるものと云ふべし。ハルトマンを紹介せる論者の言當れり。

理想としての善と美との一致

然れども實際的現象として差別の相容れざるものあるの善と美は、吾人の理想として融解一致するの傾向あるものなることも亦遺却すべからず。理想と云ふもの素と目的學上より見

たるものにして、素と純理哲學の根據に立つ。是を以て多くの實驗學者は、吾等が玆に揭けたるが如き言議を以て、一種の空想と爲すものあらむも知るべからず。吾等は斯の如き輩に向つて辭を作すの遑を有せず、彼等は假に吾等が一家言として是を讀むべき也。

人の自然界の他の生物と異なるは、畢竟其の自由の生物なるの點に存す。自然界を支配せる法則は、人間に於て其の必至性質を失ひ、飜て內心の自由なる規定となる。是を以て、人は自己の立法者なり、其の內心に規定する所の命令は、彼が依て以て行動せざるべからざる所の法則なり。故に人を動かすものは Müssen に非ずして Sollen なり。既に Sollen を以て自己の命令者となす、是を以て彼が目的として進む所のものは Seinsollendes なり。恰も梅實の梅樹となるべき運命を有する如く、人は人の當になるべき所のものにならざるべからず。只梅と人と異なる所は、彼には意識なく、此には意識あり、彼を支配するものは外部に於ける器械的勞力にして、此を命令するものは內心に於ける自由意志なるに存するのみ。

然らば則ち何物か是の Seinsollendes なりや。吾人の感覺に對して美、吾人の意志に對しては善、吾人の理性に對しては眞、所謂哲學的三位是れなり。是の三つのものは、吾人が理想

的形式として相一致するものに非ずや。啻に形式上、相一致するのみに非るなり。蓋し吾人の理想とする所は、差別と平等、個體と種族、具象と抽象との間に於ける圓融和合の狀態に存すと謂ふを得べし。眞とは是の如き關係を理性の上に觀じたるもの、遍通の原理によりて個々の事物を說明せむとする卽ち是れなり。善とは是の如き關係を行爲の上に現はしたるもの、個體的利害を以て種族的幸福の上に隷屬せしむるもの卽ち是れなり。美とは是の如き關係を形體の上に表はしたるもの、具象と抽象との圓融は卽ち是れなり。眞善美は三位にして一體なるものに非ずや。

是れ甚だ空漠たる思想なり。而かも是れ吾人が目今の信仰なり。吾等は善と美との實際的現象としての差別を認識すると同時に、理想としての一致を想念することを忍ぶ能はず。

（明治二十九年七月）

宗教と美術

昔しエオバ神、美術を作らしめむが爲に親らベザレールを呼び、神の御靈を彼が心に滿たしめ給ひき。獨逸中古に名高き畫家デューレルは、同じ意の言を作して謂へらく、神は美術家に力と生命とを與へ給ふ。獨り神のみ如何にして美はしき象を造るべきかを知り給へればなりと。同じ邦のハイドンと云ふ音樂者、推敲多時にして辛やく光の流射を表はすべき音調を考へ出せし時、覺えず雙手を擴け聲高く、『こは吾の力にあらず天の賚なり』と叫びきと傳ふ。

まことや美術家の心事には、往々常規を以てその趨舍を測るべからざるものあるなり。人は見て空想と嘲り迷妄と詆らむも、その製作の古今を貫き萬邦に通じて、爾かく偉大なる勢力を有つものあるを思へば、是の如き恍惚非念の境域に於て、尙ほ必然遍通なる或物の存在を否む能はざるに非ずや。所謂天啓と云ひ默示と云ひ、理想の發現と云ふもの、果して何物なるべき乎。吾等は神の族なり。吾等は遍通なる宇宙的精靈が個體の中に顯はれたるものにして、自由と進步の原理によりて、各自生活の理想を現化せむと精勵しつゝあるものなり。ゲーチが未完の戲曲プロメテウスは甚だいみじく是の意を表はせり。パラス・アテーネが『プ

ロメテウス、吾れ爾を愛す』と云へるに、プロメテウス答ふらく、

『御身は我心には心其物の本體なり。初めより御身の語は天つ光にてありけるなり。……日影暮れゆく黄昏時、吾心の猶ほ言ひ難き喜びに包まれあるが如く、御身在はさぬ時も、我心には尙ほ御身の力あり。是世ならぬ御身の呼吸の度び毎に、吾力はます〳〵加はるなり。』

スピノーザが、理性の直觀は考察よりも高し、永遠の光の中に(Sub specie aeternitatis)萬物を觀ずと言ひけむも、シェリングがラファエルを稱へて、彼が描寫せる如く事物は實に永遠なる必然の中に排列せらると言ひしも、はたベートーフェンが、美術と學問とは吾等に是世ならぬ世界を示すと說けりしも、所詮何れか同じき考に非るべき。フヰデアスが自己の手に成れる神像に禮拜せし如く、大なる美術は常にそを作りたる美術家よりも大なり。なにがしの學者が、美術は人の作れる神なりと云ひけむも洵に宜べなるかな。

神と人と、自然と人間と、宇宙と我との間に、或る言ひ難き幽玄なる關係の存在せる事は、古より吾れ人の意を注ぎし所なり。プラトーンこのかた、新プラトーン派の神祕說を初めとして、瑰奇不可思議なる幾多の哲學派は、多く是の問題を說明せむとして起りたり。幾多の

詩人は、其琴の上にその妙へなる感想を唱ひたり。幾多の宗教は、其種々の教義と典式とによりて、是の關係を具體にせむと務めたり。斯くて文化の歷史は數千年の過程を經由し、二元的超絕神教、若くは凡神論の謬見を後にし、玆に初めて具體の一元的の根據に立ちて、やや明晰なる哲學的說明を與ふることを得るに至りぬ。昔し猶太の詩人が、『爾は吾光を照せり』と唱ひ、モハメットが『吾は吾心の中に天啓を認む』と云ひ、若くはゲーテが『吾詩は吾內心の光なり』と云ひ、はた又ピンダルが、

『はかなきかな、吾等は一日の兒。人生は夢の影。されど一度び神の光の我心に近づくや、吾は是により て窮りなき福祉を享く。』

と歌ひし所の者、今は平等、差別、個體、種族の圓融同體の理に依て說かると雖も、天啓と云ひ、默示と云ひ、理想の發現と云ふ者の自然的事實たることは、今猶昔の如きなり。

吾等は常に思ふ。大なる美術とは、所詮斯の如き理想の發現を具體にしたるものには非るか。吾等は美術家の如何にして是を感受し、又如何にして是を摹倣し得べきかを知らず。然れども其製作の高潔偉大、かれが如きを得る所以のものは、徒に研鑽剪綴の末技にあらざる

ことを思ふ。無邪氣なるラファエルは、友人カスチリオーネに書して曰く、『善き判官と美はしき婦人は甚だ稀なるが故に、吾は吾心に浮動せる理想を模型とせむ。吾れ其の何の故たるを知らずと雖も、美術の爲に計るに、策是に過ぎたるものなし』と。又何の書によりて音樂を學びしかと問へるに對して、モツァルトは答へけらく、『吾は只吾理想に從ふのみ。吾理想の何物たるかは、吾れ是を知らず』と、何れか理想の發現を言へるに非るべき。

理想の發現は、素より一般人生の究竟目的なり。而かも半ば天才稟性の高卑により、半ば教育感化の如何によりて規定する所となるを免れず。是を以て超世の偉才と雖も、適當なる教化を受けて適當なる境遇に際會するに非れば、其天分を發揚して遺憾無きこと能はざるべし。千殊萬別なる經驗的智識の中より、其理想の形式に隨ひて、自家特殊の自然を形成することは、愼重なる素養を待て初めて爲し得べきの事なりとす。吾等は思ふ、是の如き目的に向て偉大の勢力を有するものは、實に宗教に非る乎。

宗教の目的は、所詮大道の中に自我の福祉を求むるにあり、有限無常の世界の中に無限恒久の生命を得るにあり。一切醜惡の源泉なる私心私情を沒却して、公理公道の爲に一視同仁

の精神を鼓吹するにあり。人の心思を感動して高潔博雅ならしむるもの、天下何物か是に及ぶべき。學理と手術との進歩は、美術家の爲に彩料を供へ、機械を作り、又能く敏活なる技倆を有せしむるを得むも、而かも其精神氣魄の大小高下に至りては、學理工藝以外に於ける心靈的化育の力に由らずむばあらず。宗教が其性質上、是の如き化育に對して絶大の勢力を有するものなることは、理論的に哲學上より是を見るも、又實際的に古今東西の美術史上より之を觀察するも、共に爭ふべからざるの事實なりとす。

宗教が美術の歷史に及ぼしたる感化の偉大なることは、今吾等が筆を改めて記述せむには、寧ろ甚だ明白に過ぐるの事實なり。ミュロン、フヰデアスの希臘、カイラーサの彫像に現はれし古天竺より、耶蘇紀元十九世紀に到るまで、古今東西の美術史上、苟も一代波瀾の頂點に立ち、人文の過程に高大壯麗の紀標を殘したるの大製作にして、能く宗教の感化以外に超絶するを得たるもの、果して幾何かある。其色を壞ち、其形を破り、而かも空靈微妙の一氣縹渺として永く千世渦仰の對象となれるもの、何れか宗教的美術に非るべき。宗教と美術とは、其存在の動機及び規定を異にす。故に宗教の盛衰は、素より必しも美術の汚隆に伴は

ずと雖も、而かも全く宗教の勢力關係を斷絶し去りて、尙且つ至高絶妙の美術を成し得べしと謂ふものあらば、吾等は人文四千年の發達に伴へる東西美術の歴史を左券として、是に反對するに躊躇せざるべし。

吾等は葱嶺以南に於ける亞里安民族の、決して美術的製作に勝ふる能はざるべきの理由あるを想ふ。而かも彼等が殘したる浮誇瑰異なる少數の美術は、一に宗教的美術なりき。大天神シヴを祭りたる窟宮、ボロブドールの大殿堂の如きものは暫く言はず。エルーラ若くはマハーバリプルの彫刻神像は、婆羅門教の精神を享けて、人をして鬱憂厭世の感覺を起さしむと雖も、纖巧野鄙を離れて尙ほ能く一段高遠の風度を保つを得たり。若し夫れ希臘の美術は、やがて形體を具へたる彼等の神話なり。彼等が中央亞細亞の搖籃を離れてより、山明水媚なる希臘半島の天地に數百年の間瀘醸し來りたる古ヱダ的神話を讃咏するの情は、やがてミュロン、フヰデアス、プラキシテレース等が、彼等の爲に彼等のヱヌス、ツォイス、ニオベを造りたるの心なり。よしや其の宗教的信仰の少しく後代の一神教に殊なるものありとするも、ヘラス民族の美術は、所詮彼等が國民的信仰の集成凝結して外に表はれたるものに外ならざ

るなり。

ペリクレース時代の美術の精華を萃め、かねて全希臘の文化に於てプラトーン、アリストテレースと共に、最高の波瀾を擧げたるものを實にフヰデアスのツォイス像となす。彼は見得べく、又觸れ得べき形體の中に、彼れの祖先同胞が數千年の信仰を活現せり。像成るや、全希臘の人衆の爭て趨拜せしこと、猶後世基督教徒がバレスチナに巡拜せしが如かりきと傳ふ。彼が手に成りし實の像は夙に失はれたりと雖も、流風餘韻はさすがに幾多後人の擬作に表はれて、今猶人をして其髣髴を想はしむるものあり。歴史をして單に以上の事實を傳へしむるとせむも、吾等は是によりてフヰデアスを以て徒に巧手妙技によりて彩色形體の精美を致したるの外、何等神靈的化育を有せざりしものと思惟する能はず。天才の自己より大なるものを造る、必ずや自己以外に待つ所無かるべからざるものあればなり。果然傳說は吾人に告げて曰く、フヰデアス、ツォイス神の像を作り是を殿堂に安置するや、凝視多時、具さに其作を檢案せむとせり。俄然彼は畏敬の情に打たれ、覺えず像下に跪拜せりと。信念の渴仰の高深摯實なるものに非るよりは、如何ぞ能く事茲に至るを得べき。一體の神像を以て能く一個

の宗教を造るに至ては、美術は殆ど其の理想的完美に近つけりと謂ふべきに非ずや。

基督教が美術に及ぼしたる影響に至ては、何人も吾等の絮説を要せざるべし。中世、近古の歐洲美術が殆ど全く基督教的精神及び信仰によりて其品位を昂め、其雄大を增したるの事實は、文學哲學等の他種の文物に比して、遙に根本的に、又遙に有益にてありしなり。二三の例を擧げむに、羅馬大帝國の鴻基分れて東西となり、ボスフォラスの海に臨みて王と稱したるもの一度び基督教を奉ずるに至りては、廣闊雄大なるビザンチンの堂塔は、そを建てたる民衆の瑰偉なる信仰を表はして君士坦丁(コンスタンチノープル)の都に聳え、五濁九穢の中世にありて、唯一神を仰ぐ古教の精神は、窓上窓を設け、弓柯弓を重ね、更に尖塔直に九天を摩するものを建つるの所謂ゴジック神堂を產出せりき。若し夫れ文藝復興の大潮流に駕して南歐の天地に榮えたる歐洲美術が、如何に宗教の靈化を被り、如何に宗教の莊嚴を加へたるかは、美術歷史の上に於て最も較著なる事實にして、何人も熟知する所ならむ。

十五世紀の初に當り、斬新奇拔なる一派の、以太利向後の繪畫に一大改革を施したるものありき。夫の有名なるコラー、ジョヴンニ、アンジェリコ實に是が巨魁たりき。人或は單に是の

派が形似、彩色、投射の逼眞精妙なるを觀て、一に寫實を以て其特色と爲さむとすと雖も眞摯高遠なる宗教的信念の實に是が根據を成すものありしを忘るべからず。げにや是の派の俊秀は、其手術的技工に於ては素より前代の孟浪不穢に一頭地を抽づるものありきと雖も、中世以後の基督教的信仰は、いよ〳〵其浸染を深うし、益〻其熱度を昂めしの事實は、彼等の製作、傳記に徵して爭ふべからざるなり。殊にアンジェリコの如きは、其畫帖に向て筆を執るに先ち、必ず齋戒沐浴して新禱を爲せり。自ら謂へらく、吾は吾が筆に於て神の來降を待つものなりと。畫くもの已に是の如き信念によりてその筆を動かす、彼れの製作に對するもの、今日尙ほ超世脫俗の理想的生活の呼吸に觸るゝが如く、あらゆる人界の不和不滿を擺却して、天上永遠の光明裏に一切の繫累を解脫するの感あるも亦宜べならずや。彼が畫きたる聖母マリアの尊像は、聖と愛と美との完全なる表現なり。躬自ら是の三者を具ふるものに非るよりは、如何ぞ能く玆に到るを得むや。フラー、フォリッポ、リッピ若くはサンドロ、ボチェリの如き南歐美術の大名は、何れか宗教的感化によりて其偉動を奏したるものに非るべき。下りてミカエルアンジェロに至りては、吾等は更に美術と宗教との間に於ける最も密着な

る關係の最好適例を認めずむばあらず。繪畫彫刻の上に於ける彼が萬世不朽の遺物は、殆ど全く彼が上帝に對する畏信と敬虔との體現せるものに非ずや。サント・ピエトロの寺院は彼が手によりて造修せられたるもの、彼れ其一切の報酬を斥けて曰く、吾は神の爲に力を效すもの、如何ぞ人の酬を要めむやと。已に是の心あり、高大悠遠の氣韻、精妙秀雅の風致、今日其堂を見るものをして神情浮動、肅然として襟を正うし、恍然として己を忘れしむるもの亦敢て怪むに足らざるなり。

十五世紀の宗教改革家たりしサヴナロラは、亦北伊太利に於ける基督教美術の改革家たり。彼れ當代美術の衰微を慨きて曰く、『今の人の作る所の聖母は猶ほ遊女の如し。是れ全く畫家信仰の墮落せる結果なり。汝等眞正の美を得むとならば、是を凡俗の美に求むる勿れ。神に近よれ。然れば汝等流俗の境域を超絶せる至高至眞の美に近づくを得む。體の美を美ならしむるものは靈の美なり。汝等先づ神を愛せよ。然らば則ち人を愛せざること無けむ。美術は人の心の鏡なり。基督の愛を以て其魂となし、天下の畫を見るものをして其色を見るに先ちて其靈の美はしきを慕はしめよ』。と言やゝ矯激に失するの嫌ひ無きにあらずと雖も、

美術家が信念の必要を說き得て直截簡明なりと謂ふべし。けにや悠遠なる基督の慈愛に依り、浩深なる上帝の畏尊に本き、感謝と希望と聖愛との流露して其體を成し、其音に表はれたるもの、是れ實に歐洲美術の古今に通じ、宇内に誇示するに足るべき偉觀にてありしなり。

本邦美術の佛教に於けるは、猶歐洲美術の基督教に於けるが如きなり。否、むしろ一層親密の關係ありしものに似たり。顧みれば繼體の十六年、佛像初めて我邦に入り、續て欽明の十三年、法像共に傳はりてより、鎔鑄、建築、織物、繡物等の實業美術の是に隨伴して輸入せられたるが如きはまばらく言はず。夫の止利佛師が製作に係る法興寺の銅繡二佛、法隆寺の金銅佛を初めとして、本邦現存の最古の繪畫たる法隆寺の佛菩薩の壁畫より、南都諸寺院の莊嚴秀絶は一として俱、三、法、華、諸宗の遺物に非るは無し。平安朝に入りて、密教の傳來は當時の建築彫像の上に其の空靈幽妙の風度を與へたるは言を待たず。今日現存に係る當代の製作が、天台、眞言の精神によりて染潤感化せられたるの跡甚だ見易からずとせず。降て武家の世に遷り、源空、親鸞の他力宗起りてより、我邦人心に於ける宗教的信念は大に

其面目を殊にし、一念向上、他力の救脫の渴仰の上に、淨土往生の希願を鼓吹するに及び、夫の金色來降佛、若くは九品曼陀羅の如きもの、半ば寺院の偉觀を助けむが爲め、半ば祈念願望の爲め、天下到る處に充滿するに至れり。康慶、運慶、湛慶の輩が本邦佛工傳の上に空前絕後の大名を印したるも、實に是の時代なりとす。

吾等は是の如き時代に於て、佛工運慶の如きものの生れ出でたるを以て洵に偶然ならずと信ず。蓋し偶像を拜するものは、素より是を造るの木石を拜するに非ずして、是によりて代表せらるゝの神靈を拜するなり。旦夕夢寐の間に惝恍欽慕して、而かも其定形を捉ふる能はざる所のもの、一旦名工の是を可感的軀體の中に實現するものあれば、天下の人爭て其の足下に跪く。宗教的熱誠の性質上當に然るべきものありて存するなり。故に偶像教國に於ける佛工の社會より受くる尊敬の大小は、やがて其社會の信念の深淺を表はし、又轉て其社會の宗教的美術の盛衰如何を規定するの力あるものとす。吾等は其一例として、運慶の如何に當代の社會に歸依せられしかを觀む。東鑑卷九、毛越寺の條に曰く、

此本尊造立間。基衡乞支於佛師雲慶。雲慶注出上中下之三品。基衡令領狀中品。運功於佛師。所謂

金百兩。鷲羽百尻。七間間中經水豹皮六十餘枚。安達絹千疋。希婦細布二千端。糠部駿馬五十疋。白布三千端。信夫毛地摺千端等也。此外副山海珍物也。三箇年終功之程。上下向夫課駄。山道海道之間片時無絕。又稱別祿。生美絹積船三艘送之處。佛師扑躍之餘。戲論云。雖喜悅無極。猶練絹大切也云々。使者奔歸語此由。基衡悔驚。亦積練絹拾三艘送遣訖。如此次第。達鳥羽禪定法皇叡聞。令拜彼佛像御之處。更無比類。仍不可出洛外之由被宣下。基衡聞心神失度。閉籠于持佛堂。七個日夜。斷水漿祈誓。愁申子細拾九條關白之間。殿下令伺天氣給。蒙勅許。遂奉安置之。

上は天子より下は國守、民衆に到るまで、是の如き尊崇を以て一佛師を待つ程に、宗教的信念の熾盛なるの時代にありて、初めて能く佛師運慶の如きものをして其驥足を延べしむるを得べきなり。運慶其人の傳の如きは、今日其精細を知るに由無しと雖も、天下の高德に歸依せられたること、及び其製作の氣韻高雅なるもの多きこと等の事實によりて是を察すれば、吾等は彼れ亦情熱ある一個の宗教信仰者にてありしを疑はず。

鎌倉時代の淨土曼荼羅は、宇治の鳳凰堂に其模型を殘して、日本美術は所謂東山時代の禪林派に移りゆけり。吾等は教外別傳、直指單傳の宗派が美術的製作に貢獻したるの利益の甚

だ多きことを信ずる能はず　偏に空寂淡泊を是れ尚び、漫に幽玄高靈を是れ求むる教義彼が如きものは、形體精神二素の抱合調和を必とする所の美術の精神と、多少相容れざるの性質を有せざるに非ず。當時の名匠大家、例せば雪舟、雪村等の製作に就て是を見れば、形體を輕むじ色粉を消し、一切外觀の華麗典雅を抛却し去りて、偏に其の禪學的以心傳心の悟道を色相以外に發揚せむと務めたるの跡、寧ろ强令故意に近きもの無きに非ず。而かも其の俗を離れ、塵を脫し、直に人の肺腑に向て心靈的呼吸を通ずるの高趣は、宗教の感化として吾等其効果を認めずむばあらず。是を德川時代の探幽、應擧、無名、文晁者流の纖巧、粗放、毫も超世理想の韻致無きにくらぶれば、吾等は此れに比してむしろ彼れの擇ぶべきものあるを想ふ。

吾等もし宗教と美術との關係を詳述せむと欲せば、美術歷史の大半を反覆せざるべからず、只玆に其全豹の一斑を明にするを得ば則ち足れり。蓋し宗教の最も力あるは、現世の繫累より吾人を解放し、飜て人をして其永遠なる希望を彼岸の淨土に懸けしむるにあり。是を以て其心を瀝し、其情を擧げて宗教的熱火の中に投じたるの人は、生死利害の外に立ち、神

情浮動の中に其理想圓滿の光明を仰望す。堅久の念是を以て盛に、鄙吝の心是を以て痕無し。古來最大なる美術家の宗教的熱誠によりて其偉功を奏したるもの多きは、實に是が爲なり。夫の朝に一畫を描き、夕に一點を施し、興至らざれば十年手を下さず、一片私情の爲に汚さるれば、垂成の畫帖も是を抹殺するを吝まざるが如き、堅忍恒久の志操を把持するを能くするものは、如何ぞ現世の名利に束縛せられ、毀譽褒貶の間に戰々たる者流の企計し得べき所ならむや。美術と宗教との關係の、歷史上ふかく親密なるは蓋し偶然に非るなり。

且夫れ是を哲學上より觀るも、宗教的美術の、最高の價値を有すべき美術なることは明なり。乞ふ二三言、是を述べて以て本論を終らむ。

抑〻宗教とは何ぞや。道德的意識の要求を客觀的に投射し、教義典式の媒介によりて具體的に是を實現したものに非ずや。もし宗教より其ドグマと一切の典式とを除き去らば、殘る所のものは道德的意識の要求ならむのみ。故に宗教は具體にせられたる道德の理想と稱することを得べし。

美術とは何ぞや。吾人は、自然界が吾人に供給する所の美はしき事物を袖手享受すること

に滿足せずして、何が故に其力を勞し、神を勤らして所謂美術なるものを造作するか。他無し、自然美は吾人の美的理想に對する渇仰に向て十分の滿足を與ふること能はざるが故に、吾人は自家の理想的形式に從て完全圓滿なる美體を作らむと盡瘁するのみ。美術の歴史は、所詮人類が其美的理想を實現せむとせる煩悶の過程を標示するものに外ならず。故に美術は一言すれば、具體にせられたる美的理想と謂ふことを得べし。

宗教的美術は卽ち具體にせられたる道德的理想と、具體にせられたる美的理想との抱合一致せる狀態に向て、更に可感的形式を與へたるものに非ずや。吾等は信ず、眞善美の三者は現世に於ては永く全く相合同するを得ざるべしと雖も、吾人の理想としては其一致圓融を有するものなり。宗教的美術は不完全ながらも、是の絕對圓滿なる人生の理想的狀態をば是の有限有礙、差別不圓滿、私情惡德に充滿せる現實世界に於て、見るべく觸れ得べき形體の中に表彰せむと務めたるものにはあらずや。然らば則ち宗教は美術の方便たると同時に、又其目的と爲り得べきものに非ずや。

希くは宗教には光榮あれ、美術には生命あれ、美術家には信仰あれ。今や國民の信仰殆ど

地に墮ち、空禮虛式にあらざれば則ち濫宗淫祠。吾等は明治美術の、斯の如くにして果して能く其名譽を軒揚し得べきやを疑ふ。

（明治二十九年七、八月）

敢て日本美術史の編纂を促す

世界の美術國と誇稱する我邦が、今日一部自國の美術史を有せざるは、予輩の常に浩嘆に堪へざる所なり。想ふに推古、天智、所謂奈良朝よりこのかた、空海、金岡によりて代表せらるゝ藤原時代、光長、運慶によりて代表せらるゝ源平、鎌倉の時代を經て、雪舟の東山、永德の豐臣より、探幽、應擧の德川時代に至るまで、本邦美術が繪畫に彫刻に連綿たる歷史的發達を爲したるは事實なり。之を歲時に繫け、具さに內外の影響を考察して、發展推移經行を叙述せむことは尤も興味ある事業にして、又今日學者の急務なりと信ず。本朝文學の歷史は今日一にして足らず、教育、宗教亦各〻其の史乘に乏しからず、美術豈永く獨り歷史無かるべけむや。予輩、斯道の碩學が予輩後進の爲め、はた國家學術の爲に、本邦歷史を編纂せられむことを切望して已まざる也。

予輩は平生、本邦美術に對して多少の觀察を怠らざるもの、然も一人の能く古今の材料を涉獵することを得ず、書窓亦多事にして全力を玆に傾注する能はず、常に甚だ之を恨みとす。

想ふに世上、予輩と感を同うするもの極めて多からむ。蓋し今日の狀態にては本邦の事物に關するものの研究は、却て外國のものよりも困難なり。何となれば、我邦の事物は古來組織的に研究せられたるもの少きを以て、今日の學者は自ら原科の採集排列に非常の勞力を費さざるを得ず、之を西洋人が既に整然と按排せられある材料に就て比擬概括するに比すれば、其勞同時の論に非ず、大著述の出でざるは素より已むを得ざるものある也。故に予輩は想ふ、我邦學者、殊に古學者の第一の責任は、學者社會に向て事實の材料を供給するにあり。若し夫れ之を按排取舍して完全なる組織と成すは、之を新學者の考察に一任するを可とす。斯く言へば舊來の學者を輕むずるが如しと雖も決して然らず、各〻其の長ずる所に從て其力を盡すは卽ち是れ學者の本分を瀝す所以にして、彼此分業の間、素より輕重の差別を立つべきに非ず。漫に其分を超えて功を一人に收めむとするの弊は、偶〻其功績を消却するのみ。小杉榲邨氏頃日『本邦美術史』の著あり、予輩之を讀みて同一の憾み無きを得ざりき、是れ學者の宜しく注意すべき所に非ずや。

序に予輩は、一私人として珍奇の美術を藏せるものは、徒に之を庫裡に祕藏するが如き陋

見を去り、或る適當なる方法によりて公衆の縱覽に供するの途に出でむことを希望す。是れ美術研究者に便利を與へ、且は一般人民の審美的敎化の目的に向て其功益決して小少に非るべし。我邦人の風として、所藏の美術を惜みて人に示さざるは甚だ謂はれ無きこと也。

（明治二十八年十二月）

美學史及び美術史

審美學者の研究何を以てか先とすべき。吾等は他の諸學に於けるが如く、其歷史より入るを以て當然なりと思惟す。ハルトマンを講ずるも可なり、ギュヨーを說くも不可なし。而かも彼等はハルトマンのハルトマンに非ずして、歷史のハルトマンなるを知らざるべからず。何となれば、個人としてのハルトマンは今世紀の人なれども、學者としてのハルトマンは遠く希臘の古代に產聲を擧げたればなり。

如何にして審美學史を研究すべき。言ふまでも無く西文の著述に依らざるべからず。而かもバウムガルテンこのかた、斯學の一科を爲せしより僅々百年の歲月を經由せしに過ぎざるを以て、其歷史の西人の手に成れるものも亦甚だ少し。吾等の知れる所にては、今より五十年前の著述手ずメルマンの美學史を初めとして、斯學の全系を評叙したるものは、シャスレルが『審美學の批評的歷史』、ボサンケの『審美學史』、ナイトの『審美學史綱要』等あるのみ。其他、サリー、ハルトマン、クザン、ロッツェ等歷史的の著述あれども、其觀察或る特殊の時代、若くは其國に限れるものにして、審美學の全體の發達を盡せるものに非ず。就中ハルトマンの如きは、カントを以て獨逸美學の十分なる發足點となし、カント以前の歷史を全然蔑視拋却したるは、吾等の同意し難きところ也。

右の歷史の中に於て、初學の讀者の爲に吾等の意ふ所を陳べむに、ナイトのは餘りに簡截にして未だ以て憑據するに足らず。ボサンケのは、その書體凡て批評的にして、事實の叙述甚だ少きを以て、哲學史に精通するものに非れば容易に解し難し。シャスレルのも亦批評的にして、ヘーゲル流の演繹法により、純理學的方式の中に歷史的事實を羈束したるの弊あり

と雖も、其含蓄する所の材料の豐富なるは、是書の長所なるべし。チンメルマンのは審美學史中、最古のものなれども叙述明晰、其の一家の所執にかゝるもの亦割合に少し。吾等は是を以て現存の全き美學史中最良なるものの一なりと思惟す。

是等の書典を飜譯するも可なり、又自家獨立の研究によりて新に審美學史を編述するも可なり。吾等は兎に角、斯學に關する智識を弘通するの第一歩として、吾審美學者が先づ斯學の邦文歴史を公にせられむことを希望す。

美學史の研究は、美術史の研究に伴ふを必とす。美術を成す所以の感情は、美學を成す所以の智力と共に、兩々相待つて初めて人類の審美的意識の全活動を成就すればなり。故に吾等は、敎ふるもの學ぶもの、共に『審美的意識の歴史』てふ名義の下に、美術史と美學史との兩者を包括せむことを望む。

（明治二十九年五月）

寫生と寫意、意想と畸形

今の、寫生の是非を說き、寫意の可否を論ずるもの、多くは一面に偏す。寫生に緣りて寫意を達する卽ち是れ美術の第一義なるを知らざるものの如し。

或は以爲らく、意想は全形に於て見るべからずと。於是乎、其說を畸にし、其體を支にし、寫意を以て自ら高しとするもの漸く多からむとす。橋本雅邦氏が龍虎圖の如き、其の最も著しき者なり。而して世の所謂鑑賞家なるものの中には、口を極めて是の畸形畫を激賞せしものあり。

獨逸の審美學史に通ぜる讀者は夙に注意せられしならむ、フヰヒテが自然を却けて無味乾燥なる感覺界に過ぎずとなし、全然精靈の發現を拒否したるは、如何に吾が所謂寫意派の口吻に似たるものあるか。又シェリングが之に反して、自然界を以て可感的形體に於ける精靈の直接なる發現（Die unmittelbare Erscheinung des Geistes im Sinnlichen）と爲したるは、如何に吾が所謂寫生派の所說に似たるものあるか。而かも是の二者の極端說を補充調和せむが爲に

シェレーゲル、シルレルは如何に Stoff=Form の方式の上に美術を建立したりしか。惟ふに今日の我美術界は、所詮這般の歴史を反復しつゝあるものに非るか。古希臘の塑像は、千萬年を通じて人類の偉大なる製作物なり。フヰデアスがツォイス像は實に一種の宗教を作り、ヘラス半島の民族をして、先を爭つて巡禮拜せしめしこと、猶中世紀に於ける基督教國民のバレスチナに於けるが如かりき。是れ果して何が爲なりしか。他なし、希臘民族は彼等の美術に於て、彼等の祖先がバクトリアより齎し來り、ヘラス半島の優雅なる天地に於て、幾百千年の間蘊醸夢想し來りたる彼等が理想的人物を認めたればなり。是故に古希臘の塑像は、おしなべて個人的に非ず、現實的に非ず、はた又何等の特殊性をも具へず、殆ど平等遍通の體相を有し、洵に彼等の間に於ける種族的理想として見るべきものなりき。然り、フヰデアス、ミュロン、プラキシテレース等の塑像は、實に意想的美術の最も純粹なるものにてありき。

而して彼等が美術は、如何にしてまかく理想的なるを得しか。是れ畸形を描きしが爲に非ず、又支離を寫せしが爲にもあらず、自家特殊の妄想に依傍して放埒なる意匠を構へしが爲にもあらず、自然が眞實なるよりも更に多く眞實なりしが爲のみ、換言すれば、自然其物よ

りも尚遙に自然的なりしが爲のみ。自然界にありては質は形よりも勝り、想は物よりも劣れり。假に獨逸の對比美學（エステチクデスゲーゲンザツツエス）が說きけむ語に依れば、平等なる絶對は其物質的一半の過重なる有樣を是自然界に現はせるなり。美術の要は精神と物質との二者をして、偏輕なく偏重なく、渾然融和せしむるにあり。夫の所謂寫生派は、自然界の摸倣を以て其本領となすもの、爭でか美術の眞諦を得たりと謂ふを得むや。吾等は寫生派に向て、理想的なれと勸むるを躊躇せざるべし。然れども理想的なれと謂ふは、其形を畸にし、其體を支にし、現實世界に觀るべからざる異形の怪物を描けとの謂にあらず。美術は理想的たらむが爲には、啻に自然の現實に依傍して已むべきに非ず、更に一歩を進めて、自然其物よりも更に多く自然的ならざるべからず。斯の如くにして成りたる美術の中に、吾人は尤も標準的事物を觀ずるを得べし。標準的事物の中に於てに非れば、理想は遂に見るを得べからず。是點に於ては理想と自然とは慥に其致を一にすと謂ふべし。故に吾等は謂はむと欲す、理想は非自然の中に現はれ得べきも、背自然の中には現はれ得べからずと。

世の所謂寫生派なるもの、徒に怪奇支離を描いて得々たるもの、須く三省せむことを要す。

鷗外に答ふ

其一

吾等の鷗外の審美學に篤きを耳にせるや久し。而かも氏がハルトマンの祖述の外に、斯學の歴史に關する意見を窺ふを得たるは、實に今回を以て始めとなす。

吾等去る四月上旬の本誌に於て、今の繪畫界に於ける寫生と寫意の是非を一言せしに際し、其の爭ひの獨逸美學の歴史に似たるものあるを注意して以爲らく、今の寫意派の口吻はさながらフヰヒテが自然を斥けて無味乾燥なる感覺界に過ぎずとなし、全然精靈の發現を拒否したるにも比ぶべく、又シェリングが是に反して自然界を以て可感的形體に於ける精靈の直接なる發現と爲したるは、如何に我が所謂寫生派の所說に似たるものあるかと。

（明治二十九年四月）

鷗外は吾等が是の言を批評して曰へらく、

記者がフヰヒテの主觀理想主義を擧げて寫意派に比べしは、或は當りたるべし。フヰヒテは自然に隈劃の結果たる側と、自由なる理想的行爲の結果たる側とを分ち、彼を尋常見となし、此を審美見となしたればなり。記者がシェリングの抽象理想主義を擧げて寫生派に比べしは、或は妥ならざるべし。シェリングは、偶然に美なるのみなる自然は、藝術に法則を與へむことを思も寄らず。是に反して、完全なる藝術の造り出したるものは自然の美を判斷すべき規則及標準なりと云ひしことあればなり。

是れ甚だ不適當なる非難と謂はざるべからず。總じて他の說を評せむは、他の言ひし所もしくは其の言ひし所より必然に歸納、又は演繹せらるべき結果に就て論ぜざるべからず。吾等はフヰヒテが自然界を輕視したるの一點を捉へて、今の所謂寫意派の口吻に似たるものあるを注意したることあるも、未だ曾て彼が『主觀理想主義を擧げて』是を寫意派に等しと言ひしことあらず。シェリングが、自然界に對して前人未だ曾て與へざりし所の審美的價値を付與せしの點に於て、如何に今の所謂寫生派の所說に類するかを言ひしことあれども、未だ曾

て彼が『客觀理想主義（若くは抽象理想主義）を擧げて』寫生派に等しとせしことあらず。甲の人、砂糖の白きを以て鹽の白きに比せし時、乙の人是を駁し、砂糖を擧げて鹽に等しとするは不可なりと言はば、是れ寧ろ失笑すべきに非ずや。鷗外は人を誣ひ且つ笑はするもの也。さるにてもフヰヒテの主觀理想主義を擧げて寫意派に比ぶるを妥當なりとせる鷗外は、寫意派を以て一の哲學主義となすにや、覺束なや。

鷗外若し予の說を評せむとならば、乞ふ、予の說ける所を評せよ。シェリングが自然界に重きを措きしは、彼が哲學たる客觀的理想主義に本く。絕對の中に於ける主客物我の合一は、一歩を轉ずれば直に彼が套語とも見るべき『自然界の無意識的產物は人間の意識的製作に似たり』てふ命題を得べきは、何人も見るを過まらざる所、彼がフヰヒテ一輩の主觀的理想主義に對して客觀的理想派と稱せらるゝは、やがて彼が自然界に與へたる如是意義あるが爲に非ずや。シェリングが美術を以て形體の中に物我を包容し、主客兩界の完全なる調和となし、以て相對の中に現はれたる絕對、有限の中に表はれたる無限となしたるは、美學史の一斑を解するものの業に已に熟知する所、美學に篤き鷗外の言として寧ろ甚だ明瞭なるに過

ぐ。而かも是の故に彼が精靈の發現を自然界に拒否したるを非とするの理由を見出し得べしとするものあらば、其人は未だシェリングが哲學を了解せざるなり。若し審美觀に於て、我の中に非我（物）を合一したりとせば、同一の理を以て飜て非我の中に我を合一すと謂ふを得べきに非ずや。換言すれば、精靈の中に自然を見るの吾等は、同時に自然の中に精靈を見得べきに非ずや。彼が自然界に與へたる審美的意義も亦寧ろ甚だ明瞭なるに過ぐ。

自然界を以て精靈の發現となしたるが故に、シェリングを以て自然の摹倣を推奬したるものとなさば、是れ亦未だシェリングを解せざる者なり。彼が理想派たるを失はざる所以の一は、實に是の點に於て、所謂 Vorbilder（理想）の思想を輸入したるに依る。歷史的眼孔を以て絕對の表現を觀じたる彼は、自然界を以て完全（ダスヴォルコメネ）と不完全、美と不美との混合となしたり。是の意味に於ては、事實に於て存在する自然界（"Die in der That seiende Natur"）は畢竟非實在（Nichtseiende）のみ。然らば則ち完全なる美術の造り出したるものは自然の美を判斷すべき標準なることも、亦甚だ明瞭なるに過ぐるに非ずや。

吾等はシェリングが、自然を以て美術を羈束すべしと說きたりとは言はざりき。鷗外が、美

術を以て自然よりも完美なりとせるシェリングが說をとりて吾等を難ぜむとするは、甚だ疎忽なりと謂ふべし。獨逸美學の一斑を窺ひたらむものの何人も諳記すべき所のものを以て、却て吾等の敎を求む、是れ亦甚だ迂なりと謂ふべし。

其二

吾等は又シルレル、シレーゲルの一輩が、Stoff=Form（質料＝形式）の方式の下に美術の思想を置きしは、やがてフヰヒテが主觀理想主義とシェリングが客觀理想主義との兩端の調和を企てたるものと見るを得べきを注意せり。鷗外は是を評して曰く、

藝術にては、形もて質を滅すと云ひしシルレルが頗るめでたき說と、藝術にては人空き形となり、自然のみにては人野にありて愛を失ふと云ひしフリードリヒ・シレーゲルが頗る虛誕なる說とを一樣に見て、シルレルもシレーゲルも、フヰヒテとシェリングとの極端なる說を調和せるものぞといへるは、わが會得し難き所なり。

と。あはれ意外の批評を聞くものかな。希くは、審美學者としての鷗外に對する吾等の尊敬をして却て吾等を誤らしむる勿れ。さるにても獨逸の美學史に精通する一學者の言として、

あはれ意外の非難を聞くものかな。

シレーゲル（云ふまでも無くフリードリヒ）がフヰヒテの流を汲めりとは尋常の見にして、まことは是の二人は共に審美說に於て第三者に負ふところありしは、輓近史家の齊しく唱ふる所なり。第三者とは誰ぞや、シルレル是なり。けにやフヰヒテが審美說は、所詮シルレルが審美說を自己の哲學に包容したるものに外ならず。シレーゲルが『希臘詩歌の研究』はた同じくシルレルが審美論に基けるものにして、ダンツェルが言ひし如く、其文體さへも似通へり。審美史家の或者が、シルレルの繼續者の中にシレーゲルを數ふるものあるは、かゝる因緣あればならむ。

是れ二者が外部の關係に就て言へるものなるが、更に其學說の內容に就て一瞥せば、二者の間に更に親密の連絡あるを見出さむ。審美學史に精しき鷗外の獨り是を訝りしぞかへすがへすも訝しきや。

『希臘詩歌の研究』の中にシレーゲルが口を極めて近代の美術、殊に詩歌を難ぜしは、果して何が爲なりしか。彼が希臘時代の理想的完美を Das Schöne（美）となせるに對し、近代美術

を Das Interessante（興）（是の語詳當らず　暫く記して大方の敎をまつ）となしたるは、果して如何なる意味なりしかを鷗外は知れりや。古代圓滿の美、一度び地に墜ちて美術は私心の興と爲り了りてより、玆に無限の實在に對する向上的渴仰は初まりぬ。是に於てか、文は野の終れる邊りに初まりて、更に新に客觀的完美の域に到るまで幾多の階段を精進せざるべからず。所謂 Das Interessante は是の階段の一にして、曾て失ひし Das Schöne の理想境に達する一の準備に外ならず。Das Schöne（美）は卽ち Das Objective（客觀）なり、內容（フユルレ）と勢力（クラフト）との均衡なり。內容ありて勢力無からむか、若くは勢力ありて內容無からむか、是れ共に一面の偏輕若くは假重を表はして、共に非美若くは醜なるを免れず。所謂 Das Interessante は是の如き狀態を示すものなり。シレーゲルが是の說を、鷗外の好きなる表もて示せば左の如し。

內容（無勢力）
及
勢力（無內容）　Das Interessante.

美　Das Schöne.

內容
勢力

荷も審美學史を解するものは、誰かシレーゲルが是の說の中に美の理想を以て心力（ゼーレンクレフテ）の調和的遊動に歸するシルレルが根本的思想を認めざるものぞ。シルレルが所謂心力の調和的

遊動とは何ぞ。理論的形式と實際的實質との二個の動機の均衡に非ずや。是れやがて希臘の昔にありて今に無く、却て是れ今の美術の理想なりと云ふシレーゲルが客觀（Das Objective）若くは美（Das Schöne）に非ずして何ぞや。是れ吾等が一個の審美學者として言說するには、歷史上餘りに明瞭なるに過ぐるに非ずや。吾等は寧ろ鷗外が會得し難しとて、是の餘りに明瞭なる事例の說明を吾等に求めたるを恨みとなす。

シレーゲルが所謂勢力（クラフト）とは主觀の側に於て美術を形成する所の能力の義にして、內容（フユルレ）とは客觀の側にありて是の能力によりて形成せられて美術となる所の實質の義なり。是れやがて吾等が嘗て形成と實質と言ひしものと同じ、是れ亦注意すべき也。

吾等が鷗外に答ふるところ概ね右の如し。多謝す、吾等は是によりて審美學者なる鷗外がハルトマン以外に於ける歷史的智識の一斑を窺ふを得たりと雖も、鷗外が爲に計るに斯の如き疑問を發する代りに、シェリング、フヰヒテの前にあるのシルレルが、如何にして二氏の說を調和し得しかと云ふが如き問を起すの寧ろ無邪氣なるには如かざりし。さても惜しや。若し夫れフヰヒテ、シレーゲルが說として鷗外の揭ぐる所のものに就ては言ひ聞えたきこ

と山々あれども、こゝは審美學の講壇にも非れば、只吾等に屬する他の非難を辯ずるに止めつ。鷗外もし敎ふる所あるを得ば、乞ふ聽かむ。

（明治二十九年六月）

鷗外とハルトマン

吾等が鷗外の美學に精しきを信ぜむと欲するは、其のハルトマンに精しきことを信ずるが爲に外ならず。もし鷗外にしてハルトマンに精しからざることの明ならむには、次に來るべき結論は果して何事なるべきぞ。

吾等は鷗外を敬するものなり、希くは吾が敬するものは誠なれ。希くは誠の爲に吾等の齒に衣すること勿らしめよ。

倫理學の歷史がソクラテースにまで溯り得べきが如く、美學の歷史のプラトーンにまで溯り得べきを認め、アリストテレース、プロチヌスよりギュヨー、カリエール、ハルトマン、グリムに至るまで、一體同流の歷史的發達を認め、更に美學歷史は是の全系を討索することに於て初めて其の完全を見るべきを認めたる吾等は、ハルトマンが獨逸近世の美學の十分なる

發足點としてカントを取りたるを難じたりき。博學なる鷗外は卽ち是を駁して曰く、ハルトマンの著はせるカント以來の獨逸審美學は、前人の審美學史の補遺を物したるものにて、そのたま〳〵前人の書に出でたる一二の學者に及びしは、其學者の著述にして前人の見るに及ばざりしものあるが爲なり。ハルトマン豈カント以前の歷史を蔑視せむやと。

是れ大に謬れり。是れ鷗外が讀書眼の粗漏なるが爲にして、要は初めより成心を挾むで他に接するの弊に坐す。

ハルトマンは其『カント以後の獨逸美學史』の序文中に、其書の成れる所以を述べて曰く、吾が目的は初めは單に前人の遺漏を補充するに在りき、（Meine Absicht ging ursprünglich nur dahin, eine Ergänzung der Werke von Zimmermann,.... zu liefern in Bezug auf diejenigen Aesthetiker, welche in denselben keine Berücksichtigung gefunden:）是れ鷗外が言の如し。然れども彼は次に事實の豫期と異なるものあるを發見し、遂に斷言して曰く、

是等美學者の研究を遂げたる後、予は遂に彼等の說の起原を以てカントに歸し、科學的美學の始祖として彼を吾等の卷頭に置くことを以て滿足するに至れり。云々。（Durch die

Revision dieser philosophischen Aesthetiker sah ich endlich genöthigt, auf Kant zurückzugreifen und diesen als den Begründer der eigentlich wissenschaftlichen Aesthetik an die Spitze meiner Untersuchungen zu stellen.)

想ふに、鷗外は吾等を難ぜむが爲にハルトマンが是の言を故意に見落したるものなるなからむや。美學の上にことさらに科學的の形容詞を附したるは、彼によりて一の辯解の辭なるべしと雖も、カント以前に學問的に美學を說明したるもの二三家に止らず。然らば則ちハルトマンを以てカント以前の歷史を輕蔑拋却したるものとする又何の不可かあらむや。鷗外は一意其師を辯護せむと欲して、却て誤解せり。ハルトマンの前に一喝棒を喫するなくむば幸なり。

鷗外が唯一の論據は、ハルトマンの序文にあり。而してあはれ彼は序文をだに正解することをなさざりき。遮莫、吾等は博識なる美學者として鷗外が、ハルトマンが美學史の內容に就て、吾等の說を批評せざりしを恨みとす。試に問はむ、ハルトマンが其卷頭の第一章に述べたる四種の見點よりカントを見たるは、果して以て獨逸美學の統一點とするに足るべきか。シェリングが抽象理想主義の成立は、カントの何れの部分に於て其說明を求むべしとするか。吾等はプラトーンの實體論が直接に彼を影響せりと謂ふを欲せずと雖も、只是の如き哲學理想の起原は獨り哲學歷史の發達に於て其說明を求め得べきを想ふのみ。獨逸の美學は言ふまでも無く純理哲學的美學なり。是の傾向はカントにありて未だ甚だ較著ならざりきと雖も、フヰヒテ以下の諸說は、所詮其純理哲學の餘論に過ぎず。ハルトマンの美學が其哲學全系に對するが如きの位置は、ハルトマン以前の何人にありても決して見るを得ざりし所のものなり。然らば則ちハルトマンたるもの獨逸美學の歷史を完成するに於て、獨り其源頭をカントに止むべからざりしにあらずや。よし定論の便宜上カントを以て其等を起すとするも、彼は何の據る所ありて獨逸美學の全系を擧げてカントの哲學に綜括すべきを公言し得たりしや。

鷗外はハルトマンを辯護して謂へらく、カント以前の歷史と獨逸哲學との親密なる關係の存在することは、ハルトマン決して是を拒まず。只彼れの書の是を載せざるは、前人の補遺なりしが爲なりと。是れハルトマンを誤解し却て吾等と共にハルトマンを難ずるものに非ず

や。最辰の引仆しと云ふべきなり。

鷗外は又、吾等がチムメルマンの美學史を紹介せしを難ずるに、全然ハルトマンの語を以てせり。ハルトマンの說は吾等ハルトマンの筆によりて已に是を了知せり、何ぞ更に鷗外を待たむや。『姑く自ら評することを止めて、ハルトマンが評を擧げ』たる鷗外は、何によりてハルトマンの說其ものの誤謬なきことを確め得たるか。御師匠樣の言は凡て是れ眞理なりとするは小學時代の信仰にして、獨立せる學者の屑しとせざるべき所、吾等は我が畏敬する鷗外に於てもかく卑屈なる思想家を見むことは思ひかけざりき。

且夫れ一物を稱揚することと、其全部を取るべきこととは全く相別たらざるべからず。チムメルマンの抽象形式主義は素より明なる事實なり、誰か今日に於て是を唱道するの愚者あらむや。取るべきは是を取り、捨つべきは是を捨つ、是れ當然自明の事。識者は自己以外のあらゆるものに向て批評的研究を施さざるべからざるなり。吾等はたしかにチムメルマンを推奬せりき。而かも或學者が一も二もなくハルトマンを盲信するが如く、徹頭徹尾全部を擧げて是を信奉せよとは勿論云ふの意なかりしなり。

（明治二十九年八月）

鷗外の所謂抽象理想主義

吾等は鏡花が作中の人物を抽象理想に傾けりと云へり、是れ鷗外の言の如し。又、標準的事物の中に非れば理想現はれずと斷ぜり、是れ亦鷗外の言の如し。而かも鷗外が是の二個の實材を以て、吾等を斷じて抽象理想派なりとするに至ては、天下の具眼者、何人か鷗外の判斷力と批評眼の如何に明晰に、如何に穎敏なるかを驚嘆せざらむや。

吾等は五月の紙上に於て、反覆其謬見を正したりしに、鷗外は全く吾人の言に其耳を塞ぎ、相變らず其說を瀆へず、呼で曰く、太陽記者は抽象理想派なりと。

いかなれば鷗外は其過を改むるに吝なるぞ。人は自己よりも眞理に忠ならざるべからず。吾等多く言ふを欲せず、只問はむと欲す。平等は差別を容るゝこと能はざるか、特殊は遍通を容るゝこと能はざるか。そも〳〵理想とはやがて是の二者の內融和合せる妙體を言へるものには非るか。標準的事物に個物理想現はれずとする鷗外は、果してハルトマンが美學中の具象階段論を了解せりと謂ふを得べきか。

（明治二十九年八月）

畫談一束

一　餘情

本邦の繪畫には餘情を尙ぶの風甚だ熾なり。世人其利を見て其弊を見ず。吾等竊に之を憂ふ。

大なる美術は觀者を支配せざるべからず、觀者より支配せらるべからず。所謂餘情とは、美術を擧けて觀者の支配に一任するものに非ずや。

人は自己より大なるものを作爲すること能はず。其筆を省き其色を毀す、故に婉微糢稜を裝ひて觀るものの想像を催起するは、觀者をして美術家たらしむるものなり。其効果大なるが如くにして而かも極めて卑小ならずむばあらず。餘情とは所詮斯の如きものには非るか。

大なる美術は觀るものを自己以外の異境に導かざるべからず。古代希臘の美術家の中には其所作によりて殆ど一の宗教を作りたるものあり。是れ夫の己の勞を省きて他の想像に委ぬるが如き佼々たる小技に孰れぞや。

吾等は、必しも全く餘情を排するものに非れども、是を過重するの非を爰に一言するのみ。

二　怪奇

所謂毛を謹みて而して貌を失するは不可なり。單に其趣を形跡に求めよとは、吾等素より之を說かず。論畫以形似、見與兒童隣と云へりし東坡が詩句は、慥に一面の眞理を顯はせること吾等亦之を領知せり。然れども世上往々怪奇の畫を作るものあり、人畜花卉の常型を變じ、以て我れ能く人の敢て爲し得ざる所の新機軸を出だせりとなす。異を好み、奇を愛するの人、群焉之に雷同し、遂にその狂怪を成就するに至ては吾等言の加ふべきを知らず。常形を離れて天下豈理想の加ふべきものあらむや。畫家須く心すべき也。

三　信念

の畫家に乏しきこと已に久しきかな。明治美術會に列する所の辨天は、媚態宛然一個の娼婦なり。吾等は少女の純潔をすら畫くに能く成功したるものを多く見ず。彼等の畫く少女は老婆の如し。是れ果して何事を意味するものなりや。

四畫題

に就て吾等の言はむと欲するところ一にして足らず。今日の畫家殊に日本畫家は餘りに形式になづむ。此處に山あれば彼處に川あり、一石一樹、一亭一人、宛として其式を具ふ。是れむしろ笑ふべきに非ずや。

嘗てバルソン氏の竹叢圖を見る。滿幅是れ皆孟宗の巨竿、深藪杳として微に日影を點綴するのみ。落葉半ば黑く半ば黃に前面を埋むるが中に一條の趾痕あり。人の躊躇して行きたるが如し。只是れのみ。如是畫題は本邦畫家の夢にだも想ひ至らざる所、偶〻遠遊の外客によりて是の幽趣を傳へらる、寧ろ恥づべきにあらずや。

（明治二十九年四月）

鑑定家と批評家

眞贋を辨じ、流派を別ち、歷史を索むることは、是を鑑定家に一任せよ。其審美的價値を討尋し、所謂本體研究を爲すことは、是を審美的批評家に待たざるべからず。前者は過去美術の史家たるを得べきも、理想の標準を呈示して將來の進路に光明を拋つことは是を後者に待たざるべからず。鑑定家と批評家は、所詮相隔離すべからざる者也。

吾邦の美術界には彼れありて此れ無し。日本美術は宛然一個の考古學の觀あり、可なる所以を知らざる也。

（明治二十九年六月）

現今我邦に於ける審美學に就いて

今日の所謂審美學に關する意見の書典に表はれしは、西洋にありては遠くプラトーンの昔にあれども、審美學（エステチク）てふ語が特に一科學の名稱として用ひられしは、何人も知る如く、獨逸

の學者バウムガルテンに因りてなりき。されば系統あり獨立せる學問として塵に百餘年の歴史を有するに過ぎざる斯學が、他の諸學科の如く顯著なる發達をなさむことは、何人も豫期せざるところならむ。

まことや斯學の尙幼稚の狀態にあるの事實は、其書籍（リテラツール）の缺乏によりても知らるべし。完全の系統組織を有せる著書とては、僅に指を屈するに過ぎず。斯學の母國なる獨逸にありてすら、今日一二の學者を省きては、僅に各實驗科學の方面より斷片的研究をなすに過ぎず。英に於けるも、佛に於けるも亦然り。今日一部の學者の意見は、恰も心理學に於けるが如く舊來の純理的思索を拋却し、實驗的攻究によりて新に其科學的基礎を築かむとするにあり。されば少くとも是の派の學者にありては、一系統ある審美學の全體を成さむことは、尙遙かなる未來にあるならむ。

飜て我邦に於ける斯學の現象を見るに、尙更に甚だ幼稚なるものあり。倫理、心理等の諸學にありては、著書、飜譯共に數ふべきものあれども、審美學の著書とては一もあらざるなり。十數年前、中江兆民氏の手に成れるエロンの飜譯、維氏美學二卷ありと雖も、今日より

是を見れば、その選擇の無謀、譯文の粗笨は、當時の人が如何に斯學の歴史及び意義に味かりしかを證するの一標章たるに過ぎず。吾等若し明治二十九年の今日にありて、審美學に於ける社會の智識が維氏美學時代に比して多少の進歩をなせりと言ふことを得ずば、是れ寧ろ甚だ奇怪なることなるべし。而かも其の文學專門の諸雜誌に表はれたる論文等によりて是を察する時は、彼等の所說はマーシャル、サリー、ナイト、ボサンケ等の著書、若くは一二『素人學者』のハルトマンの講義に憑據するもの多きが如く、直に獨佛の原書を叩いて甚深の研究を爲したるもの稀なるが如し。今の人は動もすればハルトマンを呼ぶ。然れど吾等は疑ふ、哲學及び審美學の歴史的發達を知らざる人が、如何にして審美學者としてのハルトマンを知り得べきかを。カリエールは如何にしてヘーゲルに同じうして而かも異なるか。ハルトマンは如何にしてカリエールに異なりて而かも同じきか。獨逸及び英佛の哲學は、最近五十年に於て如何なる變化を經しか、ショーペンハウェルの抽象的理想主義が、今日學者の具象的理想主義に到達するまで、フキッシェル、ヘーゲル、シャスレル、ケストリン等は如何の地位を歴史上に占得せしか。吾輩は如是歴史的智識無くして、如何にして眞にハルトマンが美學上の

意義と價値とを知り得べきかを訝るなり。其の單に最近の系統なるの故を以て、一も二も無く是を尊崇依信するが如きは、是れむしろ小兒の見のみ。

我邦學者の或者は、近年の學風につれ、實驗的方法によりて審美學を究めむとするものあり。實驗方法、素より可なり、否、純理的方法と相待つて離るべからざるものなり。然れどもつら〳〵彼等が爲す所を見て、吾等は猶實驗心理學が生理學に移るが如く、實驗審美學が心理學に移ることなきを希望せざるを得ず。

且夫れ吾等の大に遺憾に堪へざるは、審美的感情に富めりと稱する我が邦人中に、又美術國なりと自稱する我邦に、審美學を專門とする學者のはなはだ少きことなり。吾等の知る所にては、斯學を專門とせるもの若くは專門とせむとするものは、大塚文學士及び文科大學中に一二の人あるのみ。而かも是等の人々は持重して其意見を表はさざるを以て、社會は實際に於て今日殆ど一の審美學者を有せざるに同じ。吾等は特別研究（スペシアルスタデー）の早夙を望む者に非ずと雖も、我邦の學者中に審美學を專攻するものの續々輩出せむこと猶、倫理、心理、諸學に於けるが如き日の速に來らむことを希望するものなり。

（明治二十九年五月）

南歐美術譚

一　ペリクレース時代

希臘にありて美術の最も榮えしは、何人も知る如く一ペリクレースの時代なるべし。精しくは、ペリクレースの誕生よりアリストテレースの死に至る頃まで、卽ち紀元前六世紀より五世紀の頃なるべし。當時の製作にかゝるもろ〳〵の美術は、製作其物の價値より見るも、又是等の製作物が後世に及ぼしたりし感化勢力に就て言ふも、永く世界美術の歷史中に於て最も記憶すべき時代の一たるを失はざるべし。

あはれ、かゝる貴むべき美術の、人の手に成りたる時代の文化は、道德上に於て、はた政治上に於て、そも如何に美はしかりしや、ゑかも斯の如き美はしき文化の俄然として亡び失せしさまの、さながら暗雲の斷え間にあるかと見れば跡も無き流星の光にも似たりしは、そも如何の事情に依れりしぞ、是等は文明史家の讀者に答ふべき所のものにして、吾等の今茲に述べむと欲する所にあらず。

吾等の玆に讀者に語らむと欲するは、古今の記錄に據り、是の美はしきペリクレース時代が吾等に殘したる美術的製作物の最も名高きものに就きて、其の流風遺韻を髣髴せむと欲するにあるのみ。是れくさ〴〵の美術の漸く榮え行かむず勢ある我邦現代の美術家、批評家の參考の端ともなれかしとて、さては彼邦の美術に通ぜざらむ讀者の一粲に供へむとて、平易通俗を旨として述べたるものなり。讀まむ人之を諒せよ。

二　ニオベ像

希臘の傳說によれば、ニオベはテベスの女王なり。是の女王、其夫アムフヰオンの間に十四人の美はしき小兒を有せしかば、ツォイス神の配神の一なるレトの僅に二兒を生めりしを嘲りたり。レト神の二兒アポロンとアルテミスとは、そを此上無く口惜しきことに思ひ、ニオベの十四兒を殺して其怨を報ぜむと企てたり。かくてニオベが七男と七女は、是の二神の矢先にかゝりて斃れ、ニオベの配なるアムフヰオンは其兒等の死を聞きて自殺を遂げぬ。遣り難き悲哀の一念に身、石と化したる憐れなるニオベは、洪水の爲に小亞細亞の方に運び去られ、今も猶其石となりたる像はシピロス山の巓にあり、慈母が悲哀の涙は泉となりて流ると云ふ。

是の哀れなる傳說に基きて初めてニオベの像を作りし人は、今猶定かならず。或はスコパスと云ひ、或はプラキシテレースとも云へど、今は傳はらざれば知るに由なし。後人の其遺型に據りて造りたるもの、今猶伊太利のフヰレンツェにあり。是の像によりて考ふる時は、原作の巧妙實に驚くべきものなりしならむ。

想ふに、是のニオベは疑もなく古希臘が吾等に殘したる塑像中の最も美はしきものの一ならむ。『トリビユン』のヱヌス像の如く、婦人の全形を表はし、原作には十四人ありしを、後に摹したるものにては其の最も小き女兒のみを殘したり。

是の哀れなる小兒は、其同胞と共に罹りたる不測の禍難に惶れ、あはてふためきて方に其母近く逃げ來れり。頭は母の裳に掩はれ、一手を擧けてその救護を仰ぎたり。母は華麗なる長衣を纏ひて直立し、左手は其裾を集めて方に其兒を掩はむとせり。右手は（こは後人の補充したるものなるが）其兒を體近く引寄せつゝ、その柔さしき壓抑もてその安全なる救護を

確めたるものの如し。かくして立てるニオベの顔は、吾等の想像の殆ど達し得られざる女子の威嚴と愛情との完全なる體想を現はせり。

彼は暴惡なるアポロ神等の迫害に對して、如何なる哀願も最早その甲斐無きことを認めたり。其顔には失望と美の結合を示し更に進で、かよわき人間の悲哀が如何に崇高なる情趣を表はし得べきかを示したり。彼れの面上には今や恐怖なるもの無し、只悲哀、深酷にして助けなき悲哀あるのみ。彼女の面上には今や憤怒なるものなし、彼女は人軀の弱小を觀じて、逃れ難き運命の手に甘じて自己と自己の愛兒とを委ねたるなり。彼女は憤怒なるもののまことに力無きことを悟りたるなり。彼女の面上にはラオコーンに見る如き身軀の苦痛を解脫せむとする我慾の片影だも見ること無し。廣大なる神の威力と甚深なる慈母の悲哀とは、斯の如き劣情に心を苦むるを容さざりければ也。

彼女にありては事すべて悲哀の中に埋沒せり。彼女の滿身只涙あるのみ。怒無く怨無く、身は避くべからざる運命の中にありて、只愛兒の爲に濺ぐべき萬斛の涙を餘すのみ。彼女を苦めむとする暴神は却て彼女の爲に嘲られたり。運命は一度び彼女を陷れて、今や彼女は翻

て運命を凌駕せり、迫らず慾らず、亂れず怕れず、毅然として逆運の渦心に立ち、却て愛兒を懷いて慈母の涙を濺ぐ。天落ち地陷るも、ニオベが是の心を如何にすべき。花よりも美はしく、星よりも清らかに、滴るが如き慈愛の露によりて洗はれたる高雅端麗の顔容を以て、滔天の魔力に面して毫も其の累はす所とならざるに至ては、天下の大なるもの何物か是に如かむや。ニオベが悲哀の爲に石となれりと云へるいみじき傳說も、未だ這般の情事を盡して餘み無きこと能はず。

是の如きものを、スコパス若くはプラキシテレースの手に成れりと云へるを後人が其遺型を傳へたるニオベ像となす。

三　フヰデアスのツォイス像

古より一宗一教の始祖開基となり、衆生百世の爲に救濟慈悲の明燈を揭げたるもの、大聖に非れば則ち鴻德、預言者に非れば則ち英雄。若し夫れ一把の斧鑿と一塊の牙石とを以て、能く一代生靈の信仰を動かすものに至りては、寧ろ偉とすべきに非ずや。フヰデアスは實に

是の如き人なりき。

こゝにはフヰデアスの傳記を語るの遑なし。唯希臘美術の第二期として、ヘラス半島が萬世に誇るに足るべきペリクレース時代の精華を一身に萃め、其不朽なる大名の下に、あらゆる時と處との嘆美と渴仰とを擔ひ、其の世にありし時、讒姦妬賊の爲に遂げたりし非業の最後を跡無き流に洗ひ落し、今は山綠に空長閑なる雅典(アデン)の古丘に靜臥して、美術百代の汚隆を觀じ居ることを一言すれば則ち足りなむ。

ツォイス卽ち羅馬人のジュピテルはオリムプ神山に於ける至大至高の神にして、あらゆる神と人との父、希臘、羅馬の神話の中心なり。天を支へ、地を配し、雲を飛ばし、雷を驅り、人生と運命とを指導する、其威力の高絕無限なるはもとより言ふまでも無し。

是の如きフヰデアスは、是の如きツォイスを像れり、成る所果して何物なりしぞ。

フヰデアスが造りしツォイスの像は、紀元五世紀の頃まで凡そ八百年の間は、事も無く其殿堂に安置せられありしが、惜しや、祝融氏の手にかゝりて壞され畢むぬ。而かも流風餘韻はさすがに幾多後人の擬作にあらはれ、今なほ人をしてその髣髴を想はしむ。擬作中の尤も

美はしきものは、現にヴチカノにあり。嚴かに亂れかゝりて豐かに左右の肩にゆりかけたる頭髮、平かに廣き額の下に銳くきざまれたる雙の眉毛。大なる眼は闊と見開きて大千世界に照臨するが如く、端正に、高き、廣き、隆鼻は正義の師表を示すが如し。稍開かれたる脣は、凜然たる威嚴の中に言ひがたき無量の慈悲を宿し、其の穩かに卷き縮まれる鬚髯と共に、希望と愛情を現はすが如し。凡て是れ全希臘人が、勇氣、威嚴、智慧、愛情に對する理想的完美を表現するものに外ならず。擬作によりてフヰデアスの故型を想像すれば、全希臘人が、中世の耶蘇教徒がバレスチナに於けるが如く、巡禮趨拜、後るゝことを是れ恐れたることの洵に當に然るべきものあるを想はずむばあらず。何となれば彼等は、彼等のホメーロスに於て、彼等の祖先が中央亞細亞より齎し來り、幾百千年の間、山明水媚のヘラス半島に於て漸く作り成したる彼等の神話に於て渴仰讚美する所のものを、今や見得べく、觸れ得べき、塊然たる形體の中に於て、眉睫の間に實現せられたるを認めたればなり。希臘、羅馬の民は是の像の前には一種の魔術を感じたり。憂ふるものは喜を得、悲める者は望を得、あらゆる地上の不滿足は、天上無限の光榮によりて解散せらるゝなり。獨り是を觀るもののみならず、是を

作りたるフヰデアス自らも、實に是の魔術の爲に打たれたることは、次の傳說によりて知らるべし。曰く、ツォイスの像成りて是を安置するや、フヰデアス其前に立ちて凝睇多時、以て其作の巧拙如何を檢案せむとせり。俄然彼は畏敬感激の情に堪へず、覺えず像前に跪き、祈りて曰く、賤匠の作よく神意に副ふことを得たりや、乞ふ靈驗を得て其の左右を知らむと。言未だ了らず、霹靂一聲、晴天に震ひ、電光閃々、堂中に落ちたりと。

是の如きものをフヰデアスのツォイス像となす。嗚呼フヰデアス彼れ眇乎たる一介の工匠のみ、而して能く是の如きを得たる所以のものは何ぞや。神は不信の胸に宿らず。神に非るよりは何物か能く神を作らむや。大なる美術家は多く、自己よりも大なるの製作をなすもの豈他の故あらむや。

フヰデアスがツォイス像を表はして遺憾無きもの、實にホメロースが左の句にありと傳ふ。フヰデアス自身も恐らくは是に憑りて其想像を構へしものならむと云ふ、錄して讀者に示す。

"Also sprach und winkte mit schwärzlichen Brauen Kronion,
Und die ambrosischen Locken des Königes walten vorwärts
Von dem unsterblichen Haupt; es erhebten die Höh'n des Olympos."

〔是れテーティス神の哀願を聞きての語なり、クロニオンはツォイスの又の名の一なり、クロニオンの子なればなり。〕

（明治二十九年六、七月）

春江花月夜

張若虛

春江潮水連海平　海上明月共潮生
灩灩隨波千萬里　何處春江無月明
江流宛轉遶芳甸　月照花林皆似霰
空裏流霜不覺飛　汀上白沙看不見
江天一色無纖塵　皎皎空中孤月輪
江畔何人初見月　江月何年初照人
人生代代無窮已　江月年年望相似
不知江月照何人　但見長江送流水

白雲一片去悠悠　青楓浦上不堪愁
誰家今夜扁舟子　何處相思明月樓
可憐樓上月徘徊　應照離人粧鏡臺
玉戸簾中卷不去　擣衣砧上拂還來
此時相望不相聞　願逐月華流照君
鴻雁長飛光不度　魚龍潛躍水成文
昨夜閒潭夢落花　可憐春半不還家
江水流春去欲盡　江潭落月復西斜
斜月沈沈藏海霧　碣石瀟湘無限路
不知乘月幾人歸　落月搖情滿江樹

(233—235頁)

日本西洋兩畫風の折衷

西洋文明の東漸してより、摹倣先ち、折衷之に繼ぐ。彼の長を取り、我の短を補ふ。事是より美なるはなし。折衷の二字が始ど一部論者の旗幟を染出せしは、蓋し無理ならぬことと謂ふべし。

されど是を言ふことの易くして、是を行ふことの難き、所謂折衷の如きもの亦稀なるかな。人は己の足の上に立たざれば安むぜず、己の心によりて考へざれば安むぜず。彼は自由の動物なり。其手を援き、其足を捉へ、他の好む所に隨はしめむと強ふるも、彼は久しからずして本來の自己に歸らむ。自己を外にして、彼に滿足を與ふべきもの無ければなり。

東西の文化は其の來る所の歴史を異にし、其の據るところの風土を異にし、其の生まるゝ所の人種を異にす。歳を經ること幾百千、源泉いよ〳〵遠くして末流いよ〳〵隔つ。一朝交通の便に際會して胡漢たま〳〵手を握るも、彼の文物を移植して直に我が田園を賑はさむと欲するも、豈容易すく爲し得べけむや。所謂折衷と云ふものの叫聲のみ高くして、事實の上

に成功したるもの少き、はた是れ當然ならむのみ。

東西畫風の折衷も亦夙に唱道せられたり。九鬼圖書頭の一行が京畿の古美術を討索せしころより、東西美術の折衷は已に說かれたり。近時橋本雅邦氏之を說き、狩野芳崖氏も之を說き、五姓田、原田、久米、黑田の諸氏も亦之を推奬するの意なきに非るが如し。日本美術の外に西洋美術史及び美術解剖を敎へ居たる美術學校は、來九月より新に洋畫の一課を設くるが如き、想ふに亦是の折衷の氣運を鼓吹するに於て多少の力無しとせず。要するに東西美術の折衷は獨り公衆の輿論なるのみならず、美術專門家大多數の意見なりと云ふも亦不可無きに似たり。知らず、斯く社會の公議とも云ふべき折衷は、事實の上に於て幾何か其功を奏したるか。

蓋し吾が希ふ所の折衷とは、徒に彼の長を剪りて我の短に糊するの謂にあらざる也。國民は自己の胃腑によりて消化せざるべからず、自己の頭腦によりて思考せざるべからず。故に折衷は咀嚼と共に同化を豫想し、補充と共に獨立を豫想す。眞の智識は統一を必要とする如く、眞の折衷は調和を必要とす。

然らば則ち是の如き折衷を實現するに必要なる準備如何。他無し、己を意識するは其一なり、他を理會するは其二なり。既に己を識り、又他を解せば、他を取りて己を利する所以の道亦自ら明ならむのみ。是の如き準備無くして、漫に折衷を口にするも爭でか其甲斐あるべきや。

世を擧けて東西美術の折衷を說くの今日、一の金岡無く、一の探幽無し。吾等は其の當に然るべき所以を思うて、敢て濟々たる美術家諸君の猛省を乞はざるべからず。

一　過去の我邦に於ける折衷美術

人或は謂へらく、折衷なるもの遂に成し得べからず、東西畫風の特質は由來氷炭相容れざるものある也と。果して然るか。

吾等は今日深く東西繪畫の內容に立入りて、精細なる比較研究を爲し得るの位置にあるものに非ず。而かも敢て折衷の能ふべく、且望むべきを認むるは、主として歷史上の根據あるが爲なり。乞ふ少しく之を語らしめよ。

金岡、彼れ何人ぞや。所謂百濟畫師、高麗畫師の渡來によりて、新に我邦に輸入せられたる印度式の繪畫を捉へて、大和民族の美術思想の鎔爐中に融化渾成したるものは彼に非ずや。彼が製作を以て是を印度式に比せよ、明に彼が成功せる折衷家の一人なりしことを示すべし。探幽、彼れ何人ぞや。豪放粗厲なる宋元の繪畫を同化し、醇化し、一種特異なる日本的精神の中に再造したるもの卽ち彼に非ずや。彼は決して己を捨てて他に走り、新奇に趨つて歸るを忘れたる、滔々たる當代群畫家の儔にはあらざりしなり。近くは是を渡邊華山に見よ。吾人は彼に於て東西繪畫の折衷者の好望なる先驅を認めずむばあらず。

想ふに探幽が從來の土佐派及び宋元以降の支那畫に對して、一種の天才的綜合を成就し、茲に狩野派の一流を樹立せしより、其勢殆ど一世を席卷せりき。然れども時勢は暗々の中に更に一層偉大なる改革を繪畫界に促しつゝありしなり。慶長、寛永このかた幕府の爲に特に允許せられし和蘭貿易は、油畫、銅版畫等の輸入を長崎に開始し、同時に支那船は淸畫を齎し、茲に日本の繪畫界に二個の新分子を紹介したり。後者は柳里恭、大雅堂の一輩及び黃檗派の僧侶の手によりて、遂に所謂文人畫の一派を成し、大に學者、文人の間に流行せりと雖

も、前者は其當時にありて著しき影響を遺さざりき。蓋に司馬江漢等の二三輩ありて、西洋畫風の痕跡を止めたりと雖も、其製作は幼稚にして見るに足らず。然れども是の斬新にして自然に、未だ曾て我が邦人に知られざりし繪畫が、舊來の畫家に及ぼせる感化は、案外に冥冥の中に深大なるものありしならむ。世人或は、圓山應擧の寫生風を以て洋畫の勢力を被りたるものとするも、强ち無根の說には非るべし。

應擧西に出で、文晁東に起りてより、我繪畫界の風潮はいよ〳〵改革の氣運を昂めたり。もし應擧を以て和洋折衷の畫家となすを得ば、彼は古今和漢の各派を一團として熔化したる谷文晁と共に、更に和漢洋三派の統一を第三者に催促したるものと謂はざるべからず。渡邊華山は、實に斯かる時に際して崛起したるなりき。

華山は單に畫家にあらず。然れども那が如き時世にありて洋學を學び、遠大の志操を抱負したりし彼が作畫に於て、吾等は繪畫界に向ても亦殆ど和漢洋の三派を調和大成せむとしたる彼が偉大なる希望の痕跡を認め得べし。彼が作畫には、寫生の精緻まゝ應擧の壘を摩するものあり、豪放なる文人畫あり。時としては油畫に於て見る如く、光線の濃淡を附したるも

のあり。又邦畫の筆法を驅りて洋風の寫法を取り、明に折衷調和の企圖を示せしものあり。皆是れ凡庸畫家が剪綴餖飣の陋技にあらず、一氣全幅に亙りて渾融の妙まゝ云ふべからざるものあり。今日より見れば粗笨未熟の跡あるは勿論なりと雖も、彼が如き時代にありて、那の如き畫風を作るの卓見才氣は、後世畫家の須く鑑仰すべき所なりとす。今日の人、華山に對して果して如何の感ありや。

吾等は畫家にあらず、自ら筆を驅りて折衷の方法を講ずる能はずと雖も、已に數十年前の故人にして尙且つ華山の如きものあるを知らば、吾等は明治昭代の濟々たる多士に向て、是の希望を述ぶることの必しも越俎の言に非るを思ふ。

二　久米氏の日本繪畫談

所謂南派の洋畫家として有名なる、美術學校教授久米桂一郎氏の說に曰く、自然に對する觀察を其まゝに表象するは畫道の本意なり。從來の日本畫は餘りに形式に泥み、流派に拘る。今後の日本畫は、日本畫の畫き方によりて、畫家が自然に對する感情を其まゝ現出する

ことを務めざるべからずと。

大體上よりは、何人も氏の所說を非認するものなかるべし。蓋し畫家（一般に美術家）の情思は、第一に眞ならざるべからず。時代と方處とは各〻是に通ずるの精神を有す。個人たる美術家が、是の如き精神の中に薰陶化育せらるゝは素より免るべからずとするも、又その製作中に包容する所の實質の如何なるものなるにもせよ、而かも其の表象する所のものは、彼の自我の誠實なる情思に本けるものならざるべからず。夫の成式に依傍し、舊型を固守するものは、其の情思に於て已に誠實ならざるなり。是れ豈人を感じ世を動かすに足るものならむや。久米氏が自家の觀察を主とせられたる、素より通論なりと謂ふべし。

是を以て畫家は、自己特有の世界觀によりて其筆を染めざるべからず。是れ繪畫が美術の尤も主觀的、はた理想的なるものの一たる所以にして、又建築の如きものと大に其趣を殊にする所以なりとす。建築にありては、建築家の性格はその製作の中に表はるゝこと甚だ尠し。何となれば、是の種の美術は隨時隨處、國民の一般性格によりて其形式自ら制せられ、其風樣亦自ら定まるものなればなり。ゴジック若くはビザンチンの樣式は、一二建築家の創作

にあらずして、時代と國民とのあらゆる文化の綜合的勢力の上に現はれたるものなり。建築の繪畫に於けるは、猶叙事詩の抒情詩に於けるが如き也。繪畫は已に斯の如く其物の性質上主觀的なるものなり。吾れ人のそを見るや、獨りその線條彩色を見ずして、更に畫家の精神の映像を其中に認めずむばあらず。描く所は等しく得れ神父なり、一は暴風の中に在り、一は旭日の赫灼の光の裡にあり。吾人は是によりて、ミケランジェロとラファエルとの差別を見得べきに非ずや。繪畫が美術中の或物に比して、吾人の深厚なる同情を惹起する所以のもの、實に是の主觀的性質の上に基く。久米氏が自家の感情を主とするを說きしも、亦大に吾等の意を得たりと謂ふべし。

若し夫れ日本畫の爲に謀るに、果して自家特有の筆法に依て自然を描寫するの外、更に進で西洋繪畫を利用し、包括すること能はざるべきか。久米氏の說は玆に至て未だ其の左右を窺ひ難し、是れ吾等の遺憾とする所なり。

三　時代と美術

美術の價値は、其の時代と相待つて始めて全きを得るものなり。フヰデアスの作甚だ妙なちむ。而かも今日の人にして之を摸倣して其原型を失はずとするも、誰か其ツォイス像の爲に巡拜の隊伍を作るものあらむや。天平の美術は古雅高尙、吾人の嘆賞して措かざる所なり、而かも是れ天平時代の人を待つて初めて可なり。明治の人倣つて之を爲らむか、終に剽竊摸倣の譏を免れじ。文化は不斷に流轉し、人心は念々に精進す、夫の後生の人を率ゐて往古の殘型に陷れむとするものは、美術進化の歷史を解せざるものなり。

四　風景畫の統一に就きて

讀者もし上野公園に於ける明治美術會の常置館を訪はば、その繪畫の大多數は風景畫なることを注意するならむ。げにや今日洋畫の製作は、殆ど風景畫によりてその大半を占得せられ居るなり。

畫家諸君よ、しばらく一個の素人として吾等の門外評をゆるせよ。吾等は臆面なく言はむと欲す、現時の風景畫には統一少しと。

風景畫の統一とは何ぞや。是れ初心なる畫家の既に熟知し居るべき所のもの。一言すれば、畫幀中に主眼體に對する觀者の一視角によりて全幀を統一するの謂なり。精しく言へば、畫家が因て以て觀者の注意を萃めむと欲する所のものを取て、所謂視線的圓錐體の中心に据る、全幅の物體は是の一點を中心として、其色彩及び光線の增減强弱を酌量すべきものとす。是れ吾人が尤も自然なる觀察法にして、主觀的には、吾人の網膜の上にある中央小窩を中心として、全視界の物體の漸く其光彩を減ずるに相應す。

風景畫の尙ぶ所は、或新派の言ふが如く、光線及び色彩の催起する幻影、作畫の素品の逼眞及び變化等より生ずる直感的効力の上に存するか。はた又意匠、畫題及び線條の排列連合の上に存するか。そは吾等の玆に問ふ所に非ず。たかも吾等は視角の統一を以て、何れの風景畫にも必要なる條件なりと思惟する者なり。吾等は洋畫界の新作ある毎に好で之を觀る。然れども吾等は彼等の多數に於て、統一を發見すること能はず。吾等の觀察にして誤れば、幸ひ是に過ぎずと雖も、もし不幸にして吾等の思惟するが如くむば、吾等は我洋畫の爲に甚だ之を悲まざるを得ず。門内の君子、吾等の迷を解かるれば幸甚。

五　風景畫と小說

吾等は是の點に於て、風景畫と小說との類似を注意することを禁ずる能はず。風景畫に所謂主眼體と、小說に所謂主人公とは、殆ど同一の關係的位置を有するものに非ずや。

風景畫の主眼體を圍繞せる陪從物を描くに際して、常に是の主眼體との距離の比較を斟酌せざるべからざるが如く、小說家はその副人物を寫すに當りて、その主人公に對比して常に適當の潤色を與ふることを遺却すべからず。換言すれば、所謂注意の經濟の爲に、主人公の性格動作を說明し、明瞭ならしむるに必要なる限界に於て、各人物に各特殊の性格を付與せむことを要す。故に主人公の性格動作に依倚し來りたる視線を轉じて、之を副人物の上に注がば、何れも不完全不明瞭なるを免れざるべし。烱眼なる批評家は、漫にその不全不明を責むることをなさず、退て如何に不全にして、又如何に不明なるかを稽査せむことを要す。是れ作家及び評家の特に注意すべき所に非ずや。

（明治二十九年七月）

巴里萬國博覽會と我邦の美術家

萬國大博覽會は將に來る明治三十三年を以て佛國巴里に開かれむとす。思ふに歐州近代の美術は實に巴里を以て中心とす。さればその風尙嗜好は西歐羅巴に於ける最高の程度を代表するものと見るを得べし。知らず、此際列邦環視の中に立ちて、東洋の美術國は如何にその美術を出品せむとするか。

今回巴里の博覽會は二十六年に於けるシカゴのに比して、遙にその規模を擴張し、殊に美術部には嚴密なる規定を設け、その審査の方法の如きも極めて精緻ならむを期せり。故に從來諸國の博覽會に於て容易に美術部に編入せらるゝことを得たりし諸種の應用美術も、今回は（從來の博覽會には無かりし）美術工業の部下に入れられざるを得ざるべく、又是れとても十分の妙工に非ざれば、編列の認容を得難かるべし。吾等は其の純正と應用との孰れに關はらず、豫め我が邦美術家の細心なる用意を希望せざるを得ず。

歐州の美術は、本邦美術と大に其趣を異するは何人も知る所なり。然れども外人の嗜好に

投ぜむが爲に、自國固有の風格を失ふの愚を學ばざらむことは、吾等の切に希望するところなり。我邦の美術家は、本邦固有の美術の尤も高尙なる發達を表象したる至醇至粹なる製作を以て、彼の邦人士の最も進步せる觀美心に訴へざるべからず。夫の外人花鳥を好むの故を以て、專ら其の濃艶緻密の極彩色に成れるものを出品するが如きは、本末を誤り、主客を辨ぜず、自家の本領特色を離れて徒に他の顰笑に動かさるゝもの、是れ吾等が我邦の美術家に於て尤も憂懼する所なり。

西洋人が本邦美術の賞鑑力に乏しきは、其の人種國土の差別に原因すべしと雖ども、そもそも又我が美術史の智識を缺けるの致す所ならずむばあらず。故に今回巴里の大博覽會に臨み、有識の士の我が邦美術史の梗概を譯述し、かねて各時代に於ける摸範的製作を添附して、之を歐米諸國の人士に示すものあらば、彼等をして我が邦美術の特色及び精神を會得せしむる上に於て、其の功蓋し小少に非ざるべきか。若し一個人の力にして爲し得べからずむば、政府其の事業に當るも可ならむ。

之を要するに巴里博覽會は、大東日出國の美術を世界に表示するの最好機なり。我が邦美

術家は往年シカゴ博覽會に於けるが如き、散漫杜撰の覆轍をふまず。須く博大なる國民的精神を披發して、洽く知己を世界に求むるの覺悟あるべきなり。

（明治三十年六月）

現今美術家の精神的教育

古より美術家は天之を成すべくして人之を造るべからずと謂へり。是の語一面の眞理たる素より言を待たずと雖ども、世人を誤りたる亦是の如きものは多からじ。

是の語を解して字の如くなれ。美術家は學識を要せざることとなるなり。一般普通の教育の如きは、美術家にとりて極めて意味無きこととなり了るなり。彼等に要するところは單に技巧上の熟練ならむのみ。吾等疑ふ、今日の美術家の多くはたしかに是の如き謬見にあやまられつゝあるものに非ざるかを。

吾等は繪畫展覽會に、宗教的もしくは哲學的の製作を出品するもの、年毎に增さりゆける事實を見る。而かも雄渾卓厲の氣品を欽き、神韻縹渺の趣致に乏しきは、識者の潛に眉を顰むるところなり。幾多の佛陀圖を見よ、微笑を描き美音を寫すものを見よ、天女と觀音と達磨と羅漢とに見よ。徒に紅抹朱塗に俗目を欣ばしむるの外、靈界超絶の理想を闡き得たるもの幾何ありや。彼等の天女と觀音とは、媚態妖冶、娼婦と擇ぶなく、彼等の羅漢と達磨とは、

畸形支容、寧ろ醜汚の甚しきを見るのみ。若し夫れ大佛陀の尊容にいたりては、徒に憔悴厭世の狀態を寫すを旨とし、其の一切衆生を濟度するの大慈悲心、大理想念にいたりては、毫も描着するに至らず。氣息奄々として、さながら垂死の人を見るが如きところ、寧ろ人をして嫌惡の情を起さしむ。是れ果して何が爲ぞや。

在來の故型を踏襲するは其の一原因なるべしと雖ども、畢竟徒に筆墨によりて其の外面を摹寫するの外、内之に應對するの信念を缺けるの罪に坐す。彼の女子小兒の徒、内心毫も渴仰の熱誠なきものにして、筆を宗教的題目に染む、むしろ噴飯に堪ふべけむや。

說を爲すものあり。美術學校の教育制度は、其の一般智識の點に於ては小學生徒と相去ろ遠からず、其の教授の中には、普通の書牘すら辨じ難きものありと。果して眞乎、あゝ果して眞乎。然らば則ち百の圖外ありて審美學を講ずるも亦何の效かあらむや。偏に技巧を習練せしむるを主として、其の精神的教養を等閑に付するが如きことあらむか、我が邦美術界の前途又知るべきのみ。

吾等を以て之を見れば、今日大東帝國國民の精神及び抱負は未だ我が美術家によりて了解

せられざるなり。東山時代の幽寂高雅にして厭世の悲觀に富める、豐臣時代の雄大快壯にして尋常の規矩を顚脫せる、德川時代の典麗華美にして常型の中に十全を期する、皆之れ美術が時代の精神を發揮したるものなり。我が邦、智を宇内に求め、威を海外に張り、國民的意識の漸く明瞭ならむとするの今日、是の雄壯快闊なる民族の抱負を體現するの美術なきは大に恨みとすべきなり。

（明治三十年七月）

品性と製作

美は製作にあり、然れども美を生ずる所以は品性與つて力あり。されば吾れは世の其の人の品性を以て其の製作を褒貶するを非とすると同時に、品性の陶冶を以て美術教育の須要の一事業となすものなり。

（明治三十一年八月）

美術家の絶好題目

レホバルディは、鎖につながれて泣ける被髪の美女を以て其の母國を人化せり。マルコス・ボッァリスは、獨立せる希臘を現はすに裸體なる一青年を以てせり。美術家のファンダジーによりて、國性もしくは國民の理想を體現するは頗る興味ある事業ならむ。今の時に當りて吾人の同胞にもし秀拔なる美術家ありて、帝國國民の理想を體現するものあらば、吾人は頗る面白き結果を見得べしと想ふ。今や我が國民の活動は極めて多樣なり、極めて多面なり、隨うて極めて多趣味なり。吾人は大美術家の預言的手腕によりて吾人の形體ある理想を見むことを望む。

（明治三十年八月）

歴史を題目とせる美術

今日の美術界には佛像、佛畫の流行を見る、之れ大に可なり。而れども吾人は更に其の筆を歴史的題目に染むるあらば更に大に可なるを想ふ。

佛陀、羅漢、天女の題目は到るところに流行す。獨り我が邦神代の事蹟に關して一の製作を見ざるは如何。古事記神代の卷收むるところ、以て美術に資すべきもの一にして足らず、吾人は我が美術家の冷淡なるを見てむしろ怪訝に堪へず。

美術の發達は其の題目の發達を意味す。神州の民にして古天竺の佛像を事とするは、徒に他邦文物の勢力に屈從せるの嫌ひなきか。國民は其の國民的理想に相應せる美術を製作せむことを務めざるべからず。歐洲の美術は希臘より中世に入つて基督教的となり、近世は漸く國家的の一面を開拓し來れり。美術の理想は素より平等なるべし、其の體形は自ら差別なきを得ず。

敢て我が邦美術家の一考を促がす。

（明治三十年八月）

佛像陳列の可否如何

佛教は其の本來の面目に於て、決して偶像教の性質を帶ぶるものに非ず。其の之れあるに至りしは、後代布教の方便に出づ。無形を觀じ、無想を念じ、空想の中に虛靈を現ず、凡夫の爲し能はざる所也。是に於てか純聖高潔の理念に配するに、相好面妙の美體を以てし、以て寫象對觀に資するもの、洵に以なきに非ざるなり。宗教と美術との抱合是に於てか成る。おろかなるもの是の理を知らず、形象を以て聖靈となし、無窮の信念を有盡の物質に寄す、是れ人文の進歩につれて漸く排除せらるべき迷信なり。若し信仰を維持すとの理由を以て、佛像の神聖を唱ふるものあらば、是れ卽ち學問の敵なり、眞理の仇なり、之を排斥し打破するに於て何かあらむ。況むや佛像を以て美術となし、之を博物館裏に陳列するに於てをや。

若し世に佛像陳列を不可とするの正當の理由ありとせば、そは同胞國民の尊敬するところ吾れ亦猶ほ之を尊敬し、共に國民的思想の一致を維持するを須要とする國家的觀念に歸せざるべからず。

崇敬は民心に與ふるに安慰と共に統一を以てす、猥に民の依て以て其の心を安むずる所を打破するは、社會の德義に非ざるなり。妄に民の依て以て其の心を一にする所を攪亂するは、國家の利益に非ざるなり。然れども是の如きは果して佛教に就いて言ふべきものなる乎。

今や國民的一致運動の必要は、國民的道德主義の確立を促がし來れり。今や日本國民が其の小異を捨てて其の大同に就き、其の性情の本然に據りて唯一不動の大麾旄の下に集中すべき時機ならずや。是の時に當りて幾多信仰の小中心を見るは、國の利に非ず、民の福に非ざらむ。況むや是の如き信仰の小中心にして、厭世退嬰の佛教的臭味を帶ぶるもの多きに於てをや。

頃日寶物取調委員が、一部佛教徒の不滿を釀したるの事實は、新文化と舊信仰の衝突を表示せる一例に過ぎず。されども吾等は、むしろ國家主義によりて是の如き小信仰の排除を希望するものなり。

更に藝術の上より之を觀れば、佛像陳列の利益は問はずして可なり。

形象を以て聖靈の眞體となしたるより、僧侶の輩は佛像を公開する事を好まず、幔扉深く鎖して故らに尊嚴を裝へり。古代美術の參考の爲に一覽を乞ふものあるも、敢て之を許さず。寶物取調委員が政府の權力を藉りて僅に其の志を遂げたるが如きは、蓋し例外となす。而かも紀州高野山の如きは、往年政府派遣の委員をして、本尊を拜するに先ちて沐浴三日せしめ、決して形相の左右を漏洩せざるの誓詞の下に、辛うじて一見を許したりと云ふ。其の頑迷素より及ぶべからずと雖ども、本邦美術の研究は是の如き事業によりて妨害を受けたる其の幾何なるを知るべからず。殊に其の名山大刹の安置にかゝるものは、美術として尤も價値多きものなることは、爭ふべからざるの事實なり。然るに其の觀覽視察の困難果して是の如しとせば、美術の研究は茲に一層の障礙を增したるものと謂ふべし。佛像陳列は此の困難と障礙とを排除する一良方便ならずや。

且つ夫れ彼の寶物なるものは、珍藏百襲の之を保管するものと雖ども、一年一回の檢閲を施すに過ぎず。或は朽敗腐蝕の害に、或は鼠子蟲群の累はす所となる。夫の堂宇の頽廢によりて雨露風雪の難にかゝるものに至つては、固より深く惜むべしとなす。美術は一ありて二

なし、一度び失へば再び得べからず。博物館裏の陳列は慥に是の危害を保障するものに非ずや。

往年エルギン卿、古代希臘の美術を掠奪して、之を本國に輸送せり。詩人バイロン大に之を罵りて國賊となす。然れども英國博物館裏に南歐美術の精粹を不朽にしたるは、世界文化の記念の爲に實に埋沒すべからざるの偉功なりと謂はざるべからず。今日誰かエルギン卿の掠奪を德とせざるものあらむや。

（明治三十年八月）

日本の美術に對する外國人の觀察二三

一

伊太利に於ける萬國美術博覽會の開會式に際して、同國文部大臣の日本美術品に關する演說は、本邦美術家の一顧を價するものあり。曰く、

各國美術品を十分に理會せむには、各國の國民文學を熟知し、彫刻繪畫の表面に發動せる彼等が內部の感動に通曉せざるべからず。日本人がダンテの詩を讀むも、其の腦裏に十四世紀の伊太利歷史無くむば、決して其の妙味を解し得べからざる如く、今日の歐州人も亦豫め東洋人種の神髓を研究し、其の文化の精神を理會する後に非ざれば、決して日本繪畫の妙味を感ずること能はざるべし。

と。是の批評は、一國文化は民族的はた國民的性情の規定する所なりとするの點に於て、是の如き國民的性情の所現たる國民的文化の精髓を理會するに非ざれば其の美術の眞價を認識すること能はずとするの點に於て、將た又國民性情を以て美術文學の所依となし以て其の相對

的價値を認むる點に於て、滔々たる文藝批評家に一頭地を抽むでたるものと謂はざるべからず。然れども如何にして外邦人をして我が國民の特性を知らしむることを得べきか。人種、歷史に於て相異なれる異邦民族の意識は、如何なる程度まで融和會通するを得べきものなるか。是れ蓋し解釋し易からざるの疑問ならむ。

帝國政府は、來る三十三年に開かるべき巴里大博覽會に向つて帝國美術歷史を出品すべしと云ふ。是れ素より吾等の希望したる所なりと雖ども、是の如きは果して能く吾等の目的に對して多少の効力あるを得べきや否やは、固より明言し得べからずとなす。

二

何人も知る如く、日本の繪畫家の中に於て最も多く外人の賞贊を博したものは、葛飾北齋なり。伊太利文部大臣の言に曰く、

日本畫家中、北齋は殊に注意すべきものなり。其の作品を見るに、物の形色尤も明確にして眞に逼る。是れ彼れが世界最大家の畫人中に列せらるゝ所以なり。然れども彼は少年の時より滿腔の精神を擧けて實物を觀察し、偏に點染摹寫の自然に近似せむことをの

み力めたるを以て、ミケランジェロ、若しくはレオナルドの如き深遠なる感情を求めむとするも得べからず。

と。吾等を以て之を見れば、北齋を以て本邦繪畫の精粹なりとするものは、未だ我が美術を解せざる者なり。ミケランジェロを以て評價の規準となすが如き、たまたま其の好む所に偏するの難を免れじ。知らず本邦の藝苑の諸士は、彼の邦の人が浩々たる日本畫史の中に於て、殊に一北齋を揚げ來るの理由を知るか。吾等は性情の睽違、嗜好の離反、遂に文藝の絶對的融會を容さざるものあるを恐る。

三

われ曾て一外人と相携へて、繪畫展覽會を美術學校に觀き。彼れはスラヴ人、哲學の博士なり。美術文學に精通し、好尚亦凡に非ざるものあり。而かも本邦美術の精神に至りては、意に會心するを得ざりしものの如し。海邊群鶴の圖を見る。彼れ評して曰く、鳥大にして松小なり。天下豈斯の如き大なる鶴あらむやと。暴風中孔雀の松枝に住まるの圖を見る。彼れ評して曰く、孔雀は天晴風和の日に非ざれば見るべからず、是の如きは事實に於て有り得べ

からざるなり。賴朝朽木の洞中にかくるゝの圖を見る。彼れ曰く、彼の鬚髯の線條歴々數ふべく、衣袍の文理點々辨ずべし、遠隔の人豈是の事あるを得べけむや。彼れの評眼概ね此の類なり。幾多の古畫の韻致幽遠なるに遇ふも、猶ほ雲煙眼を過ぐるが如かりき。

最後に狩野芳崖の觀音圖を見き。圖は芳崖の絶筆にして、又其の畢生の精力を傾注したりと稱せらるゝもの。上部は天上の光明淨樂界を表はし、彩雲搖曳し、全色燦爛たり。觀音大士其の上に立ち、玉趾輕く天翳を蹈みて、慈眼遠く人界を瞰下し、一滴楊枝の露を以て玉壺に點じ、玉露まだゝるところ、玆に一嬰兒を現ず。嬰兒玲瓏玉の如く、二足少しく蹇縮して伸びむと欲して未だ伸びず。二手相合掌して仰いで大士の慈顏を望み、將に靜に下界に降り去らむとす。下界はすなはち人寰なり。風氣暗澹として物色死するが如く、一脈の亂山突兀として連亙するところ、寂寥、落莫、悲慘、汚濁の形相人に迫るものあり。博士一見嘆じて曰く、あゝ是れある哉、是の圖に於て東西人種の差別を超越したる眞正の美術を見たり。圖らざりき、今日ブラトーニッシェイデーを極東亞細亞に發見するあらむとはと。凝視多時、低回去るに忍びざるものの如かりき。

四

外人の觀察概ね是の類なり。そも〳〵その想を捉りて而して其の形を見ざる者、藝術評として相應はしからざるは、猶ほ其の形を見て其の想を察せざるの、理論評として不可なるが如けむ。本邦美術の精神なるものにありては、こゝに必然の想ありて、かしこに必然の形あり。表裏もとより相乖離すべきにあらず。たま〳〵外人の批評に動かされて、其の外形をのみ改易するが如きことあらば、之れ本邦美術の慶事に非ざらむ。

（明治三十年八月）

國民生活と美術

美術は人生の裝飾なり、娯樂なり、故に必ず其の實際生活の狀態と伴ふ。生活に伴はざる美術は畢竟吾れにとりて何爲るものぞ。

もろ〳〵の國民は其の性情と生活狀態とに於て必ずしも同じからず、美術も亦おのづから相異なる者無きを得ざるなり。されば彼に於て貴きもの我に於ては必ずしも然らず。宋人の章甫被髮の、越人に於て遂に一玩具を資せず、用ふる所素と相異なればなり。若し個人の嗜好を言はば吾れ是を妨げじ。苟も國民を以て事となさむものは、國性民情と其の生活狀態とに應じて取捨選擇せざるべからず。

油畫は果して今のまゝにて我が生活狀態に適當すべきものなりや。美術は建築に伴ひ、建築は生活に伴ふ。我が邦人衣食住の狀態現時の如くにして、楣間壁上果して油畫を容れ、尙ほ能く其の調和を保ち得べき乎。近世、美術獨立の弊は、繪畫、彫刻、建築の三者をして分離せしめたり。今の美術家は須く其の全體の關係に就いて省慮せざるべからず。

東京音樂學校は盛に洋琴を敎ふ。洋琴の價値は天下何人か是を疑はむや。然れども是を我邦に用ふるの一點に就いては、吾人甚だ是を疑ふ。試に想へ、我が邦人にして家に洋琴を具ふるもの果して幾何あるべき。是れ其の嗜好の乏しきに依るなるべしと雖ども、其の主要なる原因は生活狀態にあり。今洋琴を學びたるもの一度び學校を辭せば、彼れ何處にか其の技倆を試み、其の嗜好を分つを得べしとする。是の如き音樂は吾が邦人が今日の生活狀態を維持する限りは、遂に國民的たるの資格無きものなり。國立の學校に於て是を敎授するは、聊か恰當ならざるの嫌ひあらずや。音樂學校は、國民に其の生活を和樂ならしめむが爲の音樂を敎ふる所也。其の性質は主として國民的ならざるべからざる素より明けし。吾人は、今日の同校が國民の生活狀態を蔑視したるものに非ざるやを疑ふ。

是の如きは一例のみ。吾人の見る所にして大に謬らずむば、我が邦の美術家は其の流派の東西新古を問はず、國民生活との一致調和を顧慮せざるの一點に於ては、慥に美術の本領を誤解せるものなり。美術は畢竟人の爲に造るもの也、美術家にして是の根本的意義を遺却せむか、其の術愈〻高うして其の物遂に無益にならむ。

畫家の畫論

（明治三十年十二月）

下村觀山、人に語りて曰く、雪舟雪村は日本繪畫の極致、當代畫家の向仰私淑すべきものは是の二人のみと。

あゝ果して然る乎。吾人を以て是を見れば、舟村二雪は、謠曲と竝びて、本邦文藝の上に及ぼせる佛敎的勢力の最高點を標示せるもの、畢竟國民性情の罅漏に乘じたるものに外ならず。觀山却て是を以て本邦繪畫の理想となさむとす。歷史を知るものの言に非ざるなり。況むや形を沒して意を尙び、筆を省いて餘情を衒ふもの、偶〻畫家手腕の短小を示すに過ぎざるをや。

（明治三十一年四月）

何に用ひむとて斯かる畫幅は作られしぞ

先つころ上野公園に開かれし繪畫共進會の展覽會に、幅三間、長け一間餘りの大畫幅を出せしものありき。人あり、吾に問うて曰く、何に用ひむとて斯かる畫幅は作られしぞと。

畫家より見れば是れ極めて平凡なる問なるべし。されど吾が見る所によれば、是の一疑問の中には今の美術家が謹むで教を承くべき最も聰明なる訓誡ありてこもれり。

美術は、其の種類の繪畫なると、彫刻なると、はた音樂詩歌なるとを問はず、所詮は吾れ人の生活を幸ひたらしめむが爲に起れるなり。而して歳時と方處との異なれるに隨ひて、吾れ人が生活のありさま亦おのづから異なれるものなれば、其の時と處とに隨ひてその特殊の生活にそれ〴〵の滿足を與へむは、美術家たらむもののゆめ忘るべからざる所なり。凡そ美術の盛なると衰ふると、亦多く是の心懇の張弛による。是れ各國美術史の歴々として證する所なり。

今の我が邦にて、幅三間、長け一間餘りの畫幅に日本畫を描けるものを何に用ふべき。普

通の住居にては、富豪の大廈高樓を以てするも、恐らくは容るゝ所なかるべし。是を楣間に掲げむか、其の長さを如何にすべき。是を床間に垂れむか、其の幅を如何せむ。縱に割りて屏風となさむと欲せば人面二つに分る。是を西洋風の建物に用ふるを得ば、其の大さは差支なからむも、日本畫の樣式の全く西洋風の建築、裝飾と相適はざるを如何ともするなけむ。所詮かゝる大畫幅は、寺院の壁畫に張るか、又は美術學校の參考室にでも保存し置くの外、用ふる所無かるべし。

こは一例なり。美術にして吾人が生活のありさまと分離せば、其の存在の目的を那邊に求むべきや。繪畫の如きは、其の性質として屋外に暴露して保存すべきものに非ず、必ず吾人の住居の中に配置して翫賞せらるべきもの也。斯るが故に、畫家の筆を畫幀に落すに當りて、第一に考ふべきは、其が建築との調和如何と云ふことならざるべからず。而して建築なるものは、是れに伴ふ諸般の裝飾と共に、是に住居する人の生活の特質によりて定まれるものなれば、畫家も亦國民の生活の狀態に着眼せざるべからず。斯の如くにして初めて國民の生活を滿足すべき程の美術は作り出さるべき也。斯く言はば、美術の自由甚だ狹まり、其の

品位亦いたく下れる樣に思ふものあらむかなれど、苟も是の社會に存在して萬人の翫賞に堪へむ程のものは、是れ程の束縛は忍ばざるべからず、美術存在の意義亦實に〔茲に？〕存する也。

且つ夫れ吾人の最も注意すべきは、古より大なる美術家と呼ばるゝ人々は、決して社會生活のありさまに反對して、放埒氣儘の製作を爲しゝものに非ざりし事、是れなり。げに大いなる詩人、美術家は、多くは其の身を以て其の社會もしくは時世を代表せる者なり。一代一國の感情希望を以て己の感情希望となし、億兆同胞の心を以て其の心と爲しゝ者なり。されば其の製作一として國民の性情に適ひ、時代の精神を現はさざるは無し。彼は社會の束縛に屈從するものにあらず、彼れの心卽ち社會の心なればなり。彼は時世の制約に反抗するものにあらず、彼れの心卽ち時世の心なればなり。夫の社會の束縛、時世の制約なからましかばなど嘆つともがらは、畢竟其の才劣り、其の力足らざるもののみ。須く自ら省みて靜に修養の功を積むべきなり。

されば吾れ敢て今の我國の美術家に告げむ。公等、其の技を練り、其の腕を磨く、須く常

に其の到らざるなきを期せよ。唯念頭國民生活との一致てふことに就いて、不斷の用意を懈らざれ。吾れ又敢て今の我邦の美術家に告げむ。古より美術隆盛の時代は、常にそが國民生活と一致せる時代なり。西洋美術史上、黃金時代と呼ばるゝはペリクレース時代の希臘美術と、文藝復興期の伊太利美術となり。彼れにありては建築は宗教の所生にして、彫刻は建築及び宗教の儀式と密接の關係を有す、是れ其の盛なる所以なり。此れにありても亦然り。其の彫刻、繪畫は其の建築と相伴うて、基督教的社會生活と離るべからざる因緣を有す。是れ其の盛なる所以なり。我朝の天平聖武時代に、まかく美術の盛なりし理由も、當時佛教の盛なりし事、是れに伴うて佛教の建築盛に行はれ、隨つて佛像、佛畫の製作亦需要せられたる事等に歸着すべし。美術が社會生活と一致するに非ざれば、其の隆盛を起し難きの理亦おのづから明なるべし。十七世頃以後の歐洲美術は、文藝復興期の美術の統一的なるに反して、分離の美術を見るを得べし。建築、彫刻、繪畫、裝飾、各〻其の趣味を異にし、各〻其のおのづから獨立の存在を有せむとするもの の如し。是れやがて社會生活と美術との分離を示す。文藝復興期のフローレンスに見る如き豐麗圓滿なる美術的天地の、今日に見がたき所以

亦主として茲に存すべき也。吾れ嘗て國民性の解釋を我が小說家に勸めたることあり、今又美術家に向つて同一の要求を提供せむ乎。吾人の意見は世上の憤々者流によりて累はさるべきに非ざる也。

（明治三十一年八月）

美術參考館の必要

帝國大學に於ける美術參考館——是れ當に存在すべくして未だ存在せざる所のもの也。

本邦に於て美學研究の困難は、主として彼の邦美術の目睹の機會に乏しきに依る。而かも既に斯學の研究にして其の必要を見たりとせむか、須く出來得べき丈けの利便を提供して是の困難の幾分を排斥せむことを力めざるべからず。而して本邦學藝の淵叢たる帝國大學は、未だ是の目的の爲に何等の設備を爲せしを聞かざるなり。若し原品を羅致する能はずむば、せめては其の模本を蒐集せよ、而して參考館内に配置せよ。是の如くにして其の利を享くるものは、獨り美學のみならず、歷史、文學、哲學の諸科亦均霑の益を得む。

既に圖書館あり、必ずや是の種の參考館無かるべからず。一塊の遺物は時に萬卷の書を語る。

（明治三十一年三月）

一大美術館を建てよ

天下の美術漸く富貴の家に入る。吾人は國民の名によりて其の公開を要求す。

美術の物たる、私人の襲藏に任かすべきものにあらず、天下と共に其の樂みを同じうすべき也。吾人は東京市に望む、先づ一大美術館を建築し、公私の所有にかゝる秀逸なる作品を保管せよ。其の利、四あり。滿目蕭條たる帝國首府の美觀を增す、其の一なり。保存の目的を達する、其の二なり。天下の民に其の樂みを分つ、其の三也。學者藝術家の攻究を助く、其の四也。當局者以て如何となす。

（明治三十二年二月）

古物保存の可否

政府は過般古社寺保存法を發布し、古社寺の建物及び其の寶物の維持修理の爲に、年々二十萬圓を支出すべきことを規定せり、是れ極めて須要にして且つ適當なる所置なりと謂ふべし。

然れども如何なるものを古社寺と云ふか。單に其の古きの故を以て之を保存すと云はば、天下社寺の古きもの何ぞ限らむや。國家多事の今日、何物の閑事業か是れに加へむや。

國家事業として保存せらるべき古社寺は、歷史上、はた美術上、國民の回顧と前進とに幾多の稗益を與へ得べきものならざるべからず。歷史は國民の自覺を促がし、隨つて自主獨立の精神を振作す。其の國體の發揮に關するの遺物は殊に之を千古に傳へざるべからず。歷史は國民教育の基礎なり。歷史的遺物は國民の愛國心の依つて以て興奮する所なり。

說を爲すものあり。曰く幾十萬の古物を蓄ふるも、國家に一毫の利益なし。且つ宇宙の過程は悠久限りなし、人間の數千年は宇宙の一瞬時のみ。其の間に偶然生起したる人爲の物を以て古物と稱し、以て其の保存を計る、失笑に堪ふべけむやと。然らば是の如き輩は、何が故に人爲に出でたる國家の如きものに向つて、其の富强を云々するや。自家撞着も甚しと謂ふべし。

更に說を爲すものあり。曰く、祖先傳承の遺物なるの故を以て古物保存を云ふは非なり。

然れども外人漫遊の足を引くに多少の効力あらば、古社寺保存の爲に二十萬圓も惜むに足らず、二百萬圓も可なりと。あゝ目前の小利に眩惑して國家百年の長計を慮らざる輩の短視尺慮はむしろ憫殺するに堪へたり。

（明治三十年八月）

古寺院の寶物

凡ての國には寶物と云ふものあり。こは其の國の過去の文明の最も醇粹なる遺物なれば、永く後昆の記念として傳ふべきものなり。そが何人の手に成り、何人の手に保存せらるゝやは措いて問はず。かゝる寶物は、よしや私人の財産に歸するとも、國民全體の寶物として見るべきもの、されば適宜の處置によりて其の保存の目的を達するは國家の事業に屬す。

我邦にも寶物と稱すべきものは種々あれど、就中古寺院に保存せられある者の中には、文藝政教の歴史上、最も貴重すべき者多きは爭ふべからざる事實なり。こは本邦寺院の緣起久しく、且つは多くの時代に於て一國文教の淵源となれりしにも因ることなるべし。何は兎もあれ、本邦の最も貴重すべき寶物が是の古寺院の中に保存せられあることの事實なりとすれば、そを一人一寺の私財として見ず、國家の公寶として永遠に傳ふるは、まさしく國家が當に爲すべき事業の一なりと謂ふべし。

さればにや、我が政府先には寶物取調委員を全國に派遣して古社寺の寶物を取調べ、近く

は第十議會の協贊によりて古社寺保存法を實施し、是の目的の爲に多少の力を效したり。こは實に然かあるべき事なり。されどかの寶物取調委員なるものは、其の名の如く取調べたるに止まりて、其の保存の方法に及ばず、古社寺保存法も社寺の建物を美術として保存するを旨とするなれば、其の庫裏に藏せる所謂寶物の保存に關しては多く規定する所無し。されば是れ皆、吾等が玆に說ける寶物保存の目的を達するに遺憾無しと謂ふべからず。是れ吾等が是の說ある所以なり。

如何にして古寺院の寶物を保存すべきや。是れ他の珍案あるにあらず、適當の方法を以て政府之を博物館裏に蒐集する事、是れなり。是の方案は今日に於て之を唱ふる寧ろ陳言に類す、されど是の事を唱ふるの急は日に增し加はり來るを想はば、陳言必ずしも陳言にあらじ。吾等は政府の當局者が、吾等の陳ぶる所に就いて三思する所あらむを望む。

寶物保存に就いて最も恐るべきは火災に如くは無し。本邦の寺院は盡く木造にして、風雨にだも堪へず、其の建物已に不斷の修繕に待つも、保存の命數に於て限りあり。素と是れ炊烟の家居に非ざるが故に、火災に罹るの憂は普通の人家に較ぶればやゝ少しと雖ども、たま

たま祝融氏の次る所となれば、千年の古刹一朝にして灰燼となり、累代蓄積し來りたる寶物も忽焉として跡無し。而して傷むべきは、是の如き火災の、短きは數十年、長きは數百年にして必ず一過することなり。されば數百の古寺院にして其の元のまゝに殘れるは、全國中指を屈するに過ぎず。斯く火災の度毎に、其の中に藏せる寶物の大部分は燒失する事なれば、日本國の寶物は古寺院にて保存せらるゝ限りは、遂に減盡せざれば已まざるべし。如何に慨はしき事に非ずや。

例を遠きに求むるまでも無し。去月の末、寺院にはあらねど伊勢太廟の炎上を初めとして、大坂なる大念佛寺、播磨なる書寫山圓敎寺の消失より、近くは本願寺の將に烏有に歸せむとしたるなど、まのあたりに是の危險を見たる人、誰れか吾等と憂を同じうせざらむや。殊に書寫山及び大念佛寺の消失は古來有名の古刹の事とて、貴重なる寶物の共に失せたるものの最も多しと聞く。かゝらむは寺院、僧侶の不幸のみに止まらずして、日本國民全體の不幸なり、そを何とて國家の傍觀して已むべき事ならむや。古寺院の燒失や、素より番僧の不注意、放火などの災難にも因ることなるべけれども、本を糾せば古寺院其物の建築の性質上にあ

り。されば寶物保存の目的は、所詮今の寺院の建物よりそを分離し、別に火災其他の危難の憂無き處に安置するに非ざれば、到底達するの見込無かるべし。

さらば、如何にして寺院の建物より分離すべきか。吾等の意見によれば、政府須く相當の代價を以て是を買上ぐるか、又は是の寶物より生ずる收入額に等しき金額を年々寺院に下附し、是を政府に於て保管すべし。斯くし分離したる後、そを何處に安置すべきか。吾等は帝室博物館もしくは地方所在の博物館を以て、最も適當なる場所なりと信ず。

佛像を博物館に移せとは、既に世人の往々唱へたる所なり。されど何等の條件無くして佛像を寺院外に出さむことは、決して實行し得べからざる事なるべし。何となれば、佛像もしくは寶物は寺院收入の主もなる財源にして、僧侶僧尼が依つて以て衣食住を仰ぐ所なればなり。今の多くの僧侶がまことの信仰心に乏しく、宗教を見ることさながら一の商賣の如く、俗化墮落の極に達し居ることは爭ふべからざる事實なり。彼等の多くは、佛教教理の宣傳によりて、衆生濟度を目的とする如き宗教心の一片だに有せず、唯己の先祖代々皆僧侶の職に居り、己れまた是の職を紹ぐにあらざれば他に活計の道なきを以て、寧ろ已むを得ず其の顯

を圓にし其の衣を縮にするのみ。されば彼等が其の佛像寶物を手放すことを肯むぜざるは、商賣人が其の株を手放なさざると同じ理由により、特に佛像寶物其物に何等愛好心の執着するあるに非ず。故に若し彼等に與ふるに佛像寶物より生ずる收入以上の金額を以てせば、彼等は喜むで是れに應ずべし。斯くて其の寺是れが爲に廢ることあらば、彼等は寧ろ其の窮屈なる生活を捨てて俗界に入り、公然肉食妻帶の人となるを德とすべし。是れ寶物保存の爲に利あるは勿論、彼等僧侶も亦利便とする所なるべし。加ふるに同時に迷信排斥の效力もある事なれば、國家道德の側より見るも最も望ましき事なり。所詮孰れの點より見るも、佛像寶物を寺院より分離することは、政府が斷然是を實行しても然るべき事ならずや。

扨て斯くして寺院より分離したる寶物を博物館に陳列し、若しくは（光線中の暴露に堪へざるものは）襲藏する事は、保存の目的を達する外に幾多の利益あることは言ふまでもなし。歷史家は是を見て珍奇の史料を得べく、美術家は是を觀て古人の典型を學ぶべく、文學家、宗教家、考古家、亦それ〴〵他に得難き利益を享くべく、數十百里を旅行し、幾多の日子を消費するを要せず、一堂の下に觀覽し得べければ、學術の進步、智識の普及には缺くべから

ざる事なり。もし又迷信者あり、偶像遺物を巡拜せむが爲に毎年莫大の時間と金額とを消費するを憚らざるもの玆に來らば、一日の中に天下の名山古刹を巡禮すると同一の功德を受け得べし、豈便ならずや。西洋諸國にては、希臘、羅馬の古美術は猥に私人の所有に歸せしめず、是を國有となして博物館裏に陳列して、以て公衆の觀覽に供ふるは、最も寶物取扱の法を得たるものなり。吾等は一日も早く我が政府が是の方法を取らむことを希望して已まざるなり。

（明治三十一年六月）

古社寺及び古美術の保存に就いて

一　序　論

古代建築及び美術の保存、今日に於て是の必要を言ふ、最早や自明の事を語るに似たり。

實に人文の沿革を討ねて美術の源流に溯れば、以て一國文運の隆替を卜すべく、以て國民の品性と好尚の推移とを想ふべし。而して美術は啻り歴史の形相、人文の徴跡たるのみならず、或る意味に於ては、國民生活の最も光榮ある結果として、其の歴史の意義と價値とを永遠に傳ふる所以なり。古より今に到るまで、民は幾たびか興亡し、國は幾たびか存廢し、生死の巷年と共に忙はしく、流轉の人生何くにか窮まらむ、而して百代千世依然として渝らざるもの、文藝と美術と其の主もなるものの一也。然らば則ち古代美術の保存は歴史の最も貴重なる産物を存續し、以て人類生存の意義を無窮に標章する所以にあらずや。

且つ夫れ人類は啻に現在に於て生活するのみならず、亦過去に於ても生活するもの也。吾人に歴史無からしめよ、是れ吾人の生命を半減する也。實に吾が現世に於ける幸福の一半は、祖先の事業の回顧に存す。若し吾人に千年の過去なくむば、安むぞ獨り千年の未來あらむや、吾人が將來に有する一切の希望と、計畫と、義務と、若し是の過去に於ける事業の繼紹を外にせば、凡て無意義にして已まむのみ。吾人の精靈は常に是の三世を上下して、玆に一部人生の全意義を求めむと欲する也。夫の現在若しくは將來を見て而して過去を想はざるも

のは、故らに人類の永生を遮斷して、其の生存の意義を短縮するものにあらずや。吾人は是の點より見て、古代美術の保存に於て最も深遠なる價値を認むる也。

然るに世に一種の論者あり。古社寺の保存を難じて曰く、朽腐頽廢は日本建築の早晩遭遇すべき必然の運命なり、今日國費を以て是が修繕を加ふるも、僅に頽廢の命數に於て十年百年を延ばすに過ぎず、畢竟姑息の策のみ、須く過去に於ける老廢物の保存に力むるの餘力を以て、將來の新事物を經營すべしと。時事新報記者の如きは、是の種の論者なり。是れ人類の全生活は、歴史に於て實現せらるべきものなるを想はず、單に現在の一面に據りて人生を規せむとするもの、吾人の見て以て甚だ褊狹なる人生觀とする所のもの也。永遠ならざるもの悉く存續の價値無しとせば、一切人生の事業は寧ろ初めより廢棄するに如かず、何ぞ獨り一の古社寺のみに限らむや。畢竟宇宙の進程より見れば、人類生存の命數は蟋蛄旦夕の生涯ならむのみ。夫れ唯蟋蛄旦夕の生涯なり、過去文物の精華たる美術の保存は益〻其の必要を加ふるを見る也。

又他方より見れば、本邦が其の美術を保存するは、世界の文明に對して最も榮譽ある貢獻

を爲す所以也。日本は世界に向つて誇るべき多くのものを有するならむ、而かも其の美術は常に其の隨一たるを失はざるべし。無識なる外人の寧ろ無禮なる濫賞を一切度外に付し去るも、日本の美術がアリアン諸民族の美術以外に於て、永く世界の文藝史上に其の標範を垂れ得べきことは、吾人の固く信じて疑はざる所也。然らば則ち國民的美術として世界最古の傳統を有し、而して西歐以外別に醇粹なる東洋的趣味により體現せられたる日本美術は、實に日本が世界の文明に寄與し得べき最も貴重なる財寶にあらずや。推古以來實に一千三百有餘年、或は奈良の高渾となり、或は平安の華麗となり、或は鎌倉の爽活となり、或は東山の幽雅、桃山の豪放となり、日東文明の沿革に伴うて、兼ねて國民の氣格、歴史の徴證を示すもの、啻に一國の寶のみに非ざる也。國家が是の光榮ある美術の保存に力むべきは、素より當然の本務のみ。

近時古社寺保存の必要、朝野の認むる所となり、我が政府が議院の協贊によりて、着々其の事に從ひつゝあるは吾人の甚だ喜ぶ所也。唯、一般國民の尚ほ是の事業に冷淡なるや、是を當事者に一任して殆ど顧みる所なし。敢て問はむ、古社寺保存は果して如何の方法により

て爲されつゝある乎。凡そ美術の修繕と破壞と相去る僅に一歩のみ。是の際萬一當事者の措置にして其の當を失はむ乎、保存の美舉は却て千年の悔を貽さむ。國民は果して其の輿論の勢力に據りて、是を監視するの要なき乎。是れ吾人が是の論ある所以也。

二　古社寺保存の方法に就いて我が當局者は定見を有する乎

我が政府の古社寺保存に於ける亦力めたりと謂ふべし。一昨三十年より年々十五萬圓を支出して是が經費に充て、本年の如きは殊に前年度補助費の剩餘金九萬五千圓を以て京畿及び滋賀に於ける十八個寺の修繕に配當せり。然れども保存方法の當否に到つては、吾人の首肯する能はざるもの一にして足らざる也。

吾人が先づ當局者に問はざるべからざるは、所謂古社寺保存の方針如何にあり。抑〻古社寺を保存すとは、單に今日現存の狀態を保存するの意乎、或は又建立當初の儀型を保存するの義乎。推古、天平以來年を經る一千有餘年、木造建築たる本邦の社寺は、必ずや累代の修

補を經由せざるを得ず。是を以て、法隆、藥師、法起、法輪、以下の諸寺院は何れも多少後年の添繕を被らざるはなし。所謂古社寺保存とは、是等後年の添繕を併せて單に現存の狀態を持續するの意乎。若しくは是等後年の修補を除去して、推古、天平當時の故態を回復するにある乎。吾人は是の問題に對して、當局者が一定の主義もしくは方針を有せざるの事實を見る。吾人を以て見れば、是れ實に本邦古社寺保存の將來に關して最も重大なる問題なり。苟も是の問題にして明瞭なる解釋を見るに非ずむば、或は恐る、是の事業が有終の美を濟さずして、却て國家千年の悔を殘さむことを。

試に所謂古社寺なるものが、如何に後年の修補の爲に其の原型を失へるかを見むか。何人も知る如く、大和法隆寺は推古の元年より十五年に渉りて建築せられたる本邦最古の寺院なり。一千三百有餘年の星霜を經て、尙ほ幸に災異を免れたるもの、中門あり、金堂あり、五重塔あり。然れども是等最古の建築が慶長年間の大營繕に遭遇するまでに、既に幾回の修補を經たりしや、夙に識者の問題となり居る所也。暫く今日現存の狀態に就いて是を言ふも、金堂及び五重塔の周圍を繞れる廻郭及び廂は素より建初のものにあらず。上下兩瓦葺間

の支柱も、亦後人の添加に成れること言ふまでも無し。而して是等の支柱及び廻郭が、殆ど是の壯大なる伽藍の美觀を埋沒し去らむとするは、吾人の切に歎惜する所也。又、中門左右の步廊及び講堂に存せる普通の圓柱も、亦晩年の改造に成れることは何人も知る所也。藥師寺の三重塔も、二層及び三層間に於ける二個の裳廂の添附によりて、全く本來の面目を失墜し了せることも亦吾人の甚だ惜む所。畢竟是の如き事例は、新藥師寺、唐招提寺、法起、法輪、以下の諸古寺に於て、多少是を見ざるは無し。所謂古社寺保存なるものは、是等後人の手に成れる一切の補修をも併せて保存するの意乎。

頃日吾人奈良に遊び、法隆寺の堂塔伽藍を觀て、其の雄渾高尙眞に百世の標範たるべきを想ひ、而して後世の無見識なる修繕が如何に推古當代の樣式を埋了せるかを惜みて、所謂古社寺保存の當事者が、何故に是の懸疣を掃除して本來の面目を發揮せざりしかを憾みたり。去つて唐招提寺及び藥師寺に到れば、前者の金堂及び後者の三重塔は、今や方に解體を了りて改築の途上にあり。當事者の說明に據れば、改築の方針は單に木材の腐蝕せるものを新にするの外、他意無きものの如し。是に於てか藥師寺の三重塔は、再構の後に到りても尙ほ建

初の高風を見る能はざる也。次いで新藥師寺に到れば、吾人は玆に別種の保存主義に遭遇せり。卽ち該寺にありて、古社寺保存の目的によりて再造せられたるものは、啻に朽木腐材の修補に止まらず、力めて天平の古式に則りて、足利、鎌倉兩時代に於ける修繕の跡を除却し去りたるが如し。是に於てか足利彫刻の特質たる蟇股の如きも、今や其の跡を止めず、殆ど從來の新藥師寺と面目を異にするものを現出せり。是の改築に於て、天平の古式果して能く回復せられたる乎、後人の添補と建初の儀型と、果して能く甄別せられたるを得し乎。是れ別問題として暫く問はず、唯吾人は是の事實によりて一個の疑惑を起したり。抑〻古社寺保存に對する當局者の方針は「抑〻」何處に存する乎。法隆寺、唐招提寺、乃至藥師寺等に於て吾人の觀たる所は、新藥師寺に於て觀たる所と全く其の方針を異にせり。彼にありては建築當初の儀型如何を問はず、累代幾回の修繕に何等批評的改竄を加ふること無く、單に現存の狀態を忠實に存續せむと力めたり。而して此れにありては一切後人の補修を破壞し、改作し、變造し、力めて天平當代の古式を回復せむことを旨とせり。彼れにありては單純なる保存なり、此れにありては批評的回復なり。當局者の方針果して那邊に存する乎。若し古式回

復の必要を認めむ乎、何故に是を法隆寺、藥師寺、唐招提寺に施さずして、獨り是を新藥師寺に行ひたる。吾人を以て見れば、建築の儀型として標範を史上に垂れ得べきもの、法隆寺を以て最となす、當局者は何故に新藥師寺に於て特に是の如き大膽なる回復を施しゝ乎。是れ吾人が古社寺保存の大方針に就いて、我が當局者が定見の有無を疑ふ所以也。

三　古社寺保存の方法

然らば則ち古社寺保存の方法を如何すべき乎、乞ふ、吾人をして聊か卑見を述べしめよ。

吾人の見る所によれば、古社寺保存の方法と稱すべきもの凡そ三あり。一に曰く、古社寺の現狀を保存する也。二に曰く、建初當時の古式に準じて是を修繕する也。三に曰く、建初當時の古式に準じて是を新造する也。甲は先に述べたる法隆寺、藥師寺等の事例に於て見るが如く、建初以來幾回の補修添加を經たるをも併せて傳來のまゝ是を保存する也。乙は新藥師寺の事例に於て見る如く、後世の補綴に係るものは凡て是を除去し、力めて古式に則りて營繕を加ふる也。丙は其の方針乙に等しきも、全く傳來の堂塔を離れ、新材を以て一新寺院

を興す也。是の三種の方法の孰れか最も善く古社寺保存の目的を充實すべき乎。吾人は斷じて第三法を取るもの也。

夫れ古社寺保存の目的は、古代建築の中より美術の模範となり、併せて歷史の徵證となり得べき優秀なるものを選擇して、是を後世に存續するにあり。今第一法に隨ひ、偏に現狀の保存を以て能事了れりとせむ乎、後世の補修は、多くの場合に於て建初の儀型を壞亂し、其の雄渾高潔なる風尙を掩蔽するを如何せむ。本邦寺院の建築は、推古、天平に於て始ど空前絕後の妙境を現じたり。降つて平安となり、鎌倉となれば、時尙漸く衰へ、往日の高調又見るべからざる也。故に是の時代の補修に係るもの、奈良、王朝の高渾なる風致に對しては、概ね蛇足のみ。降つて東山、德川に至りては、時勢已に梭を溢へ、風尙已に天淵の差あり。法隆寺に於ける慶長の大修繕を見よ、金堂の兩廂間に彫龍の支柱を立てしが如きは、殆ど木に接ぐに竹を以てするの觀あり。金堂及び五重塔下の廻郭の如きは、果して何等の沒趣味ぞや。凡そ後世の添加に係るもの概ね此の類のみ。古式の妙工を發揮し、美術の標範を後世に貽さむことを目的とする所謂古社寺保存なるものは、果して是の如き沒趣味にして有害無益

なる蛇足をも、併せて忠實に保存すべしとする乎。單に傳來の現狀是の如きが故に、一も二もなく是を保存すべしと云ふが如きは、全く古社寺保存の目的を無視せる沒分曉の說なりと謂はざるべからず。

吾人は是の點に於て、第二法卽ち後人の附加に係るものを除却して、建初の古式を發揮せむとする方法の遙に優れるを認む。難ずるもの或は謂はむ、是の如くせば古式は現はれむ、然れども緣つて以て後世の儀型を窺知すべき所の彫刻、裝飾を破却し去るは惜むべしと。素より天下の名刹を修理するの局に當るもの、後世にありても亦一世の巨匠ならむ、其の製作を破却し去るは惜むべしと雖ども、是れあるが爲に建初當時の古式掩蔽せらるとすれば、其の利害の大小日を同じうして論ずべからざる也。且つ夫れ是の如き一代美術の模本となり得べきものは、別に是を保存する素より可なり。況むや各時代の樣式儀型の保存せらるゝや、別に其の處あり。德川時代の建築は是を增上寺、日光廟に見るべく、藤原時代の裝飾は是を鳳凰堂、中尊寺に窺ふべし、何ぞ特に推古、天平の古刹を累はして、是れが保存に力むるを須ゐむや。

然れども、其の第一法たると、第二法たるとに論無く、吾人は從來の所謂古社寺保存の方法に反對すべき二個の理由を有す。從來の方法は畢竟修繕なり、補綴なり、唯古來傳襲の古堂塔の構造、裝飾に就いて其の缺處を補充するにあり。熟〻其の補修の跡を點檢するに、新材を拈箝して强ひて古色を帶ばしめ、以て强ひて腐朽の狀を裝ひ、今古の別を塗抹せむと擬するの狀、吾人を以て見れば寧ろ醜汚の感に堪へざる也。例へば藥師寺の金堂、法隆寺の夢殿、もしくは新藥師寺に到り見よ、塗抹の跡紛として眼を遮る。恐らくは今後修繕に着手せむとする唐招提寺以下の諸伽藍にありても、亦同一の現象を見るべき也。千年の星霜により て染着せられたる所謂古色なるものは、一朝夕にして摸倣せられ得べきものにあらず、況むや風雨百世の結果たる腐蝕朽敗の狀の如きは、得て擬似すべからざる也。設令ひ幸に一時の外觀を矯飾し得たりとするも、幾もならずして破綻を呈露せむ。是の如きは、例へば法隆寺の夢殿、東大寺の法華堂(三月堂)等に於て明に見る所也。吾人は今の古社寺保存の方法が、何れも是の塗抹的、僞善的なるを見て、爲に貴重なる古式の妙趣を涓滴せらるゝの憾み無き能はず。若し數十年もしくは數百年後に至りて、是の如き保存方法の結果如何を想像せば、

吾人は寧ろ本邦古社寺の爲に悵然たらずむばあらざる也。

吾人は又、是の如き塗抹的方法の姑息なるを排斥せざるべからず。唐招提寺及び藥師寺の修繕當事者の言として聞知する所によれば、設令ひ一切の組織を解剖し、腐木朽材を除去して代ふるに新材を以てし、以て是を改築するも、更に修繕を要するの期百年を出でざるべしと。奈良大佛殿の技師の如きは、吾人に語つて、目下の修繕は三十年を保護するに過ぎずと謂へり。然らば則ち年々十五萬圓を支出して所謂保存に力むるの古社寺は、何れも五十年乃至百年を出でずして再度の大修繕を要する也。誰れか其の方法の姑息なるに驚かざらむや。讀者よ、試に想像せよ。五十年百年毎に修繕又修繕、改築又改築を重ねたる結果は、五百年千年の後に到りて、如何の狀態を呈すべき乎。推古、天平の大梵伽藍は、如何なる狀態によりて其の當初の風格氣韻を維持すべき乎。吾人は饅飥補添の末、所謂百結の錦繡は一帳の素布に如かざるものあらむを恐るゝ也。是れ豈古社寺保存の眞精神ならむや。

吾人は以上述べたる如き一切の缺點を控除し、古社寺保存の眞精神を貫徹するの方法として、吾人の所謂第三法を推奬する者也。第三法とは、先にも謂へる如く、建初の古式に準據

し、而かも傳來の伽藍を離れて別に新建築を興す者、是れ也。

是の如く言はば、人或は難ぜむ。既に古社寺保存と謂ふ、古傳の社寺を保存する素より其の所のみ、更に新建築を興す、是れ豈所謂古社寺保存ならむやと。實に多數の人は是の如く言ふならむ。然れども吾人を以て見れば、是れ古社寺保存てふ文字に拘泥して、是の事業の眞精神を遺却したるの說なるのみ。古代建築の精華を存續して、後世美術の標範を貽す。古社寺保存の大目的是れに外ならずとせば、吾人は何が故に特に『古』の一字に執着するの要ありや。夫れ建築は主として形式的の美術なり、既に夫れ形式的なり、即ち是れ主として外形の美也、輪廓の美也、縱橫、上下、曲直、長短等、要するに數量及び重力の關係の美也。其の木材の質理、着色の濃淡等は、第二義以下の制約のみ。されば單に建築美の見地より是を觀む乎、苟も其の摹倣にして眞に其の實に違はざらむには、例へば法隆寺の金堂と雖ども、其の摹造と實物との間に、些の輕輕無かるべき也。斯く謂はば多くの人は難ぜむ、新建築は其の形式に於て古社寺を摹倣し得べきも、其の幽妙なる古色を奈何と。嗚呼古色乎、古色乎、通常世人の所謂古社寺保存の主腦とする所、實は是の古色の保存に存する也。古色何物なれ

ば、果して確かく美術鑑賞家の尊重する所となる乎。

一言にして是を斷ぜむ乎、吾人は所謂古色を以て美術の優劣を品隲するの傾向を以て、敢て美的好尚の墮落となすもの也。一幅の山水、一基の佛像、良しや表情に於て缺くる所あり、形式に於て全からざるも、彩色衰褪し、刀痕磨滅し、黝然として辨知し難きものあれば、則ち以て古色蒼然たりとなし、古雅愛すべしとなし、翫賞措かざるもの我が邦人の間に常に見る所也。是の如きは美術を以て骨董品と同一視するもの、其の趣味や極めて庸劣なりと謂はざるべからず。吾人は想ふ、所謂古色を愛するは、美學上に所謂時間の崇美に本づく。玆に一基の佛像あり、蒼然として千年の古色を現はさば、是れ是の佛像が悠々たる千年の風霜に抵抗して、其の存在を持續したるの力あるを示す也。爾來歴史は常に推移し、邦家は幾たびか變遷す、而して是の物獨り流轉の外に超然として終始渝ること無し、所謂古色は是の時間の破壞力に對抗して奮鬪したる痼痍也。吾人が所謂古色に向ひて一種幽妙の快感を惹起するは、知らず識らず是の時間的崇美の感情に打たるればなり。是の故に吾人は、古色を愛するの情其物は、寧ろ人性の自然に出づるものなることを認むと雖ども、而かも是を以て古代

建築の主もなる價値とするに至つては、全く審美の埒外に逸したる藝術上の邪見なることを主張す。

法隆寺の金堂が本邦寺院の鉅觀たるは、決して其の建物の古きが爲に非ざる也。其の外觀の古色あるが爲に非ざる也、實に其が樣式の高雅雄渾、以て百代の標範たるべきを以て也。若し審美上特に稱すべき長所なからむ乎、假令ひ幾千年の古物たりとも、何ぞ國費を以て美術の標範として保存すべき謂はれあらむ。吾人は我が當局者が、推古、天平の古刹を保護するの旨趣、亦是れに外なざるを信ずる也。古社寺保存の精神既に所謂古色にあらずして、其の形式の上にあらば、是の形式に準據して別に新建築を興す、最も善く是の事業の目的を到達する所以に非ざる乎。先に所謂第一法に據らむ乎、寺院建築の史上に千古の標範を垂るゝ推古、天平二式の美觀は、遂に其の全きを觀るべからず。第二法によらむ乎、累代其の修繕を累ぬるの煩あり、而して其の結果は最も拙劣なるモザイックたるに了るの憾あり。兩者の弊竇を擺脱して、古社寺保存の眞精神を貫ぬくに庶幾きものは、夫れ唯新築の一法に在る乎。而して是の新築にありては、其の裝飾、着色、容量等、務めて建初當代の儀型を考

覈して、新に是を回復すべきこと言ふまでも無し、是の如くにして初めて古式の眞相を會得することを得べけむ也。若し夫れ木材、石基、漆塑の類、凡そ當時の徵證となるべきものは、別に保存の途を設くるを可とすべし。

是の方法の實行をして最も困難ならしむるものは、何人も想像する如く經費也。然れども是の如きは、國民が其の美術を尊び、其の歷史を重むずるの精神如何によりて決せらるべし。今日現に修繕の爲に費す所甚だ小少ならず、例へば大和唐招提寺の金堂修繕の爲に、國庫は貳萬五千餘圓の補助金を支出せり。一技師の言によれば、是の金額を三倍すれば新築或は望み得べしと、果して然らば、吾人の主張必ずしも行ひ難きに非ざる也。吾人は國家永遠の爲に、區々姑息の修繕策を一變して、是の新築案を斷行せむことを希望する者也。

四　無分別なる古社寺保存、奈良大佛殿

先にも述べたる如く、古社寺を保存するは、其の年代の古きが爲にあらずして、其の形式の美なるが爲也。藝術上はた歷史上、何等重大の意義無きも、唯其の古社寺もしくは大伽藍

たるの故を以て、漫然國帑を割いて是を保存するもの、吾人是を名けて無分別なる古社寺保存と云ふ。

無分別なる古社寺保存の一例は、奈良東大寺也。吾人は我が政府が保護の特典を與へたる全國數十百の所謂古社寺に就いて、特に其の當否を究めたること無しと雖ども、東大寺大佛殿の一例は、慥に人をして當局者が選擇の眼識を疑はしむるに足るものあり。乞ふ、試に是を說かむ。

今の東大寺の大佛殿は、元祿十四年、德川將軍綱吉の建造せる所、其の年代に於て古しと謂ふべからず、而して其の構造樣式の特に取るべきもの無く、唯其の規模の徒に厖大なるのみ。修繕技師に就いて是を問へば、上層の重量徒に過大にして、支柱梁桷の是れに勝ふる能はざるが爲に、前後兩面は左右に相傾斜して全堂東西に捩り、兩廂の端共に波狀を呈して、上廂の左端水平を下ること凡四尺、僅に屋上に支柱を建てて是を撑ぐ。外面より是を觀るも岌々乎として危し。更に大佛頭上の架上に上れば、徑數尺の梁柱、截然として折るゝを見る。其の構造も亦形式と共に、寺院建築中の寧ろ拙劣なるもの也。政府は何故に莫大の金を以て

是の惡大堂を保護し、奈良縣亦何が故に其の修繕を力むる乎。殿堂其物の保存の爲ならば、是れ沒鑑識の極み也。蓋し堂中に安置せる大佛庇護の爲ならむ乎、果して然らば吾人別に說あり。

吾人は往年、九鬼氏が論じたるが如く、大佛を露佛となすべきを主張する者也。大佛の身長、坐ながらにして五丈三尺五寸、面の長さ一丈六尺、眉、目、口、鼻、以下是れに稱ふ。是の如き偉大なる佛像を一堂の中に置き、人をして蓮座下より是を仰がしむ。慈悲忍辱の尊容如何に靈秀微妙なりとするも、吾人は唯其の鼻孔を望み、其の巨脣に驚くに過ぎず。名匠鉅工の技倆も亦現はるゝに由無き也。若し是を廣闊の地に移し、百歩を隔てて瞻望するを得せしめば、面妙相好、歷々看取すべし。されば大佛は其の大佛たるの性質上、當に露佛たるべきもの也。

且つ夫れ大佛の保護の爲に殿堂を設くと謂ふも、古來大佛の害を爲せるもの、是の殿堂の如きは有らず。治承年間、平重衡が南都暴動の際、熱銅七十三萬斤、鍊金一萬兩、水銀六萬兩に成れる金銅盧舍那佛をして、楚人の一炬に壞敗せしめしものは實に其の殿堂なりき。後

白河天皇是を再鑄せしも、永祿年間、松永久秀の兵燹によりて佛頭佛身再び鎔壞せり、亦是の殿堂の罪也。若し天平以來、露佛たらしめば、金銅盧舍那佛は其のあらゆる古式を以て、鑄金の妙を今日に誇るべく、決して藥師寺の釋迦三尊をして其の盛名を擅にせしめざりしならむ。殿堂は畢竟大佛を保護するものにあらずして、却て破壞するもの也。宜しく一日も早く是を撤却し、大佛の爲に其の禍根を絕つべきもの也。況むや其の堂の拙惡にして而かも半ば壞敗せるをや。

是の如く、何れの點より見るも有害無益なる大佛殿は、今や政府及び奈良縣の篤實なる保護によりて修繕せられつゝある也。吾人は敢て是を評して、無分別なる古社寺保存と謂ふ、不可なる乎。是の如き事例が大佛殿以外に存せざらむことは、吾人の萬々希望する所也。

五　古代美術と博物館

最後に古代美術の保存に就いて一言せむ。玆に謂ふ所の古代美術とは主として推古、天平

より平安後期に到るまでの佛像、佛畫を謂ふなり。是等の佛像、佛畫は現今多くは古寺院の中に保存せらる。吾人は我が政府が古社寺保存の事業と共に、是等古美術を帝室博物館に收容するの擧に出でむことを切望するもの也。

凡そ古代の美術を博物館内に保存すれば、二個の大利益あり。其の保存の安全なるは、其の一也。國民をして洽ねく國民的藝術の精粹に接することを得せしむるは、其の二也。

是れ多言を要せざる也。是等古美術を古社寺の保管に一任するの不可なるは、累年名寺古刹の火災に罹るもの多き事、盜賊に罹る事、蟲鼠雨露の爲に損害せらるゝ事、等の事實によりて明なり。今や政府は偏に古社寺の保存に力めて、而して古美術の保存を顧みず、僅に國寶と稱せらるゝものあるも、他の什物と同じく一に社寺に寄託するが如きは、寧ろ奇怪なる所爲と謂はざるべからず。當局者は何故に是を帝國博物館に收容することを爲さざるや。

吾人は、佛像を拉し去りて民衆の信仰を妨害するは不可也との反對說を知らざるに非ず。然れども是の如き非難は、吾人を以て見れば一の杞憂のみ。今日若し本願寺の親鸞像、淺草寺の觀音像を捉へて是を博物館内に公開せば、恐らくは民衆の迷信を妨ぐること甚だ大なら

む。而かも推古、天平、弘仁、貞元の古佛像、例へば法隆寺の夢殿、金堂、五重塔、東大寺の三月堂、戒壇院等に在るものを他に移すも、自家信仰の破壞せられたるを感ずるもの極めて少からむ。何となれば年々、善光寺、本願寺參りする佛教信者は其の數巨萬なるも、特に奈良の古寺院に禮拜するものは、殆ど其の萬一にも及ばざればなり。佛像を拜する程のものは、金碧燦爛たる伽藍に於て其の有難味を感ずべし、何ぞ粉黛剝落、古色蒼然たる古佛像に對して隨喜せむや。

且つ夫れ僧侶自らと雖ども、今日是の如き佛像に對して特別の敬意を有する者にあらざる也。見よ、彼等は縱覽料をだに拂へば、土足の儘にて、其の須彌壇をも、其の蓮座をも、蹂躙することを許すに非ずや。古は祕佛と稱して容易に人に示さざるものも、今や人をして一拜だにするなく、是を摩し、是を叩くことをすら許すに非ずや。南都諸寺院を觀たる人は、何れも是の如き事實に遭遇すべし。畢竟彼等は一種の觀せ物として、是等の佛像を遇するのみ。もし多額の見料をだに拂はば、何事も人の爲すに任せむ也。然らば則ち政府の力を以て、して、是を博物館に收容し得ざるの理あらむや。是を爲す、唯僧侶に金錢を與ふるにあり。

聞說らく、往年帝室奈良博物館の建設せらるゝに當つて、法隆寺は其の多數の佛像を同館に寄託せむことを約せり。然れども館成りて其の約を履まず、僅に其の三四を納れて其の責を塞ぎたりと謂ふ。畢竟僧侶の輩、國民的公共心を有せず、保存の安全、公開の利益等の理を以て是を服すること能はざる也。顧ふに當時奈良博物館にして、是等佛像の觀覽料により て得らるべき程の金錢を與へなば、法隆寺は喜むで、其の本尊をも、祕佛をも寄託せしならむ。吾人は是の方法によりて古代美術の一切を博物館内に收容し、公開せむことを希望して已まざる也。是れ實に、日本美術の標範を恒久に垂れ、以て本邦の光華を中外に發揚する所以也。古社寺保存は其の年々の經費に於ては、議員歳費の十分の一に過ぎずと雖ども、實に一大國家的事業也。日本が世界の文明に寄與する最大貢獻の一は、是の事業によりて成さるべし、されば其の措置亦一段の鄭重を要すべし。是れ吾人が聊か卑見を吐露し、一は以て當局者の一顧を煩はし、一は以て輿論を喚起せむと欲する所以也。

（明治三十二年五月）

美術に對する購買力

凡て事物の進歩は社會の需要に伴ふを原則とす。されば美術も亦そを購買するの社會を待つに非ざれば、永遠の發達を期し難きこと言ふまでも無し。

吾人の觀察にして大に誤らずむば、本邦社會の美術に對する購買力は極めて薄弱なるものなり。試に毎年二季の繪畫展覽會を觀よ、十圓以上の價を附すれば賣口甚だ悪し。況して百圓以上の作品の賣買に至りては、作者と買者との間に特別の事情あるに非ざれば、殆ど希有の例に屬する也。今年の例に徴するに、宮内省の特別保護の下に成立する美術協會の列品だに、賣約濟のもの尚ほ一千圓に上らず、其他の繪畫共進會、白馬會等は略ゞ知るべきのみ。繪畫を以て職業とせむもの、斯かる購買力乏しき社會に對して爭でか其の技藝に忠なるを得べき。是を佛蘭西、伊太利等にありて、一萬『フラン』以上の價ある作品の盛に賣買せらるゝに比すれば、果して如何ぞや。

或は謂はむ、古書畫の中には數百金乃至數千金のもの尚は賣行好きに非ずや、何ぞ美術の

購買力無しと謂はむやと。されどこは誤れり。今の搢紳富豪等が爭つて古名家の作品を蒐集するは、多くは骨董品として愛翫するのみ、美術的嗜好と何の關する所あらむや。是の如きは彼等にとりて一種の贅澤品のみ、公債、株券、地所、家屋として其の財産を有する代りに、骨董品として有するに過ぎざるのみ。如何ぞ眞に美術を賞鑑しての業ならむや。美術的嗜好の缺乏は卽ち美術に對する購買力の缺乏也。

職人が其の勞働によりて生活し、學者が著述と講義とによりて生活する如く、美術家は其の作品を賣りて生活せざるべからず。世人動もすれば曰く、富裕の身に非ざれば學者又は美術家たるなかれと、是れ一面の說のみ。凡そ學術にまれ、美術にまれ、社會に需要なきものは決して其の發達を期すべからず。若し發達し得べきものならば、そは必ず社會の需要する所のものならざるべからず。社會已に是を需要せば、是れに對して相當の報酬を要むるは素より事理の當然なり。然らば則ち學者にまれ、美術家にまれ、苟も其の道の爲に盡さむものは、初めより其の思想又は製作によりて衣食すべきものに非ずや。吾人は斷じて言はむ、美術家にして若し其の製作によりて生活する能はざらむには、初めより美術家たる勿れと。

遮莫れ、吾人は吾が美術家が、美術購買力に乏しき今の社會に處する道の極めて困難なるべきを想ふ。是れ獨り美術家諸子の爲に憂ふるのみならず、是の如くにして日本美術の前途亦甚だ望少からむを憂ふる也。然らば則ち是を如何にせば可ならむ乎。

若し本邦國民にして全然美術的嗜好を缺如せば則ち已みなむ。是の如き社會が美術家の存在を許さざること、猶ほ沙漠が植物の存在を容れざるが如き也。然れども美術國として鳴る我が邦にして如何ぞ是の事あるべけむや。今日の社會が美術購買力に乏しきは、必ずや今日あるが如き美術に對して嗜好を有せざるが爲なりと見ざるべからず。本邦美術家の一考を要すべき點は卽ち玆に存す。

吾人は必ずしも今の美術家に勸めて、强ちに社會の嗜好を逢迎せよとは謂はじ。唯美術家と雖ども他の一切の人類と等しく歲時と方處の繫縛を受けて是の世に生活する以上は、或る程度までは是の社會の生活、思想及び嗜好と抱合せむことを要す。苟も社會人文の根蔕に接着するに非ざれば、一切の事物は爭でか是の社會と共に生命ある發達を遂ぐるを得べき。されど社會にも理想ある如く、美術にも亦理想あり。故に眞に美術に忠實ならむものは、一面

社會的嗜好と抱合して其の存在を擔保すると同時に、他面に於ては自家の高上なる理想に本づき、飜つて社會の嗜好を敎育して漸次高尙の域に進ましめざるべからず。是の兩面の用意ありてこそ、美術の眞正の發達は初めて期待し得らるゝなれ。

されば吾人は敢て今の美術家に告げむ。今日の美術家の最も急務とすべき所は、國民的生活を理會するにあり。而して其の生活の根蔕に接觸して、美術を以て其の活力の一部となすにあり。是の如くにして美術は國民的生活の一要素として、永く其の存在及び發達を擔保せらるべし。あらゆる改善の方法は、是の第一歩を成就したる後に於て初めて實行せらるべきなり。

終りに臨むで再び前言を提起せむ。美術に對する購買力の缺乏は、社會の側に於ては、美術的嗜好の缺乏を示し、美術の側に於ては、そが社會的生活の根蔕を有せざるを示す、何れの側より見るも是れ美術の危機也。吾人は吳々も本邦美術家が是の點に關して熟慮せられむことを望む。

（明治三十一年十月）

美術と富豪

一　富豪の天分

社會が富豪の存在を德とするは、彼等が公共の利福の爲に盡し得べき大なる力を有すればも也。若し富豪にして公共心無からむ乎、彼等は卽ち天下の富を私する者に過ぎざるのみ。彼等は是の如くにして國民の怨府となり、社會の公敵となる也。

本邦の富豪が概して公共心に乏しきは、夙に識者の浩歎せる所也。彼等の多くは、第宅の宏壯に誇り、衣食の暖飽を樂み、徒に人生の虛榮を趁うて自ら甘むずるのみ。偶〻富豪に生まれたる身の天分として、自己の存在に如何の意義あるかを想はず、自己の最も大なる名譽と功德とは、社會の利福を增進することに依りて得らるべきを自覺せざる也。是の如くにして、彼等自ら自己の貴重なる天分を拋擲し、自ら好むで嘲罵憎怨の標的となるの愚を致す、

彼等の爲に謀るも、策の最も拙きものと謂はざるべからず。

二　美術の隱匿

今の幼稚なる社會にありて、吾人は多くを富豪に望むこと無かるべし。例へば大學を興し、圖書館を興し、其他諸種の實業學校を興すが如きは、富豪の事業として最も希望すべき事なりと雖ども、是れを今日に責めむは卽ち或は未だし。吾人は玆に今の富豪にとりて最も容易に、而かも最も適當なる一事業を提供し、以て其の注意を促がさむと欲す。何ぞや、私立美術館の設立、是れ也。

美術は是れを人に示して減損するものに非ず。美術館の公開に要するものは、建物と些細なる保管の費用とのみ、是れ富豪の事業としては極めて易々たるものに非ずや。吾人は美術品を藏せざる富豪に對して、是の如き美術館を設立せよと勸むるものに非ず、唯夥多の美術品を蓄藏せる富豪が、其の所藏品を公開せむことを望むのみ。吾人の見聞する所によれば、今日苟くも富豪と稱せらるゝものは、何れも餘財を拋つて美術品を蒐集せざるは無し。例へば岩崎家の如き、年々是の目的の爲めに數萬金を豫算すと謂ふに非ずや。年々是の如くにして購入せらるゝ所の珍品傑作、想ふに尠からざるべし。而して彼等は是れを倉庫の中に藏し、容易に人に示さず、僅に自家の宴會賀筵に展列して、蓄積の豐富を知人の間に夸揚するに過ぎざる也、無意義も甚しからずや。私有は富豪にとりて一の快樂なるべし、然れども自己の名によりて其の蓄積を公開するは、決して私有の快樂を損殺するに非ず。珍品傑作を衆と共に樂むは或はモノポリーを失ふの感あらむ、然れども是れ全く美術翫賞の性質を了解せざる者也。

三　美術の公共的性質

美術品の實用品に異なる一要點は、公共的なるにあり。換言すれば、所有者と所有者ならざるとを問はず、萬人の齊しく觀て其の樂受を共にするにあり。一幅の畫圖、一基の彫刻は、幾百萬人の均しく眺むべき所のもの也。大なる文學は其の國語を解する凡ての人に開放せらるべきもの也、音樂は苟くも耳ある者の共有する所にして、普ねく世界の人に樂まるべ

きもの也。夕陽と星を眺めざるものは盲者と囚人とのみ。實に私有の競爭心を擺脫し、凡ての人類に開放せらるべきは、美なる一切の物の特質也。是の如くにして美術は人類相互の同情を喚起し、是の現實世界に一種の理想の王國を建設し得る也、美術の美術たる所以茲に存す。若し今の富豪にして、公債又は株券を有すると同一の覺悟を以て美術品を有すれば則ち知らず、苟くも是れを翫賞するの精神に出でたりとすれば、是れを隱匿し、其の樂みを獨占するは、彼等自らにとりても極めて不本意なる事ならざるべからす。然らば則ち何ぞ是れを公開して、衆と共に其の樂みを同じうせざるや。吾人は我邦の富豪が、是の點に就いて三思せむことを切望す。

四　社會教育と美術

更に社會教育の側より見るも、衆庶をして美術上の好尚を有せしむるは頗ぶる有用の事に屬す。美術の世界は平和の王國也、卑劣なる競爭心は萬人平等の同情に融和せられ、茲に一種の高尚なる情緒の發動を感ずる也。美術の好尚には利害の衝突無し、利害の衝突無きものは輒ち結合す。是を以て社會國家に關する大いなる一致運動は、美的感情の發動に木づくもの多し。

且つ夫れ人文の進むに隨ひ、分業の途愈〻隔つ。是を以て個人の平生執る所の業務は何れも偏頗のものとなり、精神上、肉體上、一面に局するの弊を致す。是に於てか社會は無趣味となり、人生の圓滿なる狀態長へに見るべからざるに到る。是の偏局の弊を醫するは、卽ち美術の功也。鍬を取るものは農夫たり、劍を提ぐるものは兵士たり、而かも美術に對して齊しく人たる也。彼れに於ては一分の人たり、此れに於ては全分の人たり。是の如く偏頗の生活を補ふに美術の好尚を以てするは、社會を扶育し、人生を完全する上に於て、須要なる一條件と謂ふべし。是の點より見るも、富豪が貴重なる國民的美術を私有して、公共の翫賞を杜絶するは、甚だ有害なる事なりと謂はざるべからず。

五　是れ國寶を土中に埋沒する也

貧富の懸隔日を追うて加はるの今日、贅澤品たる美術が富豪の倉庫に入るは、猶ほ水の低

きに就くが如し、若し富豪にして是れを公開すること無くむば、國民は即ち年々其の美術を失ふ也。吾人は美術の私有を難ずべき毫末の理由を有せず、然れども彼等が是れを公開せざるの一事は、少くとも社會の公益を阻礙するの擧動として是れを難ぜざるを得ず。公共的なるべき美術を富豪の倉庫に封鎖するは、即ち國家の財寶を土中に埋沒するに等しからずや。

吾人は美術研究家が、爲に如何の障礙を被るべきか、將た被りつゝあるかを謂はざるべし。唯斯の國民の美的好尚の日に墮落すること、及び是の墮落の結果として一國人文の上に如何の影響を見るべきかは、吾人の熟慮せざるべからざる所也。吾人は切に名譽ある我が富豪が自家の富豪たる天分に顧み、吾人の言に聽かむことを望む。

（明治三十二年八月）

美術の保護者

藝術の士にとりて最も哀しむべきは、其の製作が金錢によりて支配せらるゝの事實なるべし。藝術と金錢と、あゝ是れ何等の對比ぞや。されど理想の世は遠くして、餓ゑたる人の弱きを如何にせむ。吾等の藝術は永くこの悲しむべき事實の中に存在するを免れざるべし。

文士保護すべしとは曾て人の說けるところなりき。されど文學の事は社會多數の人の關はり知るところ、且つや印刷事業の開けたる世とて、複製の事甚だ容易なれば、人は些細の金錢もて大家名流の著作をも購讀し得べき也。若し著者にして世尙を籠蓋するの技倆だにあらば、文を賣りて其の勞に報いむこと强ちに難からじ、保護必ずしも須要ならざる也。唯夫れ美術は少しく是れと趣きを異にす。

畫家が一枚の畫幅を作るの勞は、多く文人が一篇の書册を著はすの勞に讓るものに非ず。數年の長きに亙りて成されたる名畫の例は、東西の史上に珍らしからざる也。されど繪畫は文學の如く容易に複製し得べきものに非ず、一幅の名畫は長へに一幅たり、所詮再びしがたき自然の妙工たり。是を以て是の一幅は、畫家が數月若しくは數年の勞に報ゆるの價格を有し來らざるを得ず、其の百、千、萬金を値する、洵に已むを得ざる也。さりながら斯かる高

價を抛ちて尙ほ藝術の鑑賞を擅にせむとするは、何れの世に於ても極めて希有の例に屬す。藝術の鑑賞その物は凡ての人の欣び求むる所なるも、彼等は先づ自ら餓ゑざらむことを要する也。良しや彼等の前に天才の美術家あり、吾れ喜むで爾等の希望を滿たさむと言ふとも、彼等にして餓ゑざらむと要せむか、餓うるものは美術家彼れ自らならざるべからず。是の如くにして秀でたる藝術は長へに世に現はれ得ざる也、憐れなる民衆は長へに藝術の靈光に浴する能はざる也。嗚呼金錢を蓄へ、聲色に飽き、智識を得ば、吾等の人生は以て足れりとすべきなる乎。そも〳〵藝術の樂受は空しき影の如くにして、是れを求むるものは迷へる乎。希はくは藝術の價値を解する人、ゑばらく吾等の言に聽かむ乎。

人は謂ふ、古への美術は貴族の有なり、今の美術は平民の手に移れりと。吾等は決してこの事實を無視するものに非ず、されど平民の手に移れるは實に美術の一小部分のみ。其の大部分が社會の上層に遺れること、古へも今も依然として異なるところ無き也。是れ美術本來の性質のおのづから然らしむるところ、想ふに複製の方便にして文學に於けるが如く完全なり得ざる限りは永遠に然らざるを得ざるべき也。是を以て美術の發達は概ね貴族富豪の保護

に待つところあり。是れ多くの場合に於て、歷史上の事實也とす。

例へば伊太利の美術を言ふものは、先づフレンツェ派を說く。而してチマブウ、ジオットーを建てて當代の才能を招致せしが如きは、殆むど南歐美術史の運命を決するの力ありしと謂ふべし。ミケランジェロの如きすら、大君と稱せられたるローレンツォの保護の下に初めて其の驥足を伸ばし得たりし也。ラファエル以下の大家と雖ども多くは時の權家、法王の寬大なる給養によりて其の業に從ひし事も亦史を讀めるものの熟知する所也。近代にありてはミュンヘンは獨逸に於ける美術の都府と稱せらる。其の彫刻館（グリプトテーク）と繪畫館（ピナコテーク）の蒐集するところの作品、巴里、羅馬に次いで歐洲に冠絕するものあれば也。而して美術的都府としてのミュンヘンの基礎を造りたるものは國王ルード井ヒ一世に外ならざりき。彫刻館の如きは、王が尙ほ太子たりし閒にありて計畫せるところに係る。名高き建築家レオ・フォン・クレンツは此の二館の造營の爲めに國賓として待遇せられ、當代第一の畫家ペテル・コルネリウスはチムメルマン以下の門下を率ゐてこの二館の裝飾に當りたりき。繪畫館の第一の基礎は王自らの手によ

りて築かれ、式はバイエルンの國祭と齊しき盛大なる儀禮を以て祝はれたりき。かくて王家累代の蓄積は擧げて是の中に展列せられ、更に國帑を開きて盛むに古今の名品を蒐集せり。例へば今日の彫刻館收むる所のニオベ群の一體たるイリオノイスの如きも、當時の買收に係り、其の時價實に一萬五千兩なりきと謂ふ。ミュンヘン藝苑は實に此の如き王家の保護ありて始めて榮え得たりし也。

斯かる事例は和漢の史上に於ても甚だ多く見る所也。例へば吳道玄、韓幹、曹霸以下の盛唐の名手は多く明皇朝下の食賓なりき。徽宗皇帝が翡翠閣を開きて古今の珍寶を列ね、天下の才藝を招致せしことが、宋代の美術に如何の影響を與へたりしやは言ふまでも無きことならむ。我邦に於て畫官を置き、繪所を設けしは、必ずしも廣く人才を發揮するの道に非ざりしならむも、尙ほ藝術の價値を解せざる時代にありて一縷の命脈を維持し、以て將來の氣運を待ちたるの功は素より沒すべくもあらず。若し夫れかの東山將軍が當代の美術家を招致して、君臺觀の珍奇を品彙し鑑賞したるの類は更にも言はず、歷代の大家が權貴の保護を待ちて其の驥足を伸ばし得たるの事例太だ尠からざるは、必ずしも吾等の絮說を要せざらむ。

顧みて今の我邦を見れば、識見ある保護者の缺乏は我が美術界の爲めに甚だ悲しむべき事ならずや。帝室に於て技藝員を置かせられたるは、美術家にとりて是の上もなき名譽たるべしと雖ども、吾等の所謂る美術保護の目的を達するの道を離るゝ頗ぶる遠きが如し。多くの美術上の團體が、其の總裁或は會長として戴けるやむごとなき貴顯の方々は、其の名目上の義務として一年一回の總會に祝詞を朗讀せらるゝの外、果して本邦美術の盛衰に就いて懸念せらるゝ所ありや。宮內省の當局者が、年々の美術展覽會に於てせらるゝ所謂る御買上品は、其の金額甚だ大なるものに非ず。而して其れすら主として一派の團體に限られ、今の美術界の全體に亙りて一視同仁の措置に出でざるを恨みとすべけむ。凡て大いなる保護なきところには大いなる作品あり難し。今の美術界の製作が爾かく淺薄、小規模、殆むど兒戲に類するもの多きは、美術家其の人の覺悟の足らざるにも因るべしと雖ども、畢竟其の勞に報ゆるの保護無ければ也。

あゝ藝術はこの世に於ける理想の世界也。無窮を趁ふの心あるもの、現實の生に慊らざるもの、哲學の外に眞理を求むるもの、宗敎の外に安心を希ふもの、麵包の外に糧を要するも

の、彼等は玆に暫らく其の向上の渇仰を醫するを得る也。今の世に於て藝術を說くは痴人の事と稱せらる。藝術は法律の如く國を治むる能はず、軍隊の如く敵と鬪ふ能はず、而かも尙ほ能く人を幸ひならしむ。人は謂ふ、藝術は遊戯のみと。誠に然り、されど是の憂患に充てる人生に於て、尙ほ遊戯の地を存するは、セメてもの慰藉に非ざるべき乎。

嗚呼世事萬端亂れて麻の如し、人は茫々として爲す所を知らざらむとす。吾等須らく人生の大本に就いて沈思する所あるべき也。

（明治三十四年七月）

新建築と美術

今日、日本の建築が一般文物と共に變遷時代に遭遇しつゝあるは、爭ふべからざる事實なり。日本の新美術は、建築が是の變遷時代を經過して一定の樣式を結成したる後に於て、初めて其の全盛期を見るを得べき乎。

美術の精神は一代の人文によりて規定せらるべし、然れども建築には少くとも其の形式を規定するの力あることを遺るべからず。是れ啻に理に於て然るのみならず、又藝術史上の事實也。

蓋し美術は繪畫にまれ、彫塑にまれ、凡て家屋中に於て賞翫せらるべきものなり。而して家屋は素と人生の必需に應じて存在せるものなること言ふ迄も無し。凡て餘剩（サープラス）は必要（ネセシチー）を害せざる限りに於て存在し得べきを原則とするを以て、美術存在の第一義は建築との調和にあり。是を以て美術は建築を支配する能はずと雖ども、建築は常に美術の形式を規定す。大いなる美術にして建築と離れて存在せるもの、古より未だ曾て之れあらざる也。

フヰレンツェの宮殿と羅馬の寺院と無かりせば、文藝復興期の美術は慥に其の光彩の大半を沒了せむ。諸バラッツォの建築と、レオナルド若しくはミケランジェロの繪畫とは離るべからざりし也。試に歴史よりワチカノに於けるシスチナ寺院を除き去れ、ミケランジェロの『最後の審判』以下の諸名畫は或は世界に現はれずして已みしやも知るべからず。將た又希臘の彫刻が其の建築を離れて存在すべしとは、何人も想像し能はざる所なるべし。本邦推古、天平の美術が盛名を史上に馳せしは、誰か佛教寺院の影響に非ずと謂ひ得べき。所詮建築が繪畫、彫塑の基礎たるは理の必然にして、事の實際は過去既に然り、將來亦當に然るべし。

顧みて本邦今日の建築を見るに、文物の變遷、嗜好の動搖に伴ひて、其の樣式尚ほ未だ一定するに到らず、是の時に當りて獨り繪畫、彫塑の清新なる發達を望む、蓋し得べからざる也。洋畫の濃粧なるもの、未だ一般家屋の瀟洒なるに適せず。畫幅の狹少を恨みとするもの、時に方一丈の大幀を作れば裝置するに處なし。塑形に巧なるものあるも、家屋の是れを容るゝものなく、彫塑は尚ほ依然として置物、根付に限らる。西洋式の裝飾術は僅に少數なる富豪、公共の建物に應用せらるゝに過ぎず。勢ひ是の如くにして西洋文物の刺戟に發生し

來れる新美術も、需要缺乏の爲に幾度が逡巡して遂に進む能はず、藝術家の世榮を望むもの、僅に俗尚を迎合して舊樣の胡蘆に甘むずるの外無し。而して其の弊根は新建築の興らざるに存する也。

然れども吾人の見る所を以てすれば、新建築は疑も無く漸く勃興すべし。其の樣式の如きは預め知り難しと雖ども、中等以上の市民の家屋としては、和洋折衷式の醇化せられたるもの起るべし。寺院は最早や建築界に勢力を有すること無かるべし、何となれば社會は大寺院を創起するの宗教的信仰を失ひたれば也。先づ來らむものは夫れ公共官府の建物と富豪貴紳の第宅乎。今日帝城の下、大建築として見るべきものは日本銀行、三菱銀行、工科大學の數者に過ぎず。日本の新建築は先づ是の方面より勃興せむ。若し夫れ中等以上の市民の家屋が如何の樣式を取るべき乎は、啻に今後我が建築家の關心すべき最大問題なるのみならず、日本の新美術の形式も亦是の問題の解釋によりて規定せらるべき也。

（明治三十二年三月）

死せる摹擬畫

見よ、サルトーノー、モントヱルドの聖母と基督とは、最早や十六世紀の典雅高妙なる流風を傳ふる能はず、宛然賣女と俗兒の面影ありと謂ふにあらずや。信仰の時代は既に還らざるべく過ぎ去りたれば也。

宗教畫も一個の流派となれば是れ死せる摹擬畫のみ。夫の青年畫家の漫に理想を口にするもの、宗教畫を以て高尚なりとなす、眞に人を笑殺するに足る。

（明治三十二年四月）

博物館論

夫れ博物館は美術、工藝の精華を一堂の下に蒐め、以て一國文明の進程及び結果を具體的に標章する所以也。然れども其の影響する所は、啻に過去に於ける文物の回顧に留まらず、啻に所謂國寶の保護に留まらず、又啻に國民をして其の氣風を高尚にし其の愛國心を興さしむるに留まらず、更に是れに緣りて一國の工藝を鼓舞し、美術を振作し、又進むで殖産致富の道を開進するに於て尠からざる關係を有すべき也。吾人は我が政府の當事者が、博物館に就いて是の積極的一面を等閑視するの跡あるを見て是れを恨みとするや久し矣。是れ吾人が茲に、本邦博物館の將來に就いて一言せむと欲する所以也。

吾人は先づ英國に於けるサウスケンシントン博物館の成立に就いて、我が邦人の一顧を煩はさざるべからず。今世紀の第五十一年に於て、萬國博覽會は初めて倫敦に開設せられたりき。當時英國人の出品は其の構造堅牢なりしも、其の形式と趣味とに到つては遙に他邦の出品に劣りたりき。英人は大に是れを遺憾とし、爾來上下力を協せて美術を奬勵し、意匠圖案

を研究し、玆にサウスケンシントン博物館を設立して工藝美術の典範を國中に示したり。是の博物館建設の後は、從來工藝的貨物の輸入を一に佛國に仰ぎたる英國は、一躍して却て巨額の貨物を佛國に輸出する氣勢を示したりき。英國工藝の發達は、其の因緣必ずしも一規にして律す可らざるも、而かもサウスケンシントン博物館の勢力少からざりし一事は、蓋し何人も爭ふ能はざる所ならむ。

白耳義に於ける商業博物館は、同國富殷の源泉なりと稱せらる。是れ亦吾人が切に我が當事者の留心を要めむと欲する一例也。是の博物館は主として各種の製品、半製品、及び原料の見本を陳列して商工業者の參考に供するもの、白耳義の外務省は特に是れが管理の勞を取り、又特に是の一博物館の爲に數十名の領事、總領事を海外に派遣し、訂交諸國の都府要港に駐在せしむ。是れ常に外國市場の景況、貨物趣好の變遷を探知して、本國外務省に通報せむが爲めなり。外務省其の報を得るや、直に之を是の商業博物館に通じ、以て全國の商工業者をして坐ながら世界の市場の狀勢を曉らしむ。白耳義の商業者が、常に勝を世界の商業界に制するは、主として是れが爲めなりと思惟せらる。是の黑子大の一小邦、歐州諸强國の間

に介立し、國運ますゝ〳〵盛を極むるは、是の一商業博物館與つて力ありと謂はざるべからず。博物館の効用も玆に到つて大なりと謂ふべき也。

翻つて是れを我邦に觀るに、吾人は博物館の事業に就いて言ふべき事一にして足らざるを見る。試みに其の主要なるものを擧げむか、博物館の增設は其の一なり、博物館の分類は其の二也、一大美術博物館の建設は其の三也。而して是の三者を通じて是れを統率する所の精神は、啻に其の消極的方面に留まらず、國家將來の利福に關して飽く迄積極的ならざるべからず。

今日全國中にて博物館と稱し得べきものは、東京上野公園に在る一帝室博物館あるのみ。京都に、奈良に、名古屋に、金澤に、其他二三の地方に博物館と稱するものありと雖ども、其の規模の小にして列品の乏しき、多く言ふに足るもの無し。而して是の全國唯一の帝國博物館すら、徒に雜にして統一を缺けるは、世人の常に恨みとする所也。是れを歐州諸國に觀るに、其の著大にして世界に誇るに足るべきもののみを擧ぐるも、倫敦にサウスケンシントン博物館あり、ブリチッシ博物館あり、巴里にルーヴル、リュクサンブール等の美術博

物館あり。伯林には美術工藝博物館あり、工業博物館あり、ドレスデンにも有名なる美術博物館及び歴史博物館あり。ブルッセルには、先に述べたる商業博物館あり。伊太利には羅馬のワチカノ等を初めとして、フォレンツェ、エネチア等、到る處に大美術博物館あり。是の如き著大なるものの外、更に各國到る處の都會には各種の博物館あらざるは無し。是れ啻に一國文明の精華を列ねて社會の外觀を裝ふのみならず、亦民衆の智德を開發し、其の工藝を催進し、國家文運の上に間接に、直接に、尠からざる影響を與へたるや、蓋し疑ふべからざる也。吾人は是の一事を想ふも、一箇の帝室博物館は、我邦にとりて餘りに少數なるを悲まざるべからず。惟ふに我が政府も人民も、共に博物館を重視せざる所以のものは、畢竟過去文物の回顧に資するを以て博物館の能事了れりとする、吾人の所謂消極的意義をのみ認めたるの弊に非ざる乎。然らば則ち是の際、併せて大に其の積極的方面を振作し、本邦將來の美術工藝を教訓し、指導するの大抱負を以て一大刷新を施す、可ならむ乎。吾人は先づ是の目的の爲に大に國立博物館を增設し、少くとも全國各師團若しくは各高等學校所在地に各〻一箇を建立せむことを望まざるべからず。而して增設と共に各地方の事情に隨つて其の種類

を區別すること、亦極めて肝要なりとすべし。

我邦の帝室博物館の如きは、素と一定の主義によりて建てられたるものにあらず、故に列品の種目徒に繁雜に流れ、所謂備はざる無くして缺けざる無きもの也。是れ東京見物の田舍者には至極調法なる組織なるべしと雖ども、專門家、事業家の參考に資し、其の研究事業を裨補する所あらむが爲には餘りに統一を缺き、精緻を缺き、斬新を缺く。若し文明の幼稚なる本邦に於て、今日尙ほ是の種の博物館を要すとせば、吾人は更に分科博物館の新設を主張せざるべからず。卽ち各地方の情況に應じ、商業地には商業博物館を設け、工業地には工業博物館、美術工藝地には美術工藝博物館、農業地には農業博物館を設置すべきなり。例へば京都、奈良の如き地方には其の博物館を擴張して美術的ならしめ、大阪の如き地には商業博物館、金澤の如き地には美術工藝博物館を設くべく、又東北もしくは北海道の如き農業地方には宜しく農業博物館を設くべき也。而して是等博物館は啻に古物展覽會に止まらず、世界文明の最も進歩せる氣運と調攝し、能く將來に處して機先を制するの教訓と指導とを與ふるものたらむことを期せざるべからず。一言すれば、從來の靜止的展覽會の組織を刷新し

て、活動的博物館となすにあり。今日に於て俄に是れを行ふ、或は望むべからずとするも、我が博物館の當事者が是の精神を體認して、着々將來の設備を完成せむことは、吾人の切に希求する所也。

博物館の增設と共に、吾人は又一大美術博物館の創立を希望する者也。日本の美術は從來無學なる外國人の好奇心によりて喧しく傳稱せられたり。良し是の如き阿諛的讃美の一切を度外に付し去るも、吾人は尙ほ本邦の美術を以て、日本が世界に向つて誇負するに足るものの一なることを確信す。實に日本の美術は其の國體と等しく、世界に於て最古の傳統を有する者なり。歐州の美術史は、幾多の異なりたる民族と國民とによりて經緯せられたり。其の人種を言へばセミチックあり、アリアンあり。其の民族を言へば猶太あり、ヘレネあり、羅甸あり、チュートン、ノルマン、スラヴあり。其の國を言へば、希臘あり、羅馬あり、亞剌比亞あり、以太利あり、英、佛、獨、西あり。其の美術や壯大富麗、素より深く欽慕すべしと雖ども、而かも能く國民的統一を保ちて一千年以上の發達を經由せるもの、未だ我邦の如きはあらず。且つ夫れ歐州美術は畢竟希臘に起源せるアリアン人種の美術なり、其の樣式、精

神、趣味、おのづから是れアリアン的也。是の點より見れば、一千年の歷史を有する日本美術は、世界の藝術に向つて多大の貢獻を爲したるものと謂はざるべからず。何となれば、アリアン人種の邦國以外に、完全なる美術の歷史を有するもの、渾圓球上獨り日本あるのみ。是の日本千年の美術ありて、玆に世界の藝術は其のアリアン的趣味の單調を免れ、歐州美術以外、全く其の風格趣味を異にせるチュラニアン的美術あることを得たれば也。世界は當に日本に向つて、其の一千年の美術を有せることを謝せざるべからず。日本は當に世界の爲に是の貴重なる財寶を維持し、且つ其の圓滿なる發達を將來に計畫せざるべからず。是の如くにして日本は世界歷史の進程に向つて、最大最貴の貢獻を爲し得べき也。吾人は顧みて是の貴重なる日本美術の保護、觀察、研究、進歩の爲に、一大博物館の建設せられたる無きを恨みとする者也。

今や歷史上に著名なる美術は本邦の各地に散在し、空しく庫裏に龕藏せられて容易に公衆の眼に入らず、而して是等古代の美術を藏する古社寺の回祿の災に罹るもの、年々相次ぐ。幸に風霜災異の難を遁れたるものも、保管其の宜しきを得ざるが爲に、腐蝕朽廢せざるも

の殆ど稀なり。若し一大美術博物館ありて、事情の許す限り是等の古美術を收容し公開せば、啻に保護存續の目的を達するのみならず、一般社會に對するの利益亦顯著なるものあらむ。美術家の如きは當來の覺悟に關して特に多大の恩澤に霑ふべき也。見よ、コシモ一世が壯大なる美術館をフヰレンツェに建てて古今の精英を蒐め、徽宗皇帝が翡翠閣を築きて天下の珍寶を列ね、若しくは東山義政が當代の美術家を集會して君臺觀の珍奇を品騭、鑑賞したるが如きは、皆是れ從來の美術に至大の刺擊を與へ、其の進歩興隆を促がしたる一大原因なることは、美術史家の夙に認識する所にあらずや。

美術博物館設立の必要や暫らく是れを了せりとせむ。吾人の次に當事者の注意を請はむと欲するは其の排列の方法にあり。從來本邦の博物館にありては物品陳列の方法、一言すれば分析的なり、是の如きは少くとも美術博物館に關して其の宜しきを稱すべからず。凡そ美術は其の時代の人文と相待つて初めて其の存在の眞意義を見るべきもの也。畢竟一幅の山水、一基の彫像の是の社會に現はるゝや、其の周圍の文物是れを要したればなり。されば慈悲忍辱、相好圓滿の佛菩薩の靈像は、幔蓋莊嚴の伽藍に於て初めて其の妙品を悟るべし。若し是

れを玻璃筐内に移し、番號題名を附して商店の貨物の如くせば、恐らくは作者が一刀三禮の妙趣、得て探知すべからざらむ。東山名物の梵竺僊も四疊半を離れては多少の韻致を失ふべく、在中庵の茶入も椅子テーブルの上にては竹を以て木に接するに等しからむ。是を以て美術の眞趣は、其の時代を後景として初めて了解せらるべし。吾人は是の點より見て、本邦美術に關して所謂時代博物館の設立を希望するものなりと雖ども、一國立美術館だに存せざる今日に於て是れを言ふ、尚ほ其の期の早からむを恐る。是を以て吾人は、セメテは普通の美術博物館中に於て、從來の無趣味なる分析法を用ゐず、成るべく綜合的方法によりて、一時代の文物境遇と當時の作品とを品騭比照せむことを望む。是の如くせば美術に對して多少時代的後景を添ふるを得べく、又隨つて各時代に於ける樣式、風格の變遷を目睹するを得む。溫古の識是れによりて得らるべく、知新の道亦是れによりて開かれむ。吾人は顧みて今の帝室博物館の雁雜にして統一なきを恨みとする者也。

（明治三十二年四月）

藝術界の尙古主義

尙古主義は藝術批評の初期に於て免れ難きものなる乎、吾人は本邦藝術界の現狀を見て是の感あるや久矣。

例へば推古、奈良の彫塑に於ける、弘仁、寬平、貞元の繪畫に於ける、我が邦人の常に好尙して措かざる所也。或は高雅と稱し、或は雄渾とたゝへ、猶ほ支那人が先王の遺法に對するが如く、一切の批判を絕して偏に崇拜を事とするもの、今日尙ほ一部の鑑賞家に於て見る所也。吾人は決して彼等に鑑識の明無しと謂はざるべし、唯習に憂ふ、因襲の久しき、知らず識らず尙古主義の圈套を擺脫する能はざるに非ざる乎。尙古主義は藝術批評の初期に於て或は免るべからざるものなるべし。然れども、そが一旦意識せられたる後に於ては、速に打破し去られむことを要す。

凡そ美術に於ても、文學に於ても、尙古主義は常に功過の兩面を有す。過去藝術の歎美によりて將來藝術の新發達を鼓舞するは、其の功績の一面也。然れども漸く發達し初めたる新

藝術に對して、再び復古的束縛を加ふるに及びて、其の過失の一面を見る。烱眼なる批評家は、其の功未だ終らず、其の過未だ始まらざるに當り、尙古主義に付與するに適當なる歷史的價値を以てせむことを要す。

往日キンケルマン氏は、歐州の藝術史上に於て尙古主義の批評家なりき。希臘彫刻の歎美を旨とせる氏が一卷の古代美術史は、慥に當時歐州の藝術界に一新趣味を輸入したりき。然れども是れ一時の功のみ。十九世紀の藝術が尙古主義の打破によりて向上の進路を拓きたるの事實は、何人も知る所に非ずや。吾人は是の點に關して我が藝術家及び藝術批評家の三省せむことを望む者也。

（明治三十二年七月）

何ぞ自ら居る事卑きや

藝術は生命なり、人格なり、内より發すべくして外より強ふべからず。藝術は自己の作品に對しては生母なり。

紫黄を塗抹するもの、必ずしも畫學にあらず。畫題募集とは何の意ぞ。

題案の選擇は天才の試石なり、自ら畫題を選擇する能はざるものは、初めより畫かざるに如かず。

（明治三十二年二月）

大佛露佛說

〔妻木博士の非露佛說を駁す〕

一　序　言

歷史の徵證を存し、美術の標範を遺さむが爲めに、所謂古社寺保存の擧あるは、盛代の餘澤、洵に喜ぶべき事ながら、主義なく、識見なく、たゞ古代のものとし言へば一も二もなく修繕保存することとならば、是の上もなく無意義の業ならむかし。國家が容易ならざる財政の内より、年々巨額の經費を支出する有り難き旨趣に照らしても、斯かることは萬々有るまじき也。

吾人はかねてより今の所謂古社寺保存に就いて疑ひを挾み、曾て是の事を述べし時、奈良大佛殿保存の謂はれなき由をも論じて、無主義なる古社寺保存の一例とはなしたりき。其の後、古社寺保存の主義に關しては、當局者は吾人の疑ひを解くべき何等の辯白をもなさざり

しが、大佛殿の事に關しては、近時內務技師妻木博士の駁論に接しぬ。この駁論は同氏が大佛殿修繕設計の爲めに奈良に出張せる際、同地の人士に語られたるものの由なれど、既に去月末の各新聞に掲載せられてより、今日まで同氏の正誤文に接せざることなれば、大佛殿修繕技師たる妻木氏の責任ある意見として見るも不可なかるべし。大佛殿に關する吾人の意見は、氏が是の駁論に接したる今日に於ても、毫も異なる所無きを以て、吾人は吾人の言責上より一言、氏の說を駁し、江湖識者の審判を待たむと欲す。

吾人は大佛露佛說を唱ふるものの一人也、其の主もなる理由は左の如し。

一、大佛は大佛たる性質上、本來露佛たるべきもの也。

二、大佛殿は大佛保護の用を爲さずして、却て大佛破壞の害を爲すもの也。

左に是れを畧說し、而して後妻木氏の意見に及ぶべし。

二　大佛は露佛たるべきもの也

吾人は今日に於て、宗教的崇拜の目的物として大佛を見るの要を見ず。國家が古社寺及び

古佛像の保存を國家事業となしたる精神も、亦決して宗教上の意味あるものに非ざるべし。曰く、國史の徵證を存す、曰く、美術の標範を垂る。其の目的宗教的信仰と爲す無きこと炳焉として疑ひを容れざる也。既に歷史上の遺物、又は美術上の製作として見る以上は、大佛は其の本來の性質上、當に露佛たるべき者也。

審美上凡そ大像體を近距離より觀る程醜なるはなし。彫塑にまれ、繪畫にまれ、作品の全體を一目の下に觀照し得ることは、其の審美上の完全なる效果を收むる上に於て、絕對的に須要なる條件也。此の一手を視、彼の一足を望み、補綴して想像するところのもの、是れ寄木細工のみ。是れを外にしては形體の統一と、是れを內にしては感情の融合と、兩つながら望み得べからず。良しや圓滿最勝の佛像たりとも、須彌壇下より是れを仰視せば、見る所のものは大脣のみ、巨眼のみ、大いなる手足、大いなる胴體のみ、齊對もなく、比例もなし。況してや典雅沈靜の容姿、慈悲忍辱の相好、爭でか觀照し得らるべき。名工鉅匠の技倆も亦現はるゝに由無き也。若し是れを廣闊の地に遷し、百步を隔てて瞻望するを得せしめば、形體眉目秀靈、初めて看取し得べし。畢竟、大像體を近距離より仰視せしむるは全く藝術の面

目を蹂躙する者也、藝術の價値を埋沒するもの也。

今夫れ奈良の大佛は、建立以來數回の禍災に罹り、佛頭佛手舊時の物に非ず、隨うて藝術上必ずしも優秀の製作を以て許すべからずと雖ども、而かも其の下體蓮座の大部分は、天平勝寶の遺物にして、其の手法、其の樣式以て百代の遺範たるに足る。本邦歷史上の徵證として見るも、最も貴重すべき遺物なりとす。是の如き佛像は國寶として保存すべきものなること、素より言を待たざる也。然れども、保存の目的は單に保存するを以て達せるに非ず、藝術上よりは當代の手法樣式を明にし、製作全體の風格を知らしむべく、歷史上よりは後人をして眞に當時の文明を追想せしむるに足るもの無かるべからず。殿堂を以て像體を掩蔽し、僅に蓮座下よりの外は全く瞻望の途を杜絕するは、是の如き目的を達する上に於て、最も有害なる設備に非ざるべき乎。若し宗教的崇拜の眼を以てすれば、佛體を風雨中に露出することは忍び難き事なるべし。往昔、後白河天皇が賴朝を大檀越として殿堂再建の願を發し給ひ、もしくは貞享年間、公慶法師が大殿經營の志を起したるは、皆是れが爲めなりき。然れども今日にありては、大佛の存在は、歷史の遺物、美術の標範たるの外、何等の意義をも有せざる也。若し大佛にして保存せらるべくむば、そは飽く迄歷史の遺物、美術の標範たるを目的として保存せられざるべからず。卽ち、其の大佛たる本來の性質上、當然露佛として保存せらるべき也。

三　大佛殿は大佛の破壞者也

且つ夫れ大佛殿は、大佛を保護するものに非ずして、却てそを破壞する者也。大佛自らは風雪雨露を意とするものに非ず、彼は毫も其の頭上の屋蓋を德とすべき理由を有せざるもの也。

古來大佛殿建立の目的は、大佛保護に存せしならむ。然れども是の目的は全く空想にして、却て反對の結果を生ずべき者なることは、歷史上の事實是れを證明して餘りあり。治承四年、平重衡南都の僧侶を征伐するや大佛殿亦兵燹に罹り、大佛其の頭首を失へり。若し大佛をして初めより露佛たらしめば、是の如き禍ひ素より無かるべく、隨うて凡庸なる陳和卿等を煩はして佛頭佛手を再鑄するの要も無かるべく、恐らくは今日に到るまで天平時代の純

粹なる像式を保存し得たりしならむを、深く悼惜すべき也。治承四年に破壊せられたる佛體及び殿堂は、壽永、建久の間に再建せられしが、凡そ四百年を經て同一の災禍に遭遇せり。卽ち永祿年間、三好、松永の亂に際し、大佛殿は再び兵火に燒かれ、佛頭復た斷落せり。斷落せる佛頭は幾もなく造續せられしが、爾來殿堂興らざること百三十餘年、貞享年間に到り公慶法師なるものあり、將軍綱吉を大檀越として再興を企て、寛永年間に落成せしもの卽ち今日見る所の奈良大佛殿也。

是の如く、大佛殿は啻に大佛を保護したる形跡無きのみならず、常に其の破壞者たるの觀ありき。若し東大寺藏する所の大佛木型と稱するものにして、眞に建立當初の形式を傳へ得たりとせば、金銅盧舍那佛は其の五丈三尺の大いさを外にするも、眞に本邦藝術史の一大偉觀たり。若し是れをして今日に存せしめば、技巧の妙、亦恐らくは藥師寺の釋迦三尊をして其の盛名を擅にせしめざりしならむ。是の如き微妙なる佛體の破壞者は、常に其の保護者の名によりて建てられたる殿堂なりき。是の如く殿堂が大佛の破壞者たることは、啻に過去に於てのみならず、將來に於ても亦然るべし。大佛保存の爲めに計るに、斯かる殿堂は一日も

早く解體し、其の禍根を永遠に斷滅するの策に出でざるべからず。卽ち大佛は其の大佛たるの性質上、當然露佛たるべきのみならず、其の保存の上より見るも、亦當然露佛たるべきもの也。

四　妻木氏の非露佛說

以上は吾人が大佛露佛說の要領也。內務技師にして大佛修繕の設計者たる妻木賴黃氏は、非露佛說を以て吾人の說に反對せられたり。但し氏の說は訪問者に對する一場の談話にして、素と正式の論文に非ざるが故に、詳細を知るに由なしと雖ども、尙ほ其の要領を解するに餘りあり。左に是れを紹介し、是れに對する吾人の卑見を開陳せむ。

吾人の見る所を以てすれば、妻木氏の非露佛說は左の二個の理由に外ならざるが如し。

一　聖武天皇御本願の建立、賴朝の再造、竝に公慶法師の苦心に對しても、大佛は露佛となすべきものに非ず。

二　現在の大殿は學術未開時代の木造建築としては、造構の妙巧、世界に誇るに足る、是

れ保存せざるべからず。

以上二個條の理由は極めて明瞭也。然れども非露佛說の理由としては、吾人は其の薄弱なるに驚かざるを得ず。抑〻當局者たる內務技師が、是の如き薄弱なる理由によりて非露佛說を公言するは、寧ろ吾人の意外とする所也。

五　妻木氏の非露佛說の批評

妻木氏が擧げたる二個條の理由は、毫も吾人の露佛說を否定せる者に非ず。吾人の主張する所は、大佛は美術上の製作及び歷史上の遺物として、又大佛其物の保存の上よりして、當然露佛たるべしと謂ふにあり。然るに妻木氏の主張する所は、聖武帝以下、殿堂建立者の本願に對し、現存殿堂の巧妙なる造構に對して露佛たるべからずと謂ふにあり。吾人と氏と、其の說に於て全く把柄を異にす。畢竟氏の說は、吾人の露佛說を否定するに於て毫釐の効力無き者也。是れに反して、吾人は却て妻木氏の二個條の理由を否定せむと欲す。

妻木氏が擧げたる第一の理由は、全く國家が古社寺及び古美術の保存を國家事業と爲したる精神を無視せるもの也。氏は殿堂建立者たる聖武天皇、源頼朝、公慶法師の素願に對しても露佛とすべからずと謂ふと雖ども、是れ見當違ひの論なるのみ。美術の模範を垂れ、歷史の徵證を存すると、先聖の遺志を繼紹するとは、全く別種の事業に屬す。且つ夫れ是等建立者の素願も大佛保護に外ならず、而かも殿堂が是の素願に反して、却て大佛破壞者たるの事實は史乘に昭々たり。然らば則ち、妻木氏にして眞に建立者の素願を奉體せむと欲せば、一日も早く殿堂を撤去して露佛とすべきに非ずや。要するに氏が第一の理由は、啻に見當違ひの論なるのみならず、自家撞着の証を免れず。

若し夫れ第二の理由は、殿堂保存說のみ、非露佛說には非ざる也。大佛殿が木造建築として世界有數の大造營なる事、學術の開けざる德川時代の建築物として其の巧妙なる構造の世界に誇揚すべき事、是等の事は暫らく專門學者の說として吾人是れを了すべし。而かも是の如き事實を認めたる必然の結果として、吾人は何故に大佛非露佛說をも承認せざるべからざる乎。是の如き建築は眞に保存すべき價値あらむ、而かも殿堂の保存を須要とするが爲めに、何故に同時に露佛說を否定せざるべからざる乎。殿堂にして保存すべくむば則ち保存す

べし、大佛にして露佛たる可くむば則ち露佛たるべし、是の間何の支障かある。殿堂が大佛を待たざれば存在し得ざる時代は既に已に過ぎ去り、今は則ち古社寺保存の時代也、而して所謂古社寺とは建築物の謂に外ならざる也。其の本尊諸佛像も亦美術として取扱はるゝ外、何物としても取扱はれざるに非ずや。一言すれば、吾人は妻木氏の第二の理由を否定するものに非ず、然れども是れ殿堂保存の理由にして非露佛說の理由に非ず、而して殿堂保存は吾人の最も希望する所たる也。

是に於て吾人は妻木氏に希望す、今回の大佛殿修繕を機會として、大佛と殿堂とを分離ることにせば如何。聞くが如くむば、修繕の設計は、藥師寺、唐招提寺に於けるが如く全部を取崩して更に現形に組立つる者なりと謂ふ、果して然らば爲めに適當の地を選擇して、殿堂もしくは大佛を移轉し、兩者別々に存在することにせば如何。是の如くにして大佛の露佛と、殿堂の保存と、兩立せしむること亦可ならずや。殿堂の美は大佛に待つ所無し、大佛は却て殿堂あるが爲めに瞻視の便宜を失ひ、震火の禍災を被る、强ひて兩者を結合するは、無意義の極と謂ふべし。妻木氏及び大佛非露佛論者、以て如何となすや。

六　吾人の希望

終りに吾人は、吾が聰明なる當局者に對して一言する所あらむと欲す。古社寺及び古美術の保存は、國家の最も須要なる一事業也。然れども若し善良なる主義方針に據りて爲さるゝに非ざれば、或は啻に有終の美を濟さざるのみならず、時に却て千年の悔を貽さむことを恐る。古社寺保存と云ふが如き事業の爲めに、年々鉅額の經費を支出しつゝある我が國家は、今日如何に財政に困弊しつゝあるかを思はば、當事者の責任亦一層の重きを加へざるべからず。顧ふに大佛殿の如きは一例ならむのみ。古社寺保存の大方針に就いて、我が當局者が如何の定見を有するや、吾人はそを聞かむことを望む也。專門技巧の士各〻其の道に於て精しき所あるべし、而かも大體の方針に就いては、別に有識者の銓定に待たずむば、或は不測の失敗を招かむことを憂ふ。吾人は我が當局者が是の點に於て三思せむことを冀ふもの也。

（明治三十二年九月）

把酒問月

李白

青天有月來幾時　我今停杯一問之
人攀明月不可得　月行卻與人相隨
皎如飛鏡臨丹闕　綠烟滅盡清輝發
但見宵從海上來　寧知曉向雲間沒
白兎擣藥秋復春　嫦娥孤棲與誰鄰
今人不見古時月　今月曾經照古人
古人今人若流水　共看明月皆如此
唯願當歌對酒時　月光長照金樽裏

(234頁)

藝術の鑑査を論ず

去月下旬、臨時博覽會鑑査官の任命ありてより、世人は美術の鑑査てふことに就いて稍注意し來りたるが如し。乃ち玆に是の題目に關して吾人の意見を述ぶる、必ずしも無用の業に非ざらむ乎。

所謂藝術の鑑査とは藝術の價値を銓定するの謂也。而して價値とは比較上の概念にして、比較は標準の存在を預斷す。是に於てか、藝術評價の標準如何てふ陳套の疑問起らざるを得ず。然れども此の如き標準は到底、嗜好の外に存するを得ざるべし、何となれば藝術の價値は翫賞を待つて初めて生じ、翫賞は嗜好によりて起るものなれば也。而して嗜好は主觀の上に存す、卽ち是れ個人的也。個人的なる嗜好は如何にして藝術の客觀的評價の標準たり得べき乎。若し嗜好にして爭論を許さざるものならむには、所謂藝術鑑査の意義那邊に存する乎。若干人士をして藝術鑑査の事に當らしむるは、藝術の評價と如何なる關係を有する乎。而して藝術家其人は、是の際如何なる態度を取りて鑑査の結果に對すべき乎。吾人は以上の問題

に就き、左の順序によりて聊か卑見を陳述せむと欲す。

一、個人的嗜好。

二、藝術批評家及び其の資格。

三、藝術批評家に對する藝術家の態度。

四、臨時博覽會鑑査官の選任。

一　個人的嗜好

藝術評價の標準は卽ち美の標準也、美の標準如何とは卽ち是れ古來美學の根蔕に横はれる一大疑問にして、今に及びて尙ほ未了の題案に屬す。然れども美其物に關する哲學上の解釋は如何にあれ、動かすべからざる事實は、美は翫賞を待つて初めて美たるの一事也。凡そ美は評價の對境たるを以て其の本性となす、而して評價なるものは是れを評價するの主體ありて初めて生ず、故に美は最も嚴密なる意味に於て主觀的のものなり。夫の例へば數理の如きものは人是れを認むるも、又是を認めざるも、其の眞たるに於て累はさる所無し。二の二倍

は四なりとの眞理は、如何なる場合に於ても眞理たるを失はず。然れども、美は是れを評價する者を待つて初めて美なることを得。運慶の彫刻も、雪舟の山水も、是れを解せざるものにとりては無價値なり、隨うて非美なり、彼れにして其の價値を認めざる以上は、何人も彼れに向つて其の美を强ふべき權利無し。畢竟、美の評價は翫賞によりて生じ、而して翫賞は嗜好に緣りて成る、故に美の標準は個人的嗜好に外ならざる也。

是れ寧ろ自明の理、何人も經驗上の事實として承認せざるべからざる所也。唯獨逸流の哲學者が、純理哲學の世界觀を基礎として一切を打算せむとするや、個人的嗜好を超越して別に美の容體を立せむと擬すと雖ども、觀美意識の說明としては未だ適切なりと謂ふを得ず。純理哲學の偏癖に陷らざる多くの學者は、其の所說に於て必ずしも一致せざるに拘らず、嗜好の批判を以て其の學說の根據と爲すは則ち一軌に出づ、是れ寧ろ當然の事理なりとす。

怪しむべきは多くの人が審美上の批判に關して、是の當然の事理を看過すること也。學者も亦常に個人的嗜好以外に美の客觀標準を立せむとするの傾向あるは、爭ふべからざる事實也。是の如き事實は單に誤謬として閑却すべきものなる乎、或は又人類の觀美意識其物の中

に必然なる根據を有するものと見做すべき乎、是れ問題也。既に嗜好と云ふ、卽ち其の量に於て個人的たり、其の質に於て感情的たり。既に感情的なり、故に關する所は快と不快とならざるべからず。而して快と不快は人心の最も不定なる現象也、倏然として去來し、忽爾として昇沈す、素より一定の規矩を以て測度すべきに非ず。然らば則ち美の標準なるもの、亦素より恒久なるを得ざるべき也。然るに古へより、美術の批評家又は美學者は、一方に於て嗜好の個人性を認めながら、他方に於ては如何にしても平等普遍の美的標準を求めむとせるは何故ぞ。是の傾向は、絕對又は理想の所現を以て美を說明せむとしたる獨逸派の哲學者に於てのみならず、英國經驗派の多數に於ても亦均しく認むる所也。是の如きは單に人性の不合理なる渴仰として看過すべき事なる乎、或は又觀美意識其物の本來の性質として見るべきものなる乎。

吾人の見る所を以てすれば、本來主觀的なる美に對して客觀的の標準を立せむとするは決して迷妄に非ず、人類の美的意識の正當なる要求と觀るを妥當とす。人類の美的意識は一面に於て、隨時の嗜好の以外に美の標準無かるべきを要求し、而して他面に於ては、個人性を

離れて平等普遍なる美の標準あるべきを要求す、是れ論理上の矛盾なり。若し是の論理上の矛盾を調和するものあらば、卽ちそは最も美の標準たるに庶幾き者ならむ。吾人を以て見れば、是の如きものは卽ち永續てふ概念に外ならざるべし。所謂永續とは、評價の不變なるを謂ふ也、快感の永續するを謂ふ也。一個の作品に接する時、初めは太だ是れに感動するも、再次三次、漸やく感續對觀の度數を重ぬるに從ひて興味索然たるものの如きは、是れ評價變ずる也、快かざる也、未だ以て高級の美と稱するを得じ。美の優劣と云ひ高下と云ふも、所詮は永續の程度を謂へるに外ならざる也。一時の名聲如何に喧しきも、幾何もならずして顧みられざるものは、藝術中の劣等なるもの也。ホーメルの詩篇が千古の傑作と稱せらるゝは、其が嘗てアゼンス人、スパルタ人を喜ばせし如く、今も尙ほ倫敦、巴里の人を樂ましむれば也。單に一時の評價を以てすれば、ダンテも沙翁も多く稱するに足らざるべし。是の如く見來れば、永續を以て美の標準とするは大過無きに似たり。

然れども永續を以て美の客觀的標準とするは、人類の比較的多數に滿足を與ふるの謂に外ならず。數學、論理學、又は自然科學の原理の如く、是れを萬人に強ひて謬られざるものと